

續國譯漢文大成

李自_立
文學部

一

309

65

鉄
入



始



續國譯漢文大成

文學部第一冊（第一帙の一）

李太白詩集上の一

吉田仁蔵氏 蔵書印



309
65

李太白集上卷目次

總說

卷一

古風

大雅久不作	二七	齊有僊生	五九
蟪蛄薄太清	三三	黃河走東溟	六一
秦皇掃六合	三八	松柏本孤直	六三
鳳飛五千仞	四二	君平既棄世	六五
太白何蒼蒼	四四	胡關饒風沙	六八
代馬不思越	四七	燕昭延郭隗	七三
客有鶴上仙	五一	寶劍雙蛟龍	七五
咸陽二三月	五四	金華牧羊兒	七七
莊周夢蝴蝶	五七	天津三月時	六六

西上蓮花山	八四	羽檄如流星	一一一
昔我遊齊都	八六	醜女來效顰	一一八
郢客吟白雪	九一	抱玉入楚國	一三一
秦水別隴首	九二	燕臣昔慟哭	一三三
秋露白如玉	九四	孤蘭生幽園	一三五
大車揚飛塵	九八	登高望四海	一三七
世道日交喪	一〇二	鳳飢不啄粟	一四〇
碧荷生幽泉	一〇五	朝弄紫泥海	一四三
燕趙有秀色	一〇六	搖裔雙白鸕	一四五
容顏若飛電	一〇八	周穆八荒意	一四六
三季分戰國	一一〇	綠蘿紛葳蕤	一四八
玄風變太古	一一二	八荒馳驚飈	一五一
鄭客西入關	一一四	一百四十年	一五二
蓐收肅金氣	一一九	桃花開東園	一五五
北溟有巨魚	一二〇	秦皇按寶劍	一五六

美人出南國	一五六
宋國梧臺東	一五九
般后亂天紀	一六一
青春流驚濤	一六三
戰國何紛紛	一六五
倚劍登高臺	一六六

卷 一一

樂 府

遠別離	一八三
公無渡河	一九二
蜀道難	一九七
梁甫吟	二一一
烏夜啼	二二四
烏棲曲	二二七

齊瑟彈東吟	一六八
越客採明珠	一七〇
羽族稟萬化	一七二
我行巫山渚	一七三
惻惻泣路歧	一七五

戰城南	二二九
將進酒	二三四
行行且遊獵篇	二三九
飛龍引 二首	二四二
天馬歌	二四七
行路難 三首	二五四

長相思……………二六四
 上留田行……………二六八
 春日行……………二七五
 前有樽酒行 二首……………二七八
 夜坐吟……………二八一
 野田黃雀行……………二八四
 箜篌謠……………二八六

卷 三

樂 府

關山月……………三三五
 獨漉篇……………三三八
 登高邱而望遠海……………三三三
 陽春歌……………三三六
 楊叛兒……………三三七

雉朝飛……………二九〇
 上雲樂……………二九二
 夷則格上白鳩拂舞辭……………三〇一
 日出入行……………三〇七
 胡無人……………三一
 北風行……………三一五
 俠客行……………三一九

雙燕離……………三四〇
 山人勸酒……………三四二
 子闌採花……………三四九
 鞠歌行……………三五二
 幽調泉……………三五七

王昭君 二首……………三五九
 中山孺子妾歌……………三六四
 荊州歌……………三六六
 設辟邪伎鼓吹雉子斑曲辭……………三六八
 相逢行……………三七二
 古有所思行……………三七三
 久別離……………三七五
 白頭吟……………三七七
 採蓮曲……………三八七
 臨江王節士歌……………三八九
 司馬將軍歌……………三九二

卷 四

樂 府

門有車馬客行……………四三七

君道曲……………三九七
 結襪子……………三九九
 結客少年場行……………四〇一
 長干行 二首……………四〇四
 古朗月行……………四一二
 上之回……………四一五
 獨不見……………四一八
 白紵辭 三首……………四二一
 鳴雁行……………四二七
 妾薄命……………四三九
 幽州胡馬客歌……………四三三

君子有所思行……………四四一

東海有勇婦	四四四
黃葛篇	四四九
白馬篇	四五二
鳳笙篇	四五四
怨歌行	四五七
塞下曲 六首	四五九
來日大難	四六七
塞上曲	四七一
玉階怨	四七五
襄陽曲 四首	四七六
大隄曲	四八〇
宮中行樂詞 八首	四八二
清平調詞 三首	四九二

卷 五

鼓吹入朝曲	五〇四
秦女休行	五〇六
秦女卷衣	五〇九
東武吟	五一二
邯鄲才人嫁爲厮養卒婦	五一五
出自薊北門行	五一七
洛陽陌	五二〇
北上行	五二二
短歌行	五三五
空城雀	五三八
菩薩蠻	五三〇
憶秦娥	五三二

樂 府

發白馬	五三七
陌上桑	五三九
枯魚過河泣	五四二
丁督護歌	五四五
相逢行	五五〇
千里思	五五四
樹中草	五五六
君馬黃	五五七
擬 古	五六〇
折楊柳	五六二
少年子	五六三
紫驪馬	五六四
少年行 二首	五六六

白鼻騮	五六八
豫章行	五六九
沐浴子	五七三
高句驪	五七五
靜夜思	五七六
渌水曲	五七七
鳳凰曲	五七九
鳳臺曲	五八〇
從軍行	五八一
秋 思	五八二
春 思	五八三
秋 思	五八五
子夜吳歌 四首	五八七

對酒行……………五九四
 估客行……………五九六
 擣衣篇……………五九八
 少年行……………六〇三

卷六

歌吟

襄陽歌……………六三三
 南都行……………六四〇
 江上吟……………六四三
 新鴛百囀歌……………六四六
 玉壺吟……………六五〇
 幽歌行、上新平長史兄粲……………六五三
 西嶽雲臺歌、送丹邱子……………六五六
 元丹邱歌……………六六一

長歌行……………六〇七
 長相思……………六一一
 猛虎行……………六一二
 去婦詞……………六二五

扶風豪士歌……………六六二
 燭照山水壁畫歌……………六六七
 白毫子歌……………六七〇
 梁園吟……………六七三
 鳴皋歌、送岑徵君……………六八〇
 鳴皋歌、奉餞從翁清歸五崖山居……………六九〇
 勞勞亭歌……………六九三
 橫江詞 六首……………六九五

金陵城西樓月下吟……………七〇一
 東山吟……………七〇三
 僧伽歌……………七〇六
 白雲歌、送劉十六歸山……………七一一

卷七

歌吟

秋浦吟 十七首……………七二七
 當塗趙炎少府粉圖山水歌……………七四三
 永王東巡歌 十一首……………七四八
 上皇西巡南京歌 十首……………七六〇
 峨眉山月歌……………七七〇
 峨眉山月歌、送蜀僧晏入中京……………七七三
 赤壁歌、送別……………七七六
 江夏行……………七八〇

金陵歌、送別范宣……………七二三
 笑歌行……………七二六
 悲歌行……………七三一

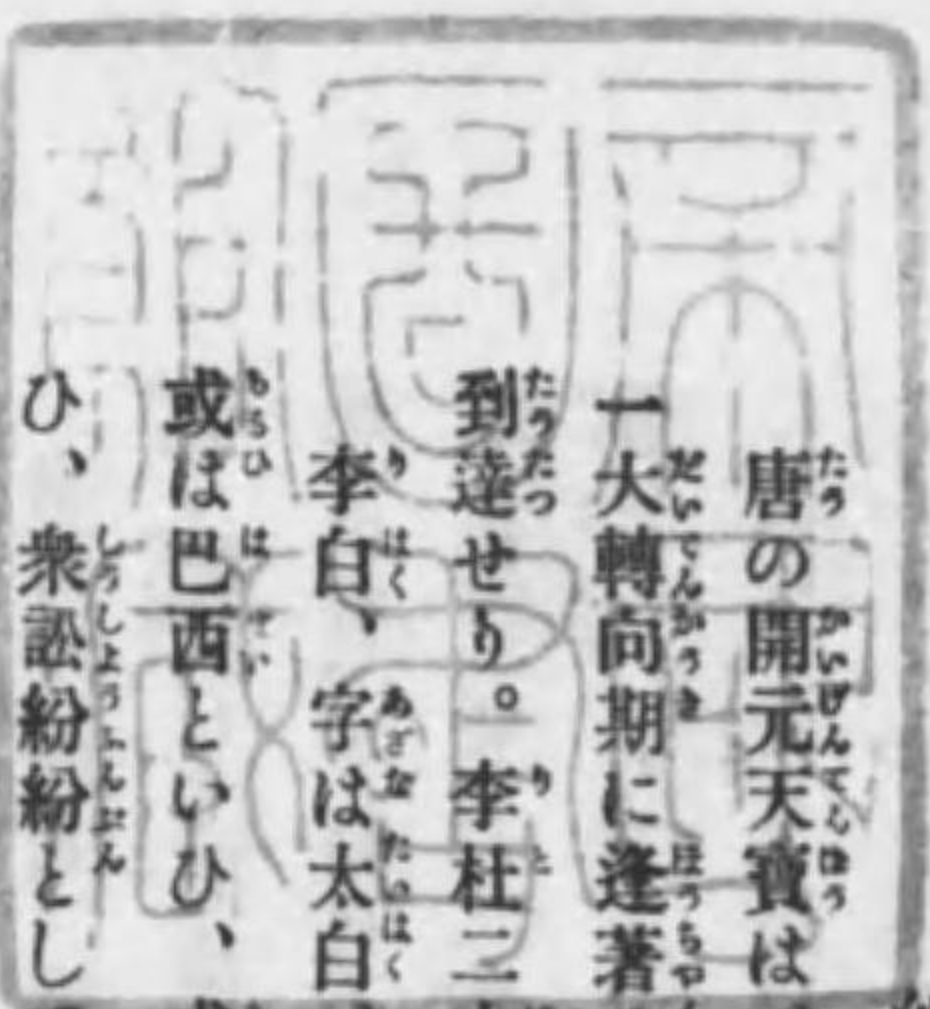
懷仙歌……………七六五
 玉真仙人詞……………七六六
 清溪行……………七八八
 酬殷明佐見贈五雲裘歌……………七九〇
 臨路歌……………七九五
 古意……………七九六
 山鷓鴣詞……………七九九
 歷陽壯士勳將軍名思齊歌并序……………八〇一

草書歌行……………八〇四

和盧侍御通塘曲……………八二〇

李太白集

文學博士 久保天隨 譯解



總說

唐の開元天寶は、玄宗の至治、方に極まり、唐祚又衰替に變せむとする時にして、歴史は、ここに一大轉向期に達せり。而して、唐詩は、太平の澤に煦濡せられ、俄然隆興して、恰も、その頂點に到達せり。李杜二人、實に此時に當る。

李白、字は太白、その世系郷貫等に就いては、異說頗る多く、或は隴西といひ、或は蜀といひ、或は巴西といひ、或は山東の産なりといひ、又或は李廣の後といひ、或は涼の武昭王魯の後なりといひ、衆認紛紛として、決するところなし。然れども、その詩文自述に據れば、系は實に隴西の李廣に出で、武昭王に於ては、九世の孫たり。隋の末に當つて、その先世、事を以て、西域に徙り、姓名を易ふ。故に唐興つて以來、屬籍に漏れ、武后の時に至り、子孫、はじめて内地に歸り、蜀の錦州に家せしが、その邑を逋せしに因り、遂に客を以て名となす、即ち白の父なりといへり。白、唐の長安元年辛丑を以て生まる。驚妾の夕、長庚星、夢に入る、故に白と名づけ、太白を以て之に字す。青蓮居士

士、酒仙翁の如き、皆その自ら號するところに係る。その幼時は、固より詳にし難きも、五歳にして能く六甲を誦し、十歳にして詩書に通じ、百家を觀たりといふ。この間、一遺事を傳ふ。白の徵時、縣の小吏に募られ、令の臥内に入る。かつて、牛を驅つて堂下を經るや、令の妻、怒つて、將に詰責を加へむとす、乃ち詩を以て謝して云ふ。

素面倚欄鈎。嬌聲出外頭。若非是織女。何必問牽牛。

令、驚異して問はず、稍や親しく招引して、硯席に侍せしむ。令、一日、山火の詩を賦して云ふ、野火燒山後、人歸火不歸、と。思、軋して屬せず。白、傍より、その下句を繼つて云ふ、餘隨紅日遠、煙逐暮雲飛、と。令、慚ぢて止む。これに頃くして、令に従つて漲を觀る、女子の江上に溺死するあり、令、苦吟して云ふ、二八誰家女、飄來倚岸蘆、鳥窺眉上翠、魚弄口邊朱、と。白輒ち聲に應じ、これに繼いで曰く、綠髮隨波散、紅顏逐浪無、何因逢伍相、應是想三秋胡、と。令、滋す悦ばず。白恐れて、棄てて去る。この事、年時を詳にする能はずと雖も、もし實なりとせば、必ず十一二歳の交なるべし。年十五、劍術を好み、徧ねく諸侯を干し、又奇書を讀み、賦を作りしといふ。年二十に及び、儒儒にして、縱横の術を喜び、劍を撃つて任俠を爲し、かつて、數人を手刃せしことあり、又財を輕んじ、施を重んじて、産業を事とせず。この年、禮部尚書蘇頌、出でて益州刺史となる。白、路中に於て刺を投するや、颯、待つに布衣の禮を以てし、因つて、羣僚に謂つて曰く、この子、天才英特、筆

を下して休まず、風力未だ成らずと雖も、且つ專車の骨を見る、もし之を廣むるに學を以てすれば、相如と比肩すべしと。その推稱せられしこと、かくの如し。逸人東巖子といふもの、岷山の陽に隱る。白、これに従つて遊び、巢居多年、城市に至らず、奇禽千許を養ひ、呼べば、皆掌に就き、食を取つて了り、驚猜なし。郡守、聞いて之を異とし、廬に詣つて親しく觀、因つて、二人を擧ぐるに有道科を以てせしが、ともに起たす。

開元十二年、白出でて襄漢に遊び、南、洞庭に浮び、東、金陵、揚州に至り、更に汝海に客となり、還つて、雲夢に憩ふや、故相許圜師の家、孫女を以て之に妻はし、遂に安陸に留まること十年。その安州裴長史に上る書中、自ら其閱歷を詳述して曰く、以爲へらく、士生まるれば、桑弧蓬矢、四方を射る、故に大丈夫必ず四方の志あるを知り、乃ち劍に杖いて國を去り、親を辭して遠遊し、南、蒼梧を窮め、東、溟海を涉り、郷人相如、大に雲夢の事を誇り、楚に七澤ありといひしを見て、遂に來り觀る。而して、許相公の家に招かれ、妻はすに孫女を以てせられ、跡を此に憩うて、三霜を移すに至る。さきに、維揚に遊ぶや、一年を踰えずして、金を散ずる三十餘萬、落魄公子あれば、悉く之を濟ふ。又むかし、蜀中の友人吳指南と同じく、楚に遊び、指南、洞庭の上に死するや、白、屍に伏して慟哭し、天倫を喪ふが如し、行路聞くより、悉く皆傷心す。猛虎前に臨めども、堅守して動かす、遂に權りに湖側に殞し、便ち金陵に之き、數年にして來り觀れば、筋肉猶ほ在り、乃ち聲を呑んで刀

を持し、嗚咽して殘肉を洗削し、骨を裹み、徒歩寢興して攜持し、丐貸して鄂城に埋葬せり、と。
 開元二十三年、太原に遊ぶ。哥舒翰の座中に於て、一少年の一隅に屏息するに逢ふ。白、一見、これを座の中央に抜き來つて曰く、この壯士、目光火の如く人を照らす、十年ならずして、當に節旄を擁すべし、と。因つて、屢ば其刑責を脱せしむ。又譙郡の元參軍と妓を攜へて、晉祠に遊び、舟を浮べ、水を弄す、皆この時の事に係る。すでにして、去つて齊魯に之き、家を任城に寓し、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔と徂徠山に會し、酣飲酒を繼にし、竹溪の六逸と號す。この年、司馬子微、天台に化形す。白の大鵬賦の序に云ふ、余、むかし、江陵に於て、天台の司馬子微を見る、余に仙風道骨あり、與に入極の表に神遊すべしといふ。因つて、大鵬、希有鳥に遇ふの賦を著し、以て自ら廣む、と。この賦、何の年に作りしかを詳にせず、便を以て此に附記すといふ。

天寶元年、白歲四十二、會稽に遊び、道士吳筠とともに剡中に居る。會ま、筠、名を以て關に赴く、故に白も亦た長安に至り、往いて、賀知章を見る。知章、その文を見て、嘆じて曰く、子は謫仙人なりと、因つて、金龜を解き、酒に換へて、樂を爲す。すでにして、玄宗に見ゆ。これに就いて、或は吳筠これを薦むといひ、或は賀知章これを薦むといひ、或は玉眞公主これを薦むといひ、或は蘇頌、趙蕤の術數とともに之を薦むといひ、その紛紛たること、亦たその產地と祖宗とを爭ふ狀の如し。今、深く究めず。玄宗、召して金鑾殿に見るや、當世の事を論じ、頌一篇を奏す。帝、食を賜ひ、親ら羹

を調し、詔あり、翰林に供奉たらしむ。帝、白に謂つて曰く、卿は是れ布衣、名、朕の爲に知らる、もとより道義を善ふるものに非ざれば、何を以て此に至らむや、と。白、すでに酒を嗜む、日日、飲徒と酒肆に遊び、因つて、飲中八仙の稱あり。

開元中、禁中はじめて木芍藥を重んず、即ち今の牡丹なり。四本、紅・紫・淺紅・通白なるものを得て上るや、興慶池東、沈香亭前に移植す。會ま花正に繁開、玄宗、名馬照夜白に乗じ、太眞妃、步辇を以て從ふ。詔して、特に梨園弟子中の尤なるものを選ばしめ、樂十六部を得たり。李龜年、歌を以て、一時の名を擅にす、手に檀板を捧げ、衆樂を押し、前んで將に之を歌はむとす。帝、顧みて高力士に謂つて曰く、この良夜美景に對し、豈に獨り聲伎を以て娛と爲さむや、もし逸才詞人を得て、これを詠出せしむれば、以て後に誇耀すべし、と。遂に命じて、白を召さしむ。時に、寧王、白を邀へて酒を飲ましめ、すでに醉ふ。左右、擁して至る。白、乃ち頓首して曰く、寧王、臣に酒を賜ひ、臣、今すでに醉ふ。陛下、臣に賜ふに、畏るるなきを以てすれば、臣、以て薄技を盡すべし。帝曰く、可なり、と。即ち、二内臣を遣して、これを扶掖し、命じて墨を研ぎ、筆を濡し、以て之に授けしめ、又二美人をして、朱絲欄を其前に張らしむ。太眞妃、硯を持し、高力士、わづかに靴を去れば、宣賜あり、翰林供奉李白、立どころに清平調三章を進めよ、と。白、欣然として詔旨を承け、なほ宿醉未だ醒めざるに苦みながら、筆を援つて之を賦す。その辭に曰く、

雲想衣裳花想容。春風拂檻露華濃。若非群玉山頭見。會向瑤臺月下逢。
一枝穠豔露凝香。雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得似。可憐飛燕倚新妝。
名花傾國兩相歡。長得君王帶笑看。解釋春風無限恨。沉香亭北倚欄干。

筆跡遺利、風跌し、龍拏む。龜年、遽に辭を以て進む。帝、乃ち梨園の弟子に命じ、約略、絲竹を調撫し、遂に龜年を促し、以て歌はしむ。太真妃、玻璃七寶盞を持し、西涼州の蒲桃酒を酌み、笑つて、歌意を領する、甚だ厚し。帝、因つて玉笛を調し、以て曲に倚り、每曲徧ねく將に換へむとすれば、その聲を運うし、以て之に媚ぶ。太真妃、飲罷み、繡巾を斂め、重ねて帝を拜す。龜年常に五王に語る、ひとり懐ふに、歌を以て自ら勝つを得るもの、これより出づるはなし、抑も亦た一時の極致のみ、と。帝、これより、李翰林を顧みること、他に異なり。嗚呼、絶代の狂仙は、希世の妖妃と並び出でて、天地第一風流天子の前に嬉戲す。この一幅の光景、宇宙一なかるべからず、而して、二あるを得ざるなり。しかも、嚇蟹の事に至りては、家國に獻替するの功、もとより多く、ここに、附記せざるを得ざるなり。

嚇蟹の事、もと新舊兩唐書に見えず、李陽氷、魏顛の二序、ともに之を載せざれども、樂史の序中には「和蕃書を草し、思、懸河の若し」といひ、范傳正の李公新墓碑、又「當世の務を論じ、答蕃書を草し、辯、懸河の如く、筆、停綴せず」といひ、劉全白の碣記亦た「和蕃書を作り、竝に宜唐鴻臚の一篇を上る」といふ。その決して、架空假設に非ざるを知るべし。はじめ渤海國の使、國書を齎らして至る。書は其地の蕃文字、滿朝の文武、一人も、曉り得ず。帝、大に怒つて曰く、この書、讀み得ずんば、何を以てか回答せむ。一たび、蕃邦の笑恥を被らば、必ず干戈を動かし、來つて邊界を犯さむ。誰か朕と共に此憂を分つものぞと。百官、戰栗して言なし。俄にして、白至る。帝、大に悦ぶ。白、御座に對し、拜し畢りて、文を唐音に翻して譯出す。曰く、渤海國大可毒の書、唐朝官家に達す。你、高麗を占了せしより、俺國の近邊に逼り、兵、屢ば吾が界を犯す。おもふに、官家の意に出でむ。俺、如今耐ふべからず、官を差し、來り講じ、高麗、一百七十六城を將て、俺に讓與せよ。俺に好物事あり、相送らむ。太白山の苑、南海の昆布、柵城の鼓、扶餘の鹿、鄭顛の豕、率寶の馬、沃州の綿、渭沱河の鮑、九都の李、樂遊の梨、你官家、すべて分あり。もし高麗に還すことを肯んせすんば、俺、兵を起し、來つて斷殺せむ、且つ那家か勝敗するかを看よ、と。白、一たび讀下するや、滿廷覺えず失驚し、龍顏殊に悦ばず。帝曰く、今、邊患を啓く、何の策を以て之に應せむ、と。衆應ふる能はず。帝、且つ白に問うて曰く、大可毒とは何人ぞ、と。白奏して道ふ、渤海の俗、その主を稱して大可毒といふ、なほ回紇の可汗と稱し、吐蕃の贊善と稱し、六詔の詔と稱し、阿陵の悉莫威と稱するがごとし、と。白、因つて奏して曰く、陛下、この事、聖慮を勞せず、來日、蕃使に宣して入朝せしめよ。臣、面のあたりに、答蕃の書を草し、大可毒をして、拱手來降せしむべし、と。帝、大に悦び、明日、朝を

設け、百官、左右に侍し、蕃使を召す。白、紫衣紗帽、飄飄然として、座に就き、一揮して答蕃の書成る。帝、一字を解せず、百官、一語を讀らず。白、乃ち唐音を以て之を譯奏す。その文に曰く、大唐天寶皇帝、渤海の大可毒に招諭す。むかしより、石卵は敵せず、蛇龍は闘はず。本朝、運に應じ、天を開き、四海を撫有し、將は勇、卒は精、甲は堅、兵は精、韻利、盟に負いて擒にせられ、普贊、鷲を請つて誓を納れ、新羅、織錦の頌を奏し、天竺、能言の鳥を致し、波斯、捕鼠の蛇を獻じ、拂菻、曳馬の狗を進め、白鸚鵡は阿陵より來り、夜光珠は林邑より貢し、骨利幹、名馬の納あり、泥婆羅、良酢の獻あり、威を畏れ、德に懷き、靜を買ひ、安を求めざるはなし。高麗、命を拒み、天討再び加ふ、傳世九百、一朝にして殄滅す、豈に逆天の咎微、衛大の明鑒に非ずや。況んや、爾は海外の小邦、高麗の附國、これを中國に比すれば一郡、士馬芻糧、萬分に過ぎず。螳怒是れ逞しうし、鵝驕不遜なるが若きだに及ばず。天兵一下、千里流血、君は韻利の伴に同じく、國は高麗の續とならむ。方今、聖度汪洋、爾が狂悖を恕す、急に宜しく過を悔い、歳事を勤修し、誅僇を取りて四夷の笑となる母れ。爾、其れ三思せよ、故に諭す、と。帝、これを聞いて大に喜び、再び白に命じて、これを蕃使に通せしむ。白、乃ち昂昂階を下り、蕃使に對し、高く蕃音を放つて之を誦す。蕃使、面色土の如く、山呼拜舞して退き、大可毒、亦た果して驚嘆して來歸す。この事、小説者流の潤飾、誇張するところとなりて、或は、白、これを以て、楊國忠をして墨を磨せしめ、高力士をして靴を脱せしめ、以て試場の辱

に報ゆといふに至る。皆取らず。唯だ嚇蕃の一事、しばらく之を取るのみ。而して、白の讒逐は、又別に之を正史に問はざるべからず。

白の讒逐、或は同列の者、能を害とし、勝つて之を成すに由るといひ、或は張垺の讒に由るといひ、或は高力士、脱靴の事を啣み、清平の詞を摘んで楊太真を激するに由るといふ。而して、後説、最も世に行はろ。清平調の詞成るや、異日、太真、重ねて前詞を諷吟し、欄に倚つて自ら嘆羨す。高力士、ひそかに戯れて曰く、臣意ふ、妃子、李白の此詞を聞かば、必ずや、怨、骨髓に入らむ、と。何ぞ反つて拳拳かくの如きや。太真驚いて曰く、翰林學士、何ぞ人を辱かしめむ。力士説いて曰く、飛燕何人ぞ、西漢成帝の後、燕赤鳳と相通じ、身を終るまで、正宮に入るを得ざりしに非ずや。今日、李白、飛燕を以て妃子に比す、妃子、何ぞ熟思せざるや、と。當時、妃、安祿山を以て養子となし、これを宮禁に入れて椒房に戲る。ここに於て、太真、深く高力士の言を然りとし、白を恨むこと、殊に甚し。帝、三たび白を官せむとす、太真、これを捍して曰く、白、輕狂、酒を使ひ、人臣の禮なし、と。すでにして、白、亦た自ら近親に容れられざるを知り、懸に山に還らむことを求む。帝、乃ち金を賜うて放ち歸す。白の長安に在るや、凡そ三年、その去るや、天寶三載を以てす。ここに於て、從祖陳留探訪大使彦允に就き、北海高天師に請うて、道籙を齊州紫微宮に授かり、これより、四方に浮遊し、北は趙魏燕晉に至り、西は邠岐を涉り、商於を歴て、洛陽に至り、南は淮酒に遊び、再び會稽に入り、



而して、家は魯中に寓し、齊魯の間に往來すること、前後十年、その中、梁宋に遊ぶこと、最も久しく、その杜甫高適と吹臺に登り、慷慨古を懐ひしも、亦た此間に在り。天寶十三載、廣陵に遊び、王屋山人魏萬に遇ひ、遂に舟を同じうして秦淮に入り、金陵に上つて、萬と別れ、復た宣城諸處に往來す。

天寶十四載、安祿山、范陽に叛し、十二月、洛陽を陥る。白、南奔して宣城より、深陽に之き、又剡中に之き、遂に廬山に入る。時に、永王璣、江陵府都督となり、山南東路及嶺南剡中江南西路四道節度使となり、白の才名を重んじ、辟して、府の僚佐となし、璣が擅に舟師を引いて東下するに及び、脅して以て偕に行かすむ。

白が永王に従ひしに就いては、後人、頗る議論あり。永王は、玄宗の第十六子、天寶十五載六月、玄宗、蜀に幸して漢中に至るや、詔を下して、璣に重職を授け、七月、璣、襄陽に至り、九月、江陵に至り、士卒を召募して、數萬人を得たり。時に江淮の租賦、鉅億萬、所在山委、情を恣にして破用す。肅宗、これを聞き、璣に詔し、還つて上皇に蜀に觀せしむ。璣、命に従はず。璣、宮中に成長し、未だ人事を更せず、自ら視ること富彊。その子襄成王瑒、勇にして力あり、兵權を握り、左右に眩惑せられ、遂に狂悖を謀り、璣に勸めて金陵を取らしめ、十二月、擅に舟師を引いて東下し、江淮震動す。時に河南招討判官李銑、廣陵に在り、募兵を以て之を拒ぎ、廣く旗幟を張り、大に士卒

を江津に閱す。璣、傷と埒に登り、これを望んで、懼るる色あり。その衆、多く亡ぐ。この夜、銑、江北に陣し、夜、東葦を燃やし、人ごとに二炬を執り、以て之を疑はしむ。影、水中に亂る。視ふもの、倍を以て告ぐ。璣の軍、亦た火を擧げて、これに應ず。璣、王師すでに濟るを疑ひ、兒女及び麾下を攜へて遁れ去る。運明、その給かれしを覺り、復た城に入り、舟楫を具し、傷をして衆を驅つて、晉陵に趨かしむ。江北の兵、齊しく進んで、新豐に至る。璣、傷及び其將をして、逆へて之を撃たしむ。銑、左右の翼を張つて搏戦し、傷を射て、肩に中て、軍、遂に敗る。璣、鄱陽に走り、將に、南嶺外に走らむとす。江西來訪使皇甫旉、兵を遣し、追うて之に及び、大庾嶺に戦ふ。璣、箭に中つて執へられ、潛に之を傳舎に殺し、傷、亦た亂兵に害せられ、その黨、皆、誅に伏す。永王璣、兵を弄するの始末、略ぼ此の如く、白、その幕中に入る、世、頗る之を非とす。蓋し、白の永王に従ふや、自ら脅迫せられて樓船上ると稱すと雖も、白や、必ずしも迫脅せられしに非ず、實は滿腹の霸氣、これを驅つて、一奇を其間に策せむと欲して然るに非ざらむや。その自ら述ぶるところ、亦た證すべきものあり。永王東巡歌、凡そ十一首、試にその數首を抄せむか。

三川北虜亂如麻。四海南奔似永嘉。但用東山謝安石。爲君談笑靜胡沙。これ白が隱然謝安を以て自ら許し、胡沙を靜むるを以て自ら任せしものなり。

二帝巡遊俱未廻。五陵松柏使人哀。諸侯不救河南地。更喜賢主遠道來。

これ永王の勤王を美するなり。その末章に曰く、

願借三君王玉馬鞭。指揮戎虜坐瓊筵。南風一掃胡塵靜。西入長安到日邊。

これ功成つて京に入り、凱を奏せむことを庶幾するに非ずや。更に水軍の宴に在りて、幕府の諸公に與ふる詩に云ふ、願與三座公、靜談金匱篇、所冀旄頭滅、功成追魯連、と。これ明かに討賊を以て其志と爲すものに非ずや。この心事あり、彼の霸氣、これを驅る、その璣に従ふ、何ぞ必ずしも迫脅といはむ。

肅宗の至徳二載二月、永王の兵敗るるや、白、亡げて彭澤に走り、坐して、潯陽の獄に繋がる。宣慰大使崔涣、御史中丞宋若思と白を檢治し、以爲へらく、罪薄し、宜しく貰すべし、と。宋中丞、乃ち表を薦めて云ふ、前翰林供奉李白、年五十有七、璣が爲に脅行せられ、中道にして奔走し、即ち己に首經に陳す、渙及び臣、推覆するに、立どころに辜なきことを審にす、白、經綸の才あり、請ふ、一京官に拜し、可を獻じ、否を替て、以て朝列を光にせむ、と。報せられず。時に、郭子儀、赫赫の勳業、正に成り、白が潯陽の獄に在るを聞き、并州の徳を追感して止まず、乃ち己の官爵を以て、その罪を贖はむことを請ふ。帝、これを聽し、その誅を免して、これを夜郎に長流す。その途、洞庭に及び、三峽に上り、巫山に至る。白、襟懷浩落、竄逐に遇ふと雖も、甚だ衰痛せず、劉都使に贈るに云ふ、而我謝三明主、銜哀投三夜郎、歸家酒債多、門客餐成行、所求竟無緒、裘馬欲摧藏、と。

その竄謫の後と雖も、酒債紛紛として家に多く、賓客座に滿つるの狀を想見すべく、更に洞庭以下、留賞の題詠多きを見れば、唐法頗る寛なるを知了すべし。乾元元年、しきりに大赦、白、未だ夜郎に至らざるに、亦た赦に遇うて釋さるを得、還つて、江夏岳陽に憩ひ、復た潯陽に適く。

上元二年、白年六十一、金陵に遊び、又宣城歴陽、二郡の間に往來す。時に、李陽氷、當塗令たり。實應元年、白、往いて之に依り、その十一月、疾を以て卒す。年六十二。世の傳ふるところに據れば、白、宮錦袍を着けて、采石江中に遊び、傍に人なきが若く、因つて酔うて水中に入り、月を捉へて死すといへり。然れども、范傳正の新墓碑に「晩歲、牛渚磯を渡り、姑熟に至り、謝家の青山を悦んで終焉の志あり、竟に此に卒す」といひ、李華の墓誌に「年六十二、不遇、臨終歌を賦して卒す」といひ、劉全白の碣記に「偶遊、ここに至り、遂に疾を以て終る」といへば、俗傳、もとより信するに足らず。蓋し杜甫が白酒牛炙を食ふに因つて死すといへると相同じ。然れども、二人性格の異、這般の傳説に因りて、彷彿の間に之を認むべく、又一奇と爲すべきなり。

白、凡そ四たび娶る。はじめ、楚の雲夢に許氏あり、即ち高宗の時の宰相國師の家なり。白、これに招かれ、留まること三年、乃ち國師の三女を娶り、一女一男を生む。男は明月奴といひ、女は、すでに嫁して夭す。又劉氏に娶る。後に訣別し、次いで、魯の一婦人に合ふ。子あり、顔黎といふ。終に宗氏に娶る。白の二男明月奴、顔黎、今より考ふるなし。元和の末、宣歙觀察使范傳正、白の塚を

祭り、樵採を禁じ、灑掃を備へ、新に墓碑を撰し、因つて、白の後裔を索訪して、二孫女を得たり。一は陳雲といふものの室となり、一は劉勳といふものの妻となる、皆閭閻の民なり。曰く、父伯禽、貞元八年を以て卒す。兄一人あり、出游十二年、在るところを知らず。父存して官なく、父没して民となる。兄あるも、相保たず、天下の窮人となる。桑の以て自ら蠶するなく、機杼を知らざるに非ず。田の以て自ら力むるなく、稼穡を知らざるに非ず。況や、婦人布巾に任へず、糲食何の仰ぐところ。農夫に僱して、死を救ふのみ。祖考を辱かしめむを懼れ、敢て顯官に聞せず、郷閭逼迫、恥を忍んで來り告ぐ、と。言畢つて、涙下る。傳正も、亦た泣然たり。爲に二女に告げて、士人に改嫁せしめむとすれば、二女謝して曰く、夫妻の道は命なり、亦た分なり。孤窮、すでに身を下俚に失し、威力に依つて、援を他門に求む、何の面目あつてか、大父に地下に見えむや、と。傳正深く其志を歎惋し、爲に徭役を免じ、厚く之を遇すといふ。蓋し、父伯禽なるものは、明月奴か、顔黎か、復た詳にせずと雖も、絶代の詩人、後なきこと、此の如く、家祭、享くるところなし、嘆せざるべけむや。白の産地は、詳ならずと雖も、少より蜀中に在りて、その地の感化を受けしは、殆んど、争ふべからず、故に、その人と爲り、熱血に富み、功名の心、老に至つて、猶ほ燃ゆるがごとく、その身を永王に失せしもの、一に是れが故のみ。期するところは、不世の功業を立つるに在り、さながら、戦國時代の人物の如く、平生、魯仲連、張良を慕ひしこと、その自ら述ぶるところに就いて見るべし。

然れども、時運、與みせず、到底、その志を遂ぐる能はざるを見るや、去つて道家の説を尋ね、晩年に至つては、老莊に沈潜し、これに因つて、強ひて、自ら鬱勃たる功名心を抑へ、その性をして、洒落潤達ならしめ、以て浮生の苦難を忘れむと欲したり。彼、亦た流石に擇ぶところを知れるものといふべし。然れども前者、即ち功名的野心と、後者、即ち出世間願望とは、その本来の性質上、氷炭も雷ならざるものにして、その一身は、實に矛盾の凝固體なり。ここに於て、胸中の煩悶を驅り盡さむが爲に、酒を縦にし、酔へば放歌す。その一生を通じて常に此の如く、詩と酒とは、彼に在りて、極めて意義ある必要品なりき。これを一言すれば、彼の性格は、極端より極端に、一躍して到達せむと欲するものにして、これを調攝する方法は、自ら外物の助を借らざるを得ず、故に然るのみ。白や、一片の仙骨、その性は豪雋にして、純然たる氣の人なり。而して、その才、亦た實に天授、功名の心急なるとき、頻りに家國興亡の感を述べと雖も、その好んで詠出するところは、多く天然に在り、風月草木に在り、神仙虛無に在り、故に氣韻を以て勝り、縦横至らざるところなく、しかも、期せずして、法度に協ひ、森嚴犯すべからざるの概あり。予輩は、彼を得て後、支那に於て、はじめて詩人らしき詩人を見たり。然れども、彼士の評家、多く儒教の倫理を以て、文學を律し、李杜相若かすとなすものあり。その妄、まことに憫笑すべし。乾隆御批、これを論する、最も詳、下に其全文を抄出せむ。曰く、有唐の詩人、杜子美氏に至つて、古今の大成を集め、風雅の正宗たり。譚藝の家、今に至るまで

奉じて矩矱となし、異議あるなし。然れども、同時に並び出でて、これと顔顔上下し、齊しく中原を驅り、勢均しく、力敵して、多く譲るところなきは、太白も亦た千古の一人なり。夫れ、古人の詩を論ずる、當に其大なるもの、遠きものを觀て、その性情の存するところを得べし。然る後、その材力を等しくし、その淵源を辨じ、以てその流品を定む、一切悠悠耳食の論、奚んぞ道ふに足らむや。李杜の二家は、謂はゆる異曲同工、塗を殊にして歸を同じうするもの、その全詩を觀て知るべし。太白は高逸、故に其言縦恣不羈、飄飄然として、遺世獨立の意あり。子美は沈鬱、その言深切著明、往往にして、筆勢を窮極し、事の曲折を盡して止む。白の明皇に遇ふや、特知に出で、金鑾召見、待つに殊禮を以てし、譏毀に遇ふと雖も、猶ほ金を賜うて遣歸し、以て齊魯吳越の間に放遊し、詩酒に浮沈し、湖山に放浪するを得たり。その詩、多く汗漫自適、佯狂世を玩ぶものに近し。子美は、年將に四十ならむとし、はじめて賦を獻するを以て、官に除し、その後、兵間に崎嶇し、蜀道に窮愁し、流離轉徙し、幾んど自ら存せず、故に其聲に發するもの、沈痛哀切の響多し。これ二家の異なる所以なり。若し、その時政に蒿目し、朝廷に疚心し、凡そ禍亂の萌、善敗の實、これを歌謠に託せざるなく、反覆慨嘆、以て其忠愛の志を致し、その性情に根ざして、君上に篤きもの、按じて之を稽ふるに、固より同じからざるなく、風騷に根本し、漢魏に馳驅し、六籍の菁華を讀し、五代の靡曼を掃ひ、詞華炳蔚、百代を照耀するは、兩人又何を以て異ならむや。論者察せず、漫に軒輊を其間に置く、これ猶ほ

焦明すでに寥廓に翔り、而して羸するもの、猶ほ蕪澤を視るがごとし。善いかな、轉愈の言に曰く、李杜文章在、光燄萬丈長、不知羣兒愚、那用故時傷、蚍蜉撼大樹、可憐笑不自量、と。かの元稹、蘇轍、王安石の流、この言に愧づるなからむや。太白、かつて謂ふ、齊梁以來、體薄ここに極まり、沈休文、又尙ぶに聲律を以てす、將に古道に復せむとする、我に非ずして誰ぞ、と。故に、その作るところ、駢儷の舊習を擺脫し、人羣を軼蕩し、上は曹劉に薄り、下は沈鮑を凌ぐ。朱子、以て詩に聖たるものとなす。蓋し前賢亦た之を重んず。今略ぼ兩家の同異及び、其遠大の旨を擧げ、太白の子美と竝に大家と稱して、愧づるなきを知らしむ。李杜、當日名相均しくして相慕み、その詩、交も相觀るものありといふに至りては、これ末流傾軋の心、以て君子の知交を語るべからざるなり、と。御批の言、妥當穩切、以て加ふるなし。抑も、縹緲空靈と沈鬱頓挫と、姿致の異なる、自ら兩極にして、人各、好むところに従はむのみ、もとより、甲乙すべきに非ず。世人、杜は一飯君を忘れざるに反し、李は時に神仙荒唐の説に惑ふといひ、これを是非するものあれども、亦た斷じて審美的批判に非ず。更に二家作詩の態度を以てせむか。李は、杜甫が歌へるが如く、多くの場合に於ては、一斗詩百篇、語語皆その豪を極むるに反して、杜は、李が戲に嘲りて、借問由何多瘦生、只爲三從前作詩苦、といひしが如く、刻苦經營、もとより尋常ならず。然れども、製作の遲速は、作品の價值と關せず、又以て論するなく、乾隆の言、ここに至りて愈よ異なり。

李杜二家の比較は、實に此の如しと雖も、白の特色に就いては、更に數明するところなかるべからず。趙翼曰く、李青蓮は、自ら是れ仙靈の降生。司馬子微、一見して、即ちその仙風道骨あり、與に入極の表に神遊すべきを謂ひ、賀知章、一見して、亦た即ち呼んで謫仙人となし、放たれて山に還るの後、陳留探訪使李彦允、爲に北海の高天師に請うて、道錄を授く、その神采、必ず適に常人に異なるものあらむ。詩の及ぶべからざるところ、神識超邁、飄然として來り、忽然として去り、雕章琢句に屑屑たらず、亦た鍊心刻骨に勞勞たらず、自ら天馬空を行き、羈勒すべからざるの勢あるに在り。若し、その沈刻を論すれば杜に如かず、雄鷲は韓に如かず、然れども、杜韓を以て之を比較すれば、一は力を用ひて痕跡を免れず、一は力を用ひずして觸手春を生ず、これ仙と人の別なり、と。

その詩、すでに氣韻を主とす、故に意を對偶等に用ひず、近體よりも古體に於て、その長を擅にせり。就中、樂府は、その最も得意とするところにして、集中凡そ百五十首の多きに上れり。王世貞、これを評して曰く、太白の古樂府は、杳冥恠悅、縱橫變化、才人の妙を極む。然れども、自ら太白の樂府なり、と。遠別離、蜀道難、梁甫吟、烏夜啼、烏棲曲等、最も其妙を見る。五古は、古風五十九首を以て第一となし、實に阮籍の詠懷、陳子昂の感遇と其科を同じうす。沈德潛曰く、太白の詩、縱橫馳騁、ひとり古風二卷、才を誇らず、氣を使はず、元と阮公に本づき、風格俊上、伯玉感遇詩後、調音ありと。趙翼亦た特に之を論じて曰く、青蓮一生の本領は、即ち五十九首に在り、古風の第一首、

開口便ち説く、大雅作らず、騷人ここに起る、然れども、詞に哀怨多く、すでに正聲に非ず、揚馬に至つて、益す流宕、建安以後は、更に綺靡なれども、法となすに足らず、有唐の文運、はじめて興るに及ぶのみ、適ま其時に當つて、將に刪述を以て獲麟の後に繼がむと欲す、と。これ其眼光の注ぐところ、早く既に前に古人なく、後に來者なく、直に千載の後に於て、上、風雅に接せむと欲す。蓋し自ら其才分高き、趨向の正しきを以て、八代の衰を起すに足るを信じ、而して、身を以て之に任ず、徒に大言人を欺くに非ざるなりと。七古は、懷舊遊寄、誰郡元參軍の類を以て冠冕となし、神氣自ら暢びて、情文竝に高く、沈德潛が「太白の七言古、想、天外より落ち、局、自ら變生す。大江風なく、波浪自ら湧き、白雲空に飛び、風に從つて變滅す。これ殆んど天授、人の及ぶべきに非ず」といへるもの、決して、好むところに倣せしに非ざるを知るべし。次に、近體の中、律詩は、篇數極めて多く、五律は七十餘首あるも、七律は十首に上らず。然れども、對仗精當、自ら工麗にして、その中、一種英爽の氣を含むところ、最も及び難しと爲す。蓋し開元天寶の間、七律尙ほ未だ盛行せず、至德以後、賈至等の早朝大明宮の諸作、互に相琢磨して、はじめて善を盡すを覺ゆ。而して、白や都を出づること、すでに久しく、作るところ、亦た多からず。その才、若かざるに非ざるなり。最後に、絶句は元と六朝の清商樂府より變せしものにして、太白正に其擅場を推すべく、眼前の景、口頭の語、しかも絃外の音、人をして神遠からしむ。これを要するに、李白の詩に於けるは、猶ほ莊周の文に於けると

一般、まことに、古今稱に見る天才の作品なり。

太白の技、神に入るや、不用意の間に千秋の絶唱を爲し、皆神理ありて、虚泛ならず、これ獨絶の處。趙翼、これを詳論して曰く、詩家好んで奇句警語を作し、必ず千鍾百鍊して後に能く成る。李長吉の石破天驚逗秋雨の如き、險と雖も、しかも、意義なく、祇だ理なくして闇を取るを覺ゆるのみ。少陵の白摧朽骨龍虎死、黑入太陰雷雨垂、昌黎の巨刃磨天揚、乾坤罷礪眼の句の如き、實に驚心動魄に足る。然れども、全力兎を搏つての狀、人皆これを見る。青蓮は、然らず、撫頂弄盤古、推車轉天輪、女媧戲黃土、團作愚下人、散在六合間、灑灑如沙塵、といひ、舉手弄清淺、誤攀織女機、といひ、一風三日吹倒山、白浪高於瓦官閣、といひ、皆奇警極まれり、しかも、揮灑を以て之を出し、全くその鍾鍊の跡を見ず。その他、剝露の處、長風入短袂、兩手如懷水、といひ、客土植危根、逢春猶不死、といひ、蝸蛤啼青松、安見此樹老、といひ、羅帷舒卷、似有人開、明月直入、無心可猜、といひ、莫捲龍巖席、從他生網絲、且留琥珀枕、或有夢來時、といひ、皆人の百思到らざるところ、而して、青蓮の手に入れば、一に未だ構思を經ざるもの如し。後人、これ等を悟入すれば、その訣を得べしと。洵に至言を推すべきなり。

李白の集、唐時、二本あり。新唐書藝文志に、李白草堂集二十卷とあり、その下の小註に李陽水録といふ。是れ其一なり。李陽水は、白の族叔にして、江南宣州當塗の縣令たり。白、晩年、姑熟に遊

び、謝家の青山を愛し、終老の志あり、乃ち陽水に依つて居る。すでにして、陽水、官を罷め、白亦た病篤し、因つて、手づから集めて、未だ修せざるの詩稿萬卷を出し、枕上に簡を授け、陽水をして之を序次せしむ。事は、陽水の草堂集序に見え、序の成るは、代宗の寶應九年に在り、白の世を去ること、猶は未だ遠からず。又王屋山人魏萬といふものあり、白と時を同じうし、その推挹を蒙る。白曰く、爾後、必ず大名を天下に著さむ、と。因つて、盡く其文を出し、命じて之を集輯せしむ。肅宗上元の末、萬、絳に於て、偶然、白の詩を得、因つて、筆を授つて序を成し、名づけて李翰林集といふ。これ其別本なり。宋の眞宗咸平元年、上柱國樂史、又別に歌詩十卷を收む。草堂集と互に得失あるに因り、これを校勘し、排して二十卷となし、又名づけて李翰林集といふ。これに據れば、草堂集の原本は、止だ十卷なるべく、唐書に二十卷と云ふは誤なるが如し。後、三館中に於て、白の賦序表讀書頌等を得、亦た排して十卷となし、李翰林別集といふ。ここに至つて、太白の全集、略は完全に庶幾し。然るに、陽水本は早く亡び、樂史本も亦た傳はらず。宋敏求、魏萬の輯めしところのものを得て、原本となし、會輩とともに遺佚を哀集し、その先後を考へて、これを次第し、合せて三十卷となす。詩二十四卷、賦及び雜著合せて六卷、これに次ぐ。後に晏知止、毛漸をして之を校正せしめ、資を授じ、鏤板以て傳ふ。白の集、ここに至りて、はじめて、刊本あり。元明の間、流傳漸く少し。清の康熙中、吳縣の繆曰芑といふもの、はじめて之を重刊し、改め名づけて李太白全集とい

ふ、今傳ふるもの、即ち是れなり。
 その註は、宋末元初に當り、春陵の楊齊賢、字は子見といふもの、はじめて之を作る。次いで、事都の蕭士贇、字は粹可といふもの、その駁雜を厭ひ、因つて節文を爲して、その善なるものを存し、己の註を以て、これと合刊し、號して分類補註李太白集といひ、分つて二十五卷となす。その初卷は賦、他の二十四卷は詩、而して遂に雜著に及ばず。その分標門類、繆曰吉の刻本と同じからず。これ齊賢の改編たるか、士贇の改編たるか、原書に序跋なきを以て、今考ふべからず。唯だ其註は、齊賢曰、士贇曰を以て之を別つ。顧みれば、杜甫の詩は、これを註するもの數十家に下らず、宋末すでに千家の目あり、而して李白の詩の註は、宋元人の撰輯するところ、獨り此本あるのみ。蓋し、杜詩の集めて大成し、その忠君愛國の心を抒ふるは、性分の然らしむるところと雖も、亦た多くは、その學殖より來る。これに反して、李詩は、風騷に原本し、漢魏に意章し、杜と美を駢ぶと雖も、その得るところは、全く天才に在り、浩浩落落、天馬空を行いて羈勒すべからざると一般。試に禪を以て喻ふれば、子美は漸にして、太白は頓なり。前者は註し易く、後者は然らず、從つて、指を染むるもの極めて少き所以なり。ここに於て、楊蕭二家の能く其難を行ふを推さざるを得ず。按ずるに、齊賢の事は、多く傳はらず。士贇は、篤學にして詩に工に、著すところは、詩評二十餘卷、及び冰崖集あり。ともに既に佚し、この本、ひとり世に行はれ、百世廢せず、其れ亦た此功に因るか。

楊蕭二家の後、明の林兆珂に李詩鈔述註十六卷あり、簡陋殊に甚し。胡震亨、字は孝轄、書註を駁正し、李詩通二十一卷を作り、頗る發明するところあり。當時、許元裕、劉少彝、姚孟承の徒、頻りに李杜二集を合刻せしが、未だ註解あるを聞かず。清の乾隆中錢塘の王琦、字は琢崖といふもの、楊蕭胡、三家の後を承け、その廣からざるを惜み、心を専らにし、意を致し、重ねて編次箋釋し、博引旁證して、李太白文集註三十六卷を作る。微に蕪雜に失するを傷めども、採摭頗る富み、用功頗る多く、當に楊蕭合註本と不朽に並び傳ふべきを疑はず。同時の趙信、これに序して曰く、載卷、半生の精力を窮め、以て此書を成す、一註以て杜詩註の千家に敵すべし。李杜の光儀、竝に兩間に昭耀し、後學に功あること、良に淺妙に非ずと。過獎に似たりと雖も、未だ必ずしも誣言ならざるなり。楊蕭の太白を距ること五百年、孝轄の楊蕭を距ること四百年、載卷の孝轄を去ること百餘年、太白亡後、殆んど千年を歴て、李杜、はじめて同運並行を得たり。ここに於て、兩輪漸く成り、雙翼はじめて全しといふべし。
 李詩全集の評ある、宋の嚴羽より始まる。明の開啓祥、これを得て、大に喜び、宋の劉須溪の杜詩評本と合刻す。しかも、その書、嗣いで刊刻を経ざるを以て、世傳ふるもの少し。楊蕭二家以下の諸書、かつて引證せず、王註、わづかに、その一二語を引くを見るのみ。その希觀の珍籍たること、知るべきなり。選本には、明の張愈光の李詩選あり。選して評するものには、宋の謝疊山の唐詩合選、清

の高宗の唐宋詩醇、應酬源の李詩緯等あり。詩醇は、選錄せる篇數、最も多く、殆んど、全卷の半に及び、加ふるに採擇精嚴、評語確當、最も憑據すべし。

楊蕭二家の分類補註本は、邦刻世に行はるること、すでに久しく、王琦本と詩醇とは、亦た容易に之を求むべし。李詩を觀むとするもの、この三書に據つて研鑽すれば、必ず餘師あるべく、予の本書に於ける概ね亦た此の如きのみ。

繆本、楊蕭本、王琦本等、排列の次序各異なりと雖も、詩二十四卷たることは一なり。王琦本には、別に詩文補遺あり、采輯尤も廣し。本書に於ても、詩二十四卷を主とすることは、もとより論なく、補遺は之を王琦本に取りて、計二十五卷となし、標目は専ら楊蕭本に據り、全文は、王琦本、最後にいでて、校訂最も嚴なるを以て、概ね之に従ひ、なほ時に他本を參酌す。庶幾はくは、以て太白集の定本と爲すに足らむか。

李太白集卷一

古風

古風は、古體の詩といふ義であつて、その體製のみか、精神までも純古を旨としたものである。體制の上から云へば五言古詩であるし、精神の上から云へば、漢魏と其勝を争ふものである。李白の古風は、通計五十九篇あつて、最初の一巻を填めて居るが、もとより同時の作ではなく、折に觸れ、時に臨んで作つたものを、後から、ここに類聚したものである。中にも、開卷第一の大雅久不作の一篇は、その作詩の本領を述べたもので、もとより、意あつて自ら之を卷首に置いたものであらう。總説の中にも述べた通り、李白は、晩年、病中に族叔の李陽氷を枕頭に呼んで、詩稿の編集を依頼したといふが、その時、特に此事を陽氷に命じたものと思はれる。抑も、五言古詩は、前漢の世に出来、李陵蘇武の唱和が、その濫觴であると、普通には云つて居るが、古詩十九首中の或者は、それよりも前の枚乘の作に係るといふことで、要するに、武帝の初と見ねばならぬ。その古詩十九首は、東西兩漢の作を類聚したものであるが、三百篇の餘響と稱し、後人には眞似も出来ぬ大作といはれて居る。十九首の系統を承けて、漢魏の間に建安七子、中にも曹植・王粲などいふ人が、その精神

を采つて、それに氣質魄力を加へ、愈よ五言詩の一體が確立して、且つ普遍的と成つた。それから、魏晉の間に於ては、阮籍の詠懐八十二首があり、晉になると、左思の詠史、郭璞の遊仙などがあり、降つて、陶淵明の田園諸作は、稍や別調に屬するが、なほ十九首の質樸にして、野卑ならぬ精神を何處までも繼續して發揮して居る。しかし、六朝時代になると、四聲八病の説が起つて、段段文字が綺麗になると同時に、十九首の精神が全く亡びて仕舞つた。唐になると、復古の氣運が漸く促し、陳子昂の感遇四十九首が出で、古詩十九首や、阮籍の詠懐を矩準とし、相變らず四聲八病の繩尺を奉ずる律詩の流弊を打破せむとした。換言すれば、當時方に成立しかかつた律詩以外に、極めて自由なる五言詩の復興を企てたので、その次に張九齡の感遇九首があり、それから、李白の時代に成つて來たので、李白は、その使命を自覺し、必ず古に復さむが爲に、特に古風を以て、其作に係る五言古體に名づけ、それで見事に成功し、近體と並行して、古體が又ぞる盛になつて來たのである。杜甫は、李白と同時にあるが、その年齢から云つても、稍や後輩に屬するもので、李白の築き上げた土臺の上に更に新しき殿堂を建て上げたやうなもので、復古といふばかりではなく、一層斬新にして且つ古しへよりも力強い一種の詩體を確立せしめ、韓愈、白居易等、相次いで起り、各、生面を開いた。そこで、彼の時、もし李白の様な大詩人が、五言古詩の復古を試みなかつたならば、唐詩は、近體が大部分を占め、六朝聲律の餘波に過ぎぬものとして擧つたかも知れないので、李白の出現

殊に古風の製作は、支那の詩學史の上に於て、極めて深遠重大なる意義を有して居るといふことを忘れてはならぬ。

古風

古風

大雅久不作。吾衰竟誰陳。
 王風委蔓草。戰國多荆榛。
 龍虎相啖食。兵戈逮狂秦。
 正聲何微茫。哀怨起騷人。
 揚馬激頽波。開流蕩無垠。
 興廢雖萬變。憲章亦已淪。
 自從建安來。綺麗不足珍。
 聖代復元古。垂衣貴清真。
 羣才屬休明。乘運共躍鱗。
 文質相炳煥。衆星羅秋旻。

大雅、久しく作らず、吾、衰ふれば、竟に誰か陳べむ。
 王風は蔓草に委し、戰國には荆榛多し。
 龍虎、相啖食し、兵戈、狂秦に逮ぶ。
 正聲何ぞ微茫たる、哀怨、騷人を起す。
 揚馬、頽波を激し、流を開き、蕩として垠なし。
 興廢萬變すと雖も、憲章、亦た已に淪む。
 建安より來は、綺麗なれども、珍とするに足らず。
 聖代、元古に復し、垂衣、清真を貴ぶ。
 羣才、休明に屬し、運に乗じて、共に鱗を躍らす。
 文質、相炳煥、衆星、秋旻に羅ぬ。

我志在刪述。垂輝映千春。我が志は刪述に在り、輝を垂れて、千春に映す。
希聖如有立。絶筆於獲麟。聖を希うて、もし立つあらば、筆を獲麟に絶たむ。

【字解】(一) 大雅 鄭玄の毛詩箋に「小雅大雅は、周室、西都豐鎬に居る時の詩なり」とある。元來、詩經の詩には、風雅頌の三種があつて、頌は神に事へる爲に特別に作つたものであるし、風は民間の流行歌であるし、雅は兩者の中間に在つて、主として西周の盛時廟大夫の作に係り、その頃の政治に對する感想を述べたもので、詩の中で、一番重いものとしてある。雅に大雅小雅の二つあつて、政に大小があるから、この別が出来たといふのが、古來の通説であるが、實は、音節の如何に因るもので、大雅は雅にして頌に近く、小雅は雅にして風に近いものとするのが至當であらう。(二) 久不作 兩都賦の序に「王澤竭きて詩作らず」とある。(三) 吾哀 論語に「甚しいかな吾が衰へたる」とあつて、その字面を用ふ。(四) 陳のべる 王制に「詩を陳べ民風を觀る」とある、その陳の字である。(五) 王風 平王以後の周詩で、孔子が特に雅といはず、他の十三國風と同一にしたものをいふ。(六) 戰國 顔師古の漢書註に「春秋の後、周室卑微、諸侯強盛、交も相攻伐す。故に總べて之を戰國といふ」とある。(七) 荆榛 荆は荆棘、榛は木の發生せる貌。(八) 龍虎 班固の答賓戲に「……子て、七雄城關分裂、諸夏龍戰虎爭」とある。(九) 正聲 雅をいふ。(一〇) 騷人 昭明太子の文選の序に「楚人屈原、忠を含み、涙を履み、君は從流に匿す、臣は逆耳を進め、深思遠慮、遂に湘南に放たれ、歌介の意、すでに傷み、壹鬱の憤、烈ふるなし、湘に臨んでは、瀟沙の志あり、澤に吟じては、憔悴の容あり、騷人の文、これより作る」とあるに本づく。元來、屈原は、離騷を作つたので、離は離る、騷は憂、即ち憂に罹るといふ意で、その體は、即ち楚賦である。しかし、漢以後は、主觀的に自分の感傷を述ぶるを騷といひ、客觀的に都城狩獵その他の物を敘述するを賦といふやうに成つた。(一一) 揚馬 揚雄、司馬相如の二人、漢代の賦家。(一二) 無垠 史記に「推して之を大にし、無垠に至る」とある。畔岸なしといふ意。(一三) 憲章 法度に同じ。(一四) 建安 漢末の年號。その時、曹氏父子、及び鄧下七子、並び起り、詩體が一變したから、世、これを建安體と稱した。これより後、毎に降り、毎に變じ、梁陳に及びては、靡麗極まり、世に之を魏體して六朝體といつた。(一五) 聖代 唐朝をいふ。(一六) 垂衣 易に「黃帝堯舜、

衣裳を垂れて天下治まる」とあるに本づく。(一七) 麗錦 王彪の詩に「飛揚振羽、麗錦麗錦」とある。即ち龍の躍ること。(一八) 烟煢 相輝映する貌。(一九) 秋受 爾雅に「秋を受天となす」とあり、李邕の註に「秋は、萬物成熟し、皆文章あり、故に受天といふ」とある。(二〇) 希聖 夏侯湛の関子養賢に「聖既擬天、賢亦希聖」とある。(二一) 絶筆於獲麟 杜預の左傳集解に「仲尼、周道の興らざるを傷み、嘉瑞の應なきを感ず、故に魯の春秋に因つて、中興の數を修し、筆を獲麟に絶つ、感じて作るところ、もとより終となす所になり」とある。

【題義】これは、古風五十九首の第一。その趣意は、前にも述べた通り、李白が作詩の大本領を掲げたもので、或る意味に於ては、前代詩賦の概観でもあり、まことに、重要な大文字である。
【詩意】周室の王澤、すでに竭きて後、今日に至るまでの久しい間に、大雅と云ふものは絶無で、何人も之を作ることが出来ない。われ李太白ならば、希はくは、久しく作らざりしものを嗣いで起すことが出来るかも知れぬが、もし我にして、年を取つて衰へたならば、何人も、大雅を再び今日の世に陳べることは出来ない。して見れば、天より特に興へられた自分の責任は、まことに重大なものである。抑も平王以後には、雅が亡びて、王風といふ詩があつたが、それも、いつしか蔓草に委し、全く地に落ちて仕舞つた。それから、戰國になると、蔓草どころか、荆榛滿目、とても踏み分けて行くことが出来ない位で、詩の道は、全く杜絶して仕舞つた。その戰國の間には、龍虎に比すべき梟雄輩出して、互に食ひ合を爲し、天下は兵戈の中に陥り、引き繼いで、虎狼の如き狂暴の秦の世となつて仕舞つて、正聲は、極めて微かに、遂に亡びて仕舞つた。その戰國から秦に遷る間に、騷人の祖として

知らるる屈原が崛起した。しかし、その作は、哀怨の餘に成つたもので、遺憾ながら、雅道に外れて、正聲に叶つたものではない。それから、漢代になると、揚雄だの、司馬相如だのといふ人が出て来て、狂瀾の餘勢を激揚した功は、大したものに相違ないが、散漫にして、歸著するところが無い。その後とも、或は衰へたり、或は盛になつたりして、時世の推移に連れて、さまざまに變化したが、大雅の法度といふものは、全く淪没して、無くなつて仕舞つた。建安時代には七子が輩出して、一時の盛を極めた。それは兎も角もとして、それ以來、齊梁になると、まことに綺麗ではあるが、文字上の巧を争ふのみで、一向珍重するに足らない。幸なことに、我が唐代になると、詩も、初めて元古に復した。我が君は、古しへの堯舜の如く、衣裳を垂れ、手を拱いたままで天下が治まるといふ位で、詩に於ても、専ら清真を貴ぶやうになり、天晴古しへの大雅を嗣ぐべき千歳一遇の氣運に向つて来た。されば、その休明の至治に連れて、羣才踵を接して起り、各、その運に乗じ、龍が鱗を躍らして、昇天するやうな勢を以て、奮勵の餘、詩作に従事し、その手に成りしものを觀ると、文質彬彬として、互に相輝映し、たとへば、澄み渡つた秋の天空に、無数の星が、きらきらと輝くやうである。我が今志ざすところは、他に非ず、むかし、孔子が三千餘篇の詩を刪つて、三百餘篇を存したると同じく、これ等、羣才の作つたものを刪述し、大に光彩を放つて、千年の後までも之を傳へ、大雅と相俟つて、風教の助にしたいといふのである。かくて、孔子が春秋を修め、筆を獲麟に絶つたと同じく、自分も、

聖人の真似をして、せつせと今の内に勉強し、天晴この大業を成し遂げ、大雅に匹敵すべき聖代の文章を永久に傳へたいと思ふのである。

【餘論】この一篇は、李白が詩人として本領顯見を述べたので、何も三百篇の通りにして、詩を作らねばならぬといふのでは無いが、詩の變遷を大觀し、三百篇の精神に復舊したいといふのである。これに就いて、楊齊賢の論が一番詳密で懇切であるから、少し長いが、下に全文を引くことにする。詩の大雅、凡そ三十六篇、詩の序に云ふ、雅とは正なり。王政の由つて廢興するところを言ふなり。大雅作らざれば、斯文衰ふ。平王東遷、黍離、國風に降り、春秋の世を終るまで、復た振ふ能はず。戰國迭に興り、王道榛塞、干戈相侵し、以て秦に迄る。中正の聲、日に遠く、日に微なり。一變して離騷となり、詩人の末に軒蓋し、詞家の前に奮飛す、司馬揚雄、その類波を激揚し、その下流を疏導し、遂に閑肆にして、無窮に注がしむ。しかも、世降れば、愈よ下り、憲章乖離、建安諸子は、綺麗を夸尚し、摘章繡句、競うて新奇を爲し、雄健の氣、これに由つて萎爾し、唐八代に至つて極まれり。魏晉の陋を掃ひ、騷人の廢を起す、太白、蓋し以て自ら任ずるか。その著述を覽るに、筆力剛剛として、行雲流水、自然に出づるが如く、思索に由つて得るに非ず、豈に我を欺かむや。これに就いて、王琦は説を爲し、「琦按するに、吾竟竟誰陳、これ太白自ら吾の年力すでに衰へ、竟に能く其詩を朝廷の上に陳するなきを嘆するなり。楊氏、斯文の衰萎を以て釋となし、殊に唐仲言の詩解を混す。孔

子、吾衰へたるの説を引く、更に非。徐昌職謂ふ、首二句は、一篇の主旨たり。綺麗不足珍より以上、これ第一句の意を申べ、聖代復元古より以下、これ第二句の意を申ぶと。その説、極めて明了となす。學者試に一たび前の二解を玩味すれば、辨を待たずして、その誤を確知せむ。本事詩に曰く、李白才逸に、氣高く、陳拾遺と名を齊しうし、先後徳を合す。その詩を論ずるに云ふ。梁陳以來は、黷薄、これ極まる。沈休文、尙ふるに聲律を以てす。將に古道に復せむとするは、我に非ずして誰ぞ、と。この詩、乃ち自ら其素志を明かにするか、といつて居る。これは、些事の様だが、實は重要なことである。但し吾衰云云とは、李白自ら言ふのであるが、予は王琦の如く、吾が年力すでに衰へたり、とは云はずして、假設的に、吾が年力もし衰へなば、といふやうに解したので、さうしなければ、折角の抱負も、甚だ覺束なきやうに成る虞があると思ふ。つまり、李白老後の嘆息と見ずして、壯年時代の希望の言葉としたのである。それから、朱子は、李白の詩、専ら是れ豪放に非ず、首篇、大雅久不作の如きは、多少の和緩、といひ、劉克莊は、これ古今詩人の斷案なり、といひ、沈德潛は、自從建安の一句、語に分寸あるを論じ、昌黎云ふ、齊梁及陳隋、衆作等蟬噪と。太白、すなはち云ふ、自從建安以來、綺麗不足珍と、これ從來豪傑の語を作すも、珍とするに足らず、建安以後を云ふなり。謝朓樓饒別に云ふ、蓬萊文章建安骨、と。一語證すべし、といひ、最後に、乾隆御批には、更に其本意を闡明して、古風の詩、比興多し。この篇は、全く賦體を用ひ、風雅の源流を括し、著作

の意旨を明かにし、一起一結、山立ち波廻るの勢あり。むかし、劉勰、明詩の一篇あり。略に曰く、兩漢の作、結體散文、直にして野ならず、五言の冠冕たり、と。又云ふ、建安の初、五言騰踊、織密の巧を求めず、惟だ明晰の能を取る。何晏の徒、率ね浮淺多し。惟だ嵇志清峻、阮旨遙深、故に能く標す。晉世の人材、稍や輕綺に入り、采は正始よりも綺、力は建安よりも柔、と。白の此篇を觀るに、即ち劉氏の意、指、大雅に歸し、志、刪述に在り、上、風騷に溯り、俯して六代を觀、綺麗を以て賤となし、清真を貴となす。論詩の義、昭然として明かなり。筆を擧げて、直に見るところを書し、氣體實に以て之に副ふに足る。陽氷、その屈宗を馳驅し、揚馬を鞭撻し、千載獨歩、惟だ公一人のみなるを稱す。洵に阿好に非ず。その草堂集を纂する、古風を以て卷首に列し、又この篇を以て之を辨す、卓見あるものといふべし。枕上簡を授く、同じく朽ちず、といつて居る。讀者は、これ等の評語を併觀し、各一面を窺ひ得たるを知ると共に、更に進んで、この詩の全篇に就いて、精細に考量すること忘れてはならぬ。

蟾蜍薄太清。蝕此瑤臺月。
圓光虧中天。金魄遂淪沒。

蟾蜍は太清に薄り、この瑤臺の月を蝕す。
圓光、中天に虧け、金魄、遂に淪沒す。

蠅螬入紫微。大明夷朝暉。
浮雲隔兩曜。萬象昏陰霏。
蕭蕭長門宮。昔是今已非。
桂蠹花不實。天霜下嚴威。
沈歎終永夕。感我涕沾衣。

蠅螬、紫微に入り、大明、朝暉を夷らる。
浮雲、兩曜を隔て、萬象、陰霏昏し。
蕭蕭たる長門宮、昔は是にして今は已に非なり。
桂は蠹んで、花は實らず、天霜、嚴威を下す。
沈歎、永夕を終り、我を感せしめて、涕、衣を沾す。

【字解】(一) 蠅螬 淮南子精神訓に「月中に蠅螬あり」といひ、高誘の註に「蠅螬は蝦蟇なり」とあり、又說林訓に「月、天下を照らすも、蒼苔に蝕せらる」といひ、高誘の註に「蒼苔は月中の蝦蟇、月を食ふ、故に蒼苔に蝕せられるといふ」とある。(二) 薄 儂す、迫る。(三) 太清 太空。(四) 瑤臺 天上の仙宮。(五) 圓光 月をいふ。(六) 金魄 月は西に生じ、實に金の方なるが故に云ふ。又魄は月體黑暗の部分で、ここでは、滿月の影、光明燦爛、金に似たるが故に、金魄といふとの説もある。(七) 蟪蛄 昔に在れば、蟪蛄、東方に見はる。日旁白色の氣と均しく、虹の名あれども、實は判然たる二物なり。太白、日旁の虹を以て呼んで蟪蛄となす、混稱なくんばあらずといつて居る。(八) 紫微 大帝の座、天子の常居に比す。(九) 大明 日に同じ。(十) 夷 滅ぶ。(十一) 兩曜 日月。(十二) 長門宮 漢書に「孝武の陳皇后、寵を擅にして驕貴、十餘年にして子なし。衛子夫の幸を得るを聞き、幾んど、死するもの數ばなり。上、愈々怒る。后、又婦人の媚道を挾み、頗る覺はる。元光五年、上、遂に之を窮治し、相連及して誅せらるるもの三百餘人。后退いて長門宮に居る」とある。(十三) 桂蠹 漢書に成帝の時の童謡に「桂樹花不實、黃雀巢其窟」とある。

【題義】これは、古風の第二篇であつて、玄宗が王皇后を廢したことを諷したものである。

【詩意】月中の蝦蟇が、のさばつて、大空に通り、遂に瑤臺の上に輝く月を蝕して仕舞ひ、その爲に、月は中天に在りながら、光は虧けて無くなり、やがて、沈んで見えなくなつた。今、武惠妃が寵を擅にし、王皇后が之に敵し兼ねて、后位から落されて仕舞つたのは、丁度、さういふ風である。抑も蟪蛄が天宮を犯せば、朝日の光も滅されて仕舞ふので、武惠妃が、一たび宮中に入つてより、淫奔の行を爲して、玄宗の聰明も、全く蔽はれて仕舞つた。かくて、浮雲が日月を隔てて、萬象は、もはややせる陰晦の中に暗く微かになるやうに、玄宗と王皇后との間は、全く隔離され、聞くに堪へぬ様様の事が起つて來た。それで王皇后が廢せられて、冷宮に退けられたのは、むかし、漢の武帝の時、陳皇后が罪を得て、長門宮に閉ぢ込められたと同じではあるが、前後の關係より見れば、一しほ甚しくして、全く話にもならぬ位である。抑も、桂の實は、ひりりとして辛く、蟲などが食つてはならぬもので、天子と皇后との間も、讒人が之を隔ててはならぬのである。それなのに、今や桂は蟲に食はれて、徒に花咲けども、遂に實らず、おまけに、天から霜を下し、きびしい寒氣を以て、之を痛められては、まことに堪らない。王皇后も、一たび讒人に隔離された上に、天子から詰問されて、嚴罰を受けられ、まことに、御氣の毒の至である。かくて、長き夜に、此事を思ひつづければ、嘆息の極やがて、涙下つて我が衣を濡すばかりである。

【餘論】新唐書に據ると「玄宗の皇后王氏は、同州下邽の人、梁の冀州刺史神念の裔孫、帝、臨淄王

たりしとき、聘して妃となす。將に内難を清めむとするや、大計に預る。先天元年、立てられて皇后となる。久しうして子なし、しかも、武妃稍く寵あり。后、平かならず、顯に之を詆る。然れども、下を撫する、素より恩あり、肯て短を譖するものなし。帝、密に、后を廢せむと欲し、以て姜皎に語る。皎、言を漏らす、即ち死す。后の兄守一、懼れて、爲に厭勝を求む。浮屠明悟、教へて、北斗を祭り、霹靂木を取り、天地の文、及び帝の諱を刻し、合せて之を佩はしめて曰く、后、子あり、則天と比せむ、と。開元十二年、事、覺はる。帝、自ら臨んで効す。狀あり。乃ち有司に制詔すらく、皇后、天命祐けず、華さけども實らず、無將の心あり、以て宗廟を承け、天下に母儀たるべからず、其れ廢して庶人と爲せと。守一に死を賜ふ。當時、王誼、翠羽帳賦を作つて、帝を諷す。未だ幾ならずして卒す。一品の禮を以て葬る。後宮、これを思慕し、帝亦た悔ゆ、寶應元年、后號を追復す」とある。次に蕭士贇の説に「王后の事、漢武陳后の事と極めて相類す。二后、各子なく、巫蠱厭勝を以て廢せらるると雖も、然れども、その由を推原するに、實は衛子夫、武惠妃、寵を争ひ、以て之を激するあるなり、陳后の廢せらるる、司馬相如、長門賦を作り、王后の廢せらるる、王誼、亦た翠羽帳賦を作り、先後一致、太白、これを引いて證と爲す。最も切當たり。桂蠹花不實、これ廢后制中の語を取る。天霜下嚴威」とは、事發覺するとき、帝、自ら臨んで効するなり。沈歎終永夕、感我涕沾衣とは、白の意、夫婦君臣は、ともに人の大倫なり、至つて密近なるものは、夫婦に如くはなし、しかも且つ其

終を保つ能はず、況や、臣子の疎遠なるものをやといふが若し。これ白の感嘆終夕にして、涕零する所以なり」とあり。唐仲言は又「蟪蛄月を蝕す。武妃の后に逼るに比す。月光虧けて魄没す。后、すでに廢せられて、憂死するを見はすなり。蟪蛄は、日の光を借り、以て形を成す。今、紫微に入り、日反つて蔽はる。武妃、すでに幸を得て、帝心を蠱惑し、荒亂に至るに比するなり。苟くも、日月ともに陰邪に傷められて、蒼生以て仰照するなくんば、萬象皆昏冥、因つて、后の廢せらるる、正に陳后の長門に居るが如しと言ふ。然れども、陳后は、嫉妬を以て、幾んど皇嗣を絶ち、實に廢すべきの條あり。今、王后は、下を撫して恩あり、明皇、特に武妃の故を以て、之を廢せむことを謀る。すなはち、陳后の比に非ず、謂はゆる、昔は是にして今は非なるなり。且つ、帝、后に子なきを以て、その花さいて實らざるを罪す。然れども、これを桂樹に觀すや、桂、蠹めば、實を成すこと能はず、寵、分るれば、子ある能はず、奈何ぞ、遽に天霜の威を以て之に加ふるや。大抵、國家の亂は、宮闈より起る。我、因つて、念うて此事に及び、これが爲に、感嘆して衣を沾すなり。その後、武妃、幸に早世し、しかも、明皇、卒に太眞を以て國を亂る。太白、幾を知るといふべし」といひ、その解説は、極めて詳密で、大に參考になる。王琦は「按するに、舊唐書に開元十二年秋七月壬申、月蝕既己卯、皇后王氏を廢して庶人となすとあり。太白の此篇、首に月蝕を以て喻となす、これ比と雖も、實は賦なり」とあつて、これも、尤も至極な事と思はれる。

秦皇掃六合。虎視何雄哉。
 揮劍決浮雲。諸侯盡西來。
 明斷自天啓。大略駕羣才。
 收兵鑄金人。函谷正東開。
 銘功會稽嶺。騁望瑯琊臺。
 刑徒七十萬。起土驪山隈。
 尙採不死藥。茫然使心哀。
 連弩射海魚。長鯨正崔嵬。
 額鼻象五嶽。揚波噴雲雷。
 鬱蔽蔽青天。何由覩蓬萊。
 徐市載秦女。樓船幾時迴。
 但見三泉下。金棺葬寒灰。

秦皇、六合を掃ひ、虎視、何ぞ雄なるや。
 劍を揮つて、浮雲を決し、諸侯、盡く西に来る。
 明斷、天より啓き、大略、羣才に駕す。
 兵を收めて、金人を鑄り、函谷、正に東に開く。
 功を銘す會稽の嶺、望を騁す瑯琊の臺。
 刑徒七十萬、土を起す驪山の隈。
 尙ほ不死の藥を採り、茫然、心をして哀ましむ。
 連弩、海魚を射り、長鯨正に崔嵬。
 額鼻は五嶽に象り、波を揚げて雲雷を噴き。
 鬱蔽は青天を蔽ひ、何に由つてか蓬萊を觀む。
 徐市、秦女を載せ、樓船、幾時か廻る。
 但だ見る、三泉の下、金棺、寒灰を葬るを。

【字解】【一】秦皇、秦の始皇。【二】六合、四方上下、即ち天地。【三】虎視、その強盛を喻へて云ふ。【四】決、さる、裂く。

【五】明斷、英明なる果斷。【六】啓、開く。【七】收兵鑄金人、史記に「始皇二十六年、天下の兵を收め、これを咸陽に聚め、銷して以て鑄金人十二となし、重さ各千石、宮庭の中に置く」とある。【八】函谷、關の名、秦の東境で、六國未だ滅びざる時は、用心の爲に之を閉ぢて置いたが、天下統一の後、その必要もなく、常に東に向つて開いて置くといふこと。【九】銘功會稽嶺、史記に「三十七年、會稽に上り、大禹を祭り、南海に望し、石を立てて秦の德を刻頌す」とある。【一〇】騁望瑯琊臺、史記に「二十八年、南、瑯琊に登り、大に之を樂み、留まること三月、乃ち黔首三萬戸を瑯琊臺下に徙し、復た十二歲、瑯琊臺を作り、石を立てて、秦德を刻頌す」とある。【一一】刑徒七十萬、史記に「三十五年、隲宮徒刑の者七十餘萬人、分つて阿房宮を作り、或は驪山を作り、北山の都を發す」とある。【一二】尙採不死藥、史記に「三十一年、韓終、侯公、石生をして、仙人不死の藥を求めしむ」【一三】連弩射海魚、史記に「二十八年、齊人徐市等、上書して言ふ、海中に三神山あり、請ふ、養戒し、童男女と之を求むるを得む。ここに子て、徐市を遣し、童男女數千人を發し、海に入つて、仙人を求めしむ。數歲得ず。乃ち詐つて曰く、蓬萊、藥、得べし。然れども、常に大鯨魚に苦めらる。故に至るを得ず。願はくは、善射の者を得て、與に俱にし、見はるれば連弩を以て之を射むと。乃ち海に入る者をして、巨魚を捕ふるの具を齎さしめ、而して、自ら連弩を以て、大魚の出づるを候して之を射むとす。瑯琊より、北、榮成山に至るまで見えず、之に至り、巨魚を見、一魚を射殺す」とある。【一四】五嶽、支那の名山五つを合稱す。東は泰山、南は衡山、西は華山、北は恒山、中央は嵩山。【一五】三泉下、史記に「始皇を驪山に葬る。始皇、初めて即位するや、驪山に穿治す。天下を并すに及び、天下の徒七十餘萬人を送詣し、三泉を穿ち、銅を下して、棺を致し、宮觀百官、奇器珍怪、徙し藏して之に滿つ」とある。三泉下は、地下三層の底に在る泉の其下といふこと。【一六】寒灰、死骸が次第に風化して灰となるをいふ。もとより、火葬にしたのではない。韓非子に「死者、はじめ死して血、すでに血して骸、すでに骸して灰、すでに灰にして土」とある。

【題義】これは、秦の始皇を詠じたのである。始皇は、もとより一代の英主であるが、壽命は、仕方

がないといふ意味を述べたので、格別、新意もないが、その措辭は、流石に觀るべきものがある。但し、尙採不死藥以下は、無限の含蓄があつて、長しへに、仙を願ふものの戒となすべく、一面には、玄宗の驕奢にして仙を好むことに對して、多少感慨を寄せたものらしい。

【詩意】秦の始皇は、春秋戰國以來、麻の如く亂れた支那四百餘州を統一し、六合を掃蕩したので、その堂堂と打つて出た有様は、虎視耽耽と稱すべく、まことに、素晴らしいものである。かくて、劍を揮り廻して、浮雲を切り拂ふと、天下の諸侯は、皆恐れ入り、西に來て降服して仕舞つた。始皇の英明なる果斷は、天より啓かれたもので、又羣才を駕御するだけの雄才大略を持つて居た。かくて、天下を統一したる後は、民間の兵器を沒收して、十二の金人を鑄り、爾後、決して、戰をしないといふ決心を示し、これまで嚴重に閉鎖して置いた函谷關を開放して、東方よりの往來に便した。その後、始皇は、頻りに天下を巡狩し、南は、會稽山に登つて、天下統一の功績を銘記した石碑を立て、東は、瑯琊臺に登つて、はるかに東海を眺望した。なほ、内に於ては七十餘萬の刑徒を繰り出し、驪山の麓に大工事を起して、豫め山陵を築かれた。ここまでは、先づ善いとして、その上に、方士等を海中に遣して、長生不死の藥を求め、しかも、何時でも、うまく行かぬといひ、茫然として哀んで居た。されば、徐福が詐つて、大きな海魚が兎角邪魔をして困まるといふと、始皇は之を真とし、連弩を用意して、海魚を見つけ次第射殺させた。しかし、海中には、鯨といふものが居て、崔嵬として高く、

その額や鼻は、五嶽の名山に比すべく、一たび波を蹴立てて氣を吐けば、雲となり、雷となつて、おそろしい響を發し、一たび鰭を振へば、殆んど青天を蔽ふ程で、蓬萊などは、とても見られない。始皇の如き大豪傑でも、死ぬのが嫌だといふばかりに、長生不死を希ひ、つまらぬ迷の爲に、折角の智慧が暗み、今にも徐福が藥を采つて歸つて來るだらうと、頻りに待つて居たが、徐福は、うまうまと始皇を給いて、樓船に童男童女を乗せた儘、決して歸つて來ない。やがて、始皇は、愈よ崩去された故に、かねて用意して置いた驪山に葬り、水の出る地層を三度まで掘り抜いた。其深い處に金棺を埋めたが、棺中の死骸は、やがて風化して灰となつて仕舞ひ、ここに、蓬萊だの不死の藥だのいふことは、皆妄誕不稽の空想に外ならぬことが分つたのである。

【餘論】乾隆御批に「その盛を極寫し、正に中間轉筆の爲に地を作す、茫然使心哀の五字、多少の包含、秦を借りて以て諷す、意深く旨遠し」とあつて、宜しく、我が前言と併せて觀るべきである。

鳳飛九千仞。五章備綵珍。

鳳飛ふこと九千仞、五章、綵珍を備ふ。

銜書且虛歸。空入周與秦。

書を銜んで、且つ虚しく歸り、空しく入る周と秦と。

橫絕歷四海。所居未得鄰。

橫絶して四海を歴、居るところ、未だ鄰を得ず。

吾營紫河車。千載落風塵。
藥物祕海嶽。採鉛青溪濱。
時登大樓山。舉首望仙眞。
羽駕滅去影。飈車絕回輪。
尙恐丹液遲。志願不及申。
徒霜鏡中髮。羞彼鶴上人。
桃李何處開。此花非我春。
惟應清都境。長與韓衆親。

吾、紫河の車を營み、千載、風塵を落す。
藥物、海嶽に祕し、鉛を採る、青溪の濱。
時に大樓の山に登り、首を擧げて仙眞を望む。
羽駕、去影を滅し、飈車、回輪を絶つ。
尙ほ恐る、丹液遅く、志願申ふるに及ばず。
徒に鏡中の髪を霜にして、かの鶴上の人に羞づるを。
桃李、何の處にか開く、この花、我が春に非ず。
惟だ應に清都の境、長く韓衆と親むべし。

【字解】(一) 五章 五色の備はること。(二) 術書 宋書に「鳳凰、書を銜んで、文王の都に遊ぶ。書に曰く、殷帝無道、天下を虐亂す、黃命すてに移つて、復た久しきを待す。靈祇遠く離れ、百神吹き去る、五星房に聚まり、四海を昭理す」とある。(三) 橫絶 絶は飛んで直に渡ること。(四) 紫河車 一斗の水を煮つめ、其中から九兩の聖石を得、はじめに出來たのを死女といひ、次を玉液といひ、次に紫色になつたのを紫河車といひ、その河車は、なほ白、青、赤の色に變化して行くのである。つまり、仙薬といふこと。(五) 落 脫落、ふるひ落す。(六) 青溪 地名、一統志に「清溪は、池州府に在り、源は清溪山と石人嶺とに出で、水合して北流し、匯して玉鏡潭となり、又東流して府門の外を經、復た折れて、北、清溪口に至り、大江に入る」とある。(七) 大樓山 一統志に「池州府城の南七十里に在り」とある。(八) 仙眞 眞も仙人。(九) 羽駕 雙に乗り、鶴に駕すること。(一〇) 飈車 鳳

に御し、雲に載ること。(二) 丹液 漢武内傳に「其次の藥に九丹金液子あり、これを服するを得ば、白日天に昇る」とあり。抱朴子に「久視の方を考ふるに、還丹金液を以て大要と爲さざるなし」とある。(三) 鶴上人 鶴に乗つた仙人。(四) 清都 列子に「清都紫微鈞天廣樂は帝の居るところ」とある、即ち天帝の居處。(五) 韓衆 仙人の名、楚辭に「見韓衆而宿之兮問天道之所在」とあり、抱朴子に「韓衆、萬籟を服すること十三年、身に毛を生じ、日に書萬言を視、皆これを誦し、冬恆に寒からず」とあり、又神仙傳にも見えて居る。

【題義】これは、専ら游仙の事を述べたのである。李白は、前詩に於て、求仙の妄誕不稽なることを痛言したが、それは、帝王などに對して云つたので、自分は、この世に於て、一かどの功名を立て、その後は、仙術を學ばうといふので、つまり、隱棲高踏の志を託するが爲にて、必ずしも長生不死を希望した譯ではない。

【詩意】鳳凰は、鳥中の王で、一たび翼を搏てば、九千仞の高きに上り、衆鳥を見下して居る位、又その羽毛は、五色が燦然として、珍らしき彩色を爲して居る。鳳凰は、聖人の徳ある帝王が位に居る時に限つて、世に出るのであつて、かつて、書を銜んで飛び下り、その書には、殷帝の無道なる爲め、やがて聖人が起つて、天下の人民を救ふといふことが書いてあつた。そして、この書を人間に傳へた儘、たちまち歸り去り、周や秦が、天下を統一したが、その徳は格別の者でなかつたら、再び出て來ても、久しく其處には留まらず、天空を横絶して四海を巡り、遂に徳必ず都ありといふやうな恰好の落ち付き處を見付けずに仕舞つた。鳳凰の聖を以てしてさへ、人間に於て、然るべき時に出會はな

い位だから、吾が今日浮世に困んで居るのも、怪むに足らぬことである。そこで、吾は、玉液を鍊り、これを服して、長しへに風塵を拂ひ落し、物外の仙境に逍遙せむと志ざした。元來、仙家の藥物は、遙かなる海嶽の間に秘めてあるのであるから。自分は、天下に浪遊し、第一に青溪に赴いて鉛を採集し、やがて、大樓の山に登り、首を擧げて、仙人の居る方を望んだ。すると、仙人は、鸞鶴に騷し、自由に天上を飛行して居るから、その影だに見えず、又風に御し、雲に乗つて居て、その車の輪を後へ廻すことさへない。かくて、仙人にも遇はず。従つて教を受けることがないから、丹液の成ること遅くして、登仙の志願、達すること能はず、やがて、鏡に照らせば、頭に霜を置いて、髪の毛が白くなり、かの鶴に乗れる人人に對するも恥しい様になりはせぬか、即ち仙を得ずして、空しく老い去りはせぬかと、竊に心配して居る。桃李は、何處に花咲いて居るか、元來、桃李などは、世俗の春を爲すもので、仙境の春ではないから、格別見たくもない。されば、我は、どうかして、清都といふ天上の仙京に至り、韓衆の如き仙人と長く親んで、道を學びたいと思ふのである。

【餘論】この類の詩は、縹緲空靈の趣、頗る觀るべく、李白の出世間願望を寫し出し、その人間離れにして居る處が、即ち生命である。

太白何蒼蒼星辰上森列

太白、何ぞ蒼蒼たる、星辰、上に森列す。

去天三百里、邈爾與世絕。
 中有綠髮翁、披雲臥松雪。
 不笑亦不語、冥棲在巖穴。
 我來逢真人、長跪問寶訣。
 粲然啓玉齒、授以鍊藥說。
 銘骨傳其語、竦身已電滅。
 仰望不可及、蒼然五情熱。
 吾將營丹砂、永與世人別。

天を去ること三百里、邈爾として世と絶ゆ。
 中に綠髮の翁あり、雲を披いて、松雪に臥す。
 笑はず、亦た語らず、冥棲して巖穴に在り。
 我來つて真人に逢ひ、長跪して寶訣を問ふ。
 粲然として、玉齒を啓き、授くるに鍊藥の説を以てす。
 骨に銘じて其語を傳ふれば、身を竦めて、すでに電滅。
 仰望すれども及ぶべからず、蒼然として五情熱す。
 吾將に丹砂を營み、永く世人と別れむとす。

【字解】(一) 太白、山名、水經註に「太白山は、武功縣の南に在り、長安を去ること二百里、その高さを知らず、俗に云ふ、武功太白、天を去ること三百」とある。杜彦達は「太白山は、南、武功山に連り、諸山に于て最も秀傑たり、冬夏積雪、これを望めば皓然たり」といつて居る。(二) 冥棲、一心不亂に行ひ澄ます。(三) 真人、仙人に同じ。(四) 寶訣、仙家の秘訣。(五) 粲然、笑ふときに齒の白く見える貌。(六) 蒼然、物の萌え出づる貌。(七) 五情、喜怒哀樂悲、陶潛の詩に身没名亦盡、余之五情熱とある。

【題義】これも、游仙の事を述べたもので、前詩に比すると、更に一段の妙を極めて居る。

【詩意】太白山は、蒼蒼として綠深く、その絶頂には、幾多の星辰が森然として羅列して居る。ま

とや、太白山は非常に高く、天の上まで、わづかに三百里を隔てて居るとのことなれば、かくの如きも、怪しむに足らず、ここに登れば、邈焉として、浮世と絶縁する。さういふ名山であるから、縁變の仙人が其中に隠れて居て、雲を披いて衣となし、松に降り積む雪を以て裘となし、そして、巖穴の間に黙然と坐つて居て、笑ひもせず、話しもせず、一心不亂に行ひ澄まして居る。もとより、普通の人が往つたところで、見向きもせぬが、我は、幸に仙骨あるものであるから、その仙人を訪ひ、長跪して拜をなし、長生不死の術は、如何なるものかといつて、取り敢へず、仙家の秘訣を尋ねた。すると、仙人は、自分の方を見て、粲然として笑ひ、玉の如き齒を啓いて、藥を鍊るには、かく致すべきものであるといつて、懇懇と其方法を教へて呉れた。折角の口授を忘れてはならぬといふので、一生懸命に其語を骨に銘して覚えやうとする間に、仙人は、一寸身を聳かし、さながら、電光の滅するが如く、行衛も知れなくなつて仕舞ひ、いくら、仰ぎ望んでも、到底追つ付かぬので、蒼然として、五情が熱して來た。たとひ、今日、折角の秘訣が十分に覚え切れないにもせよ、我に仙縁あることは明白であるから、この後、丹砂を鍊り、かの仙人が鍊身電滅せしが如く、白日昇天して、長しへに世人と別れたいと念ずるのみである。

【餘論】蕭士贊は「太白少にして、司馬承禎に遇ふや、その仙風道骨あつて、ともに仙を學ぶべきを謂ふ。太白、亦た志あり、この詩、泛然の作に非ず」といひ、胡震亨は「古風中、仙を言ふもの十

有二、その九は自ら游仙を言ひ、その三は求仙を説く。通徹互に殊なるべからざること、乃ち爾り。白の自ら仙すべしといふは、亦た借りて以て、その曠志を抒ぶるのみ、豈に真に世に神仙ありと謂はむや。他詩に云ふ、此人古之仙、羽化竟何在と。意、自ら見るべし。これ游仙を言ふと雖も、未だ嘗て求仙を説くものに合はずんばあらざるなり。時、方に兵を吐蕃南詔に用ひ、しかも、授録投龍、崇尙廢せず、大に秦皇漢武の爲に類す。故に、白の求仙を説くもの、亦た多く秦漢を借りて喩と爲す。他詩又云ふ、窮兵黷武今如此、鼎湖飛龍安可乘と。その本指なるかといつて居る。なる程、李白が仙を學んだのは、必ずしも、丹を鍊つて昇仙することが出来ると信じた譯ではなく、大半は、仙家の人間離れをして居る其點が氣に入つて、つまり、その曠懷を託したものに相違なからう。それから、乾隆御批には「郭璞の遊仙、青谿百餘仞の一首、純ら是れ寓意。白の詩、彼と同じからず。蓋し、士の志を時に得ざるもの、姑く其意を此に寄するのみ。舊史に稱す、白、逸才あり、志氣宏放、飄然として超世の志ありと。殆んど亦た性の近きところ、或は放たれて東歸し、將に道籙を授からむとする時の作ならむ」といつて居るが、如何にも、さうらしい。

代馬不思越。越禽不戀燕。情性有所習。土風固其然。

代馬は越を思はず、越禽は燕を戀はず。情性習ふところあり、土風固より其然らむ。

昔別雁門關。今戍龍庭前。

むかしは雁門の關に別れ、今は龍庭の前に戍す。

驚沙亂海日。飛雪迷胡天。

驚沙、海日を亂し、飛雪、胡天に迷ふ。

蟻蝨生虎鶻。心魂逐旌旆。

蟻蝨、虎鶻に生じ、心魂、旌旆を逐ふ。

苦戰功不賞。忠誠難可宣。

苦戰すれども、功、賞せられず、忠誠、宣ふべきこと難し。

誰憐李飛將。白首沒三邊。

誰か憐む李飛將、白首、三邊に沒す。

【字解】(一) 代馬不思越。北方の代といふ處に産する馬は、南方の越に産する馬は、北方の燕を思はない。二句同義、各その郷里に安んじ、その他を眷戀せざること。(二) 雁門關。一統志に「雁門關は、代州の北三十五里に在り、雙關陡絕、雁過ぎじと欲するもの、必ず此徑に由る。故に名づく。一名雁門塞。山に倚つて關を立て、これを雁門關といふ。山西の關、凡そ四十有餘、皆隘に踞し、固を保つ、しかも雙拔雄壯は雁門を最と爲す。趙の李牧、漢の郅都、遂に此に備へ、匈奴敢て塞固に近づかざるは、皆一時の良將なれども、地の險を藉るに非ずと謂ふべからざるなり」とある。(三) 龍庭。匈奴の天地鬼神を祭る處。(四) 盤踞。だに、しらか。(五) 虎鶻。羽林軍、即ち近衛兵は、著物に虎を描いてあるから、虎賁といふのである。鶻は、雉子の一種、極めて強い鳥で、唯唯をすれば、必ず相手を殺すといふ處から、それにあやかるやうに、この鳥の尾で兵士の冠を飾つた。虎鶻といへば兵隊の裝束。(六) 旌旆。周禮に「通帛を旌となす」といひ、鄭玄の註に「通帛とは大赤を謂ふ。周の正色に從つて飾なし。析羽は五采、これを旌の上に繫ぐ、謂ゆる旌を千首に注するなり」とある。つまり、旌は赤色の絹地の旗、旆は五色の毛の指物。(七) 李飛將。李廣をいふ。史記に「李廣、右北平太守となる。匈奴、これを聞き、讎して漢の飛將軍といひ、これを避け、數歲敢て右北平に入らず。元狩四年、大將軍青に從つて匈奴を撃つとき、兵を引いて東道に出づ。軍に導なく、

惑うて道を失ひ、大將軍に後る。大將軍、長史をして道を失ふの状を問はしめ、上書して天子に軍の曲折を報ぜむと欲す。廣、その麾下に謂つて曰く、廣、結髮、匈奴と大小七十餘戰、今幸に大將軍に從つて出で、單子の兵に接す、しかも、大將軍、廣を従し、部行回遠、又迷うて道を失ふ、豈に天に非ずや。廣年六十餘、終に復た刀筆の吏に對する能はず」と。遂に刀を引いて自刎す」とある。(八) 三邊。幽州、并州、涼州。北方の國境から匈奴に行く道路に三あるをいふ。

【題義】これは、征戍の爲に、人民の疲弊したことを諷したので、杜甫の前出塞、後出塞、及び兵車行などと併觀すべきものである。

【詩意】代州の鳥は、決して、南の越の方を思はないし、越から飛んで来た鳥は、北の燕の方を戀しくは思はない。これ即ち情性の習ふところで、各その土風と相應するやうに成つて居るのである。鳥獸でさへ其通りであるから、兵士が萬里の外に征戍するのは、全く情性の習ふところと相反して居る。かの兵士は、はじめ、雁門關に別を告げて、遠く北地に赴き、今は龍庭といふ大沙漠の前に駐屯して居る。この邊は、沙の海であるから、一たび、風が起れば、驚沙の爲に白日も色を失ひ、飛雪が胡天に迷ふといふ有様。しかも、駐屯の期限も、大分長くなつた爲に、兵士の衣甲には、虱や、だにが湧いて来た。彼等は、常に故郷へ歸りたいと思ひつづけ、心魂搖動して、たとへば、旌旆のひらひらすると一般。それから苦戰して功を立てたからといつても、それッ切りで、大將こそ或は御褒美を頂戴するかも知れぬが、兵士には、そんな事が少しも無いから、滿腹の忠誠を宣ふべき折がない。まこと

に詰らなく、且つ氣の毒千萬の事である。しかし、それは兵士ばかりでもなく、將校輩にも、随分その例はある。むかし、漢の李廣は、非常に戦争が上手であつたが、妙に不仕合の人で、たびたび戦争に出ても、難儀な目にはかり値つて、格別の功績を立てず、朝廷から酬いられたこともなく、衛青だの、霍去病だのいふ人達が封侯になつて仕舞ひ、匈奴から飛將軍と綽名された李廣その人は、白髮頭に成るまで、三邊に於て戦争して、遂に死んで仕舞つたので、何人も之を悲まぬものは無い。それに付けても、人は故郷を思ふものであるから、その事を御上に於て察せられたならば、少しく夷征伐を止めて、貰ひたいものである。

【餘論】蕭士贇は「この篇は、感讒の詩、時に於て必ず爲にすると云つて作るなり」といひ、乾隆御批には、其意を敷衍して、「民は郷井に安んじ、離別を難しと爲す。況んや、これを死地に驅るをや。起意、惻然念ふべし。杖杜は士を勞し、その室家の情を道ふ。出車は、卒を勞す、その執獲の功を美す。盛世、豈に、征役なからむや。明皇、邊事を喜び、賞を冒し、功を掩ふ者あるを致す。蕭士贇、その時事を感讒し、爲にするあつて作ると謂ふ。揚水、折父、風雅の變たる所以なり」と云つた。ここに擧げた杖杜、出車、揚水、折父は皆詩經の篇名である。それから、李廣は飛將軍といはれたのに、それを略して飛將とのみ云つたのは、歌後の語のやうで、面白くないといふ説がある。しかし、顧炎武は之を駁して「昔人、この詩、飛將軍を以て截して飛將と作すを譏る。然れども、古人

自ら此語あり。後漢の班勇傳に、班將、能く北鹵を保ち、邊害を爲さざるかといふ。後魏の唐永、正光中、北地の太守となり、數ば賊と戦つて、未だ嘗て敗北せず。時人語つて曰く、陸梁する莫れ、恐らくは、爾、唐將に逢はむ、と。竝に將軍を以て將となす」といひ、論證極めて確當である。現に、李白と同時の王昌齡にも「但使龍城飛將在」といふ句さへある。

客有鶴上仙。飛飛凌太清。

客に鶴上の仙あり、飛飛として太清を凌ぐ。

揚言碧雲裏。自道安期名。

揚言す碧雲の裏、自ら道ふ安期の名。

兩兩白玉童。雙吹紫鸞笙。

兩兩白玉童、雙んで吹く紫鸞の笙。

去影忽不見。回風送天聲。

去影忽ち見えす、回風、天聲を送る。

舉手遠望之。飄然若流星。

手を舉げて、遠く之を望めば、飄然として、流星の若し。

願餐金光草。壽與天齊傾。

願はくは、金光草を餐し、壽、天と齊しく傾かむ。

【字解】【一】凌、經歷する。【二】碧雲、青雲に同じ。【三】安期、仙人の名、史記に「李少君曰く、臣、かつて海上に遊び、安期生を見る。安期生、臣に棗を食はしむ。大、瓜の如し。安期生は、仙者、蓬萊中に通ず、合すれば見はれ、合せざれば隠る、と。ここに于て、天子、方士をして海に入つて蓬萊安期生の屬を求めしむ」とあり、又劉向列仙傳にも見えて居る。【四】白玉童、童子

の願、玉の白きが如きといふ。【五】紫鸞。鸞は、その制、鳳翼に象る故に、ここでは、それに類似した紫鸞てふ字面を用ひて之に冠したのである。【六】回風。すさまじく吹きめぐる風。【七】天聲。天韻に同じ。【八】金光草。廣異記に「謝元暉、東岳夫人の居るところに至る。異草あり、葉は芭蕉の如く、花は正黄色にして、光、鑑すべし。曰く、これ金明草なり」と。晉の咸和九年、東華青童、魏夫人に石精金光化形靈丸を賜ふ」とあつて、金光草は、即ち金明草である。

【題義】この篇は、游仙の趣を理想的に述べたので、何時かは仙人に遇つて、長生不老の薬を得、おのが心の欲するままに振舞ひたいといふ意を述べたのである。

【詩意】鶴の背に乗つた仙人があつて、飄飄然として、大空の上までも飛んで行かうとして居る。そして、青雲の中から聲高く名乗りを上げて、我こそは安期生といふ者だといつた。そこで、昨を定め、よく見ると、左右には面色白玉の如き仙童が同じく鶴に乗つて、先導を爲し、面白氣に紫鸞の笙を吹いて、合奏して居る。我は、この安期生に就いて、例の秘訣を學ぼうと思つたが、やがて、其影も見えなくなり、吹き回る風に伴はれて、笙のみが、さながら天の聲の如く聞えて居る。そこで、手を舉げて、遠く之を望むと、飄然として流星の如く、やがて行衛も知れなく成つたのは、まことに残り惜しいことである。我は、不幸にして、安期生から教を受けることが出来なかつたが、すでに其の人を見た上は、工夫を積みさへすれば、その仲間に這入れぬことも無いといふことを悟つたから、金光草を餐し得るまで、仙術を修得し、天が傾けば、いざ知らず、天の傾かざる以上は、壽が天と共に長く延びるやうに成るであらう。

【餘論】去影忽不見、回風送天聲の四句は、前の太白何蒼蒼の詩中、銘骨傳其語、鍊身已電滅の四句と略ば同義であるが、その措辭の重複せぬ處は、最も玩味すべき處である。乾隆御批も、偶ま此に道及し、前の太白何蒼蒼の一首、わづかに其語を得たり。これは、問はむと欲して得べからず。更に一層を進む。天聲、流星の二語、眞に天上の飛仙の如く、望むべくして即くべからず。李賀の羲和敲日玻璃聲は、極意創造、終に彫琢に屬するを覺ゆ、自らは是れ仙鬼の別」といつた。蕭士贇は「この篇も亦た游仙詩の體なり、恐らくは是れ贈答の詩、泛然の作に非ざるなり」といつたが、これは、單に幻想を述べたものとした方が面白いやうである。なほ此詩には、頗る異同があるので、一本には、

五鶴西北來。飛飛凌太清。仙人綠雲上。自道安期名。兩兩白玉童。雙吹紫鸞笙。飄然下倒景。倏忽無留行。遺我金光草。服之四體輕。將隨赤松去。對博坐蓬瀛。

去影忽不見。回風送天聲。我欲一問之。飄然若流星。願餐金光草。壽與天齊傾。

飄然下倒影。倏忽無留形。遺我金光草。服之四體輕。將隨赤松去。對博坐蓬瀛。

咸陽二三月。宮柳黃金枝。

咸陽二三月。宮柳黃金の枝。

綠幘誰家子。賣珠輕薄兒。

綠幘、誰が家の子ぞ、珠を賣る輕薄の兒。

日暮醉酒歸。白馬驕且馳。

日暮、酒に酔うて歸り、白馬、驕つて且つ馳す。

意氣人所仰。冶游方及時。

意氣、人の仰ぐところ、冶游方に時に及ぶ。

子雲不曉事。晚獻長楊辭。

子雲、事を曉らず、晩に長楊の辭を獻す。

賦達身已老。草玄鬢若絲。

賦、達して、身、すでに老い、玄を草して、鬢、絲の若し。

投閣良可歎。但爲此輩嗤。

閣に投ずる、良に歎すべし、但だ此輩に嗤はれむ。

【字解】一【一】咸陽、略は後世の長安に同じ。【二】綠幘、幘は頭巾、漢書に、はじめ、帝の姑館陶公主、賣太主と號す。堂邑侯

陳午、これを尙す。主、寡居して、年五十餘。近ごろ、董偃を幸す。はじめ、偃、母と珠を賣るを以て事となす。偃、年十三、母に隨つて、主家に入らず。左右、その姣好を言ふ。主、召し見、因つて第中に留め、年十八に至つて冠す。出でては響を執り、入つては内に侍し、溫柔にして、人を愛す。主の故を以て、諸公、これに接し、號して董君といふ。後、偃、懼れ、主に白して長門園を獻せしむ。上、大に悦び、名を更めて長門宮といふ。上、錢千萬を以て、主に從つて飲む。後數日、上、山林に遊む、主自ら幸を執つて蒞臨し、導き入れ、階に登りて、坐に就く。上曰く、願はくは、主人翁に謁せむ。と。主、乃ち殿を下り、響を去り、徒跣頓首、謝して自ら董君を引く。董君、綠幘を傳げ、主に隨ひ、前んで殿下に伏す。主、乃ち贊すらく、館陶公主の危人臣偃、味死再拜して謁す。と。因つて、叩頭して謝す。上、これが爲に起つ。詔あり、衣冠を賜ふ。主偃起つて、走つて衣冠に就く。主、自ら食を奉り、偃を進む。

この時に當つて、董君、尊ばれて名いはず、稱して主人翁となす。飲んで、大に饜樂す。ここに於て、董君の貴寵、天下聞かざるなしとある。【一】冶游、風流の遊。【二】子雲、漢書に「揚雄、字は子雲、蜀郡成都の人。孝成帝の時、長楊賦を上る。哀帝の時、丁傅、董賢、事を用ひ、諸の之に附離するもの、皆家を起して二千石に至る。時に、雄、方に太玄を草し、以て自ら守るること、晏如たり。王莽の時、甄尋劉棻が再び符命を進めし事より、辭の連及するところ、便ち收めて請はす。時に、雄、書を天祿閣上に校す。治獄事使者、來つて雄を收めむと欲す。雄、自ら免れざるを恐れ、乃ち閣上より自ら投下し、幾んど死す。莽、以て事に與からずと爲し、詔して、問ふことなからしむ。然れども、京師これが語を爲して曰く、惟寂寞自投閣、愛清淨作三符命とある。

【題義】これは、柳が初めて芽ぐんだ長安の春景色に對し、途中で出合つた行樂少年の意氣揚揚たる有様を詠出して、自己の感懷を寄せたのである。それから、前八句は少年の事、以下六句は揚雄の事を敘し、但爲此輩嗤の一句を以て、前後を結び付けたのである。

【詩意】咸陽の都に於て、二三月の頃、御殿の側に植ゑてある柳は、黄金色の芽を吹き出して、柔かい枝が鳥島として垂れて居る。その間を得意に往來して居るのは、緑色の頭巾を戴いた少年、いづれ、皇族とか、貴族とかいふ人達の奥向に出入して寵幸を得たもので、もとを洗へば、漢の董偃の如く、珠を賣つて居た輕薄兒であつたらうと思はれる。さういふ者が日暮酒に酔ひ、白馬に乗つて、さも快げに柳の間を馳せて居る。その意氣の盛なるは、道路の人人が見て羨むばかりであつて、年も若いし、時節も二三月頃で、丁度冶游の好期節であるから、その得意満面、傍若無人なるも、決して怪むに足らぬ次第である。これに反して、漢の揚雄の如きは、まことに事を曉らぬもので、及時の行樂などい

ふことには少しも目を呉れず、こつこつと勉強ばかりして居た。かくて、晩年、はじめて長楊の賦を天子に上り、やつとの事で、召し出されて俸給に有り付いたが、氣の毒にも、その時分には、すでに老い朽ちて居た。彼は太玄經を草し、聖人の易の向を張らうといふので、若い時分から刻苦して居て、それを完成すると、兩方の鬢が亂れて絲の如くなつて仕舞つた。それから、最後には、連累の嫌疑で逮捕されむとし、天祿閣上から飛び下りて、やつと助かつた位で、かの得意の少年輩の笑を免れぬものである。但し、この得意の少年と、揚雄の如き學究と、二つながら、我が理想とするところではない。

【餘論】蕭士贇は「子雲は、白、以て自ら況するなり。この時、威里驕縦にして制を踏え、動もすれば、高位を致し、儒者は下僚に沈困す。この詩、必ず感諷するところあつて作りしならむ」といつて居るが、李白は、決して區區たる揚雄を以て自ら居るものではなく、投閣良可歎、但爲此輩嗤の如き、決して、其人を崇め奉つたものとは見えぬ。吳昌祺が「子雲、自ら守ること能はず、すなはち、反つて小人に嗤はれしを言ふ。子雲を以て自ら況せしものといふは、非なり」といつて居るのは、極めて穩當であると思ふ。乾隆御批も、これを承け「世に謂はゆる事を曉るとは、時に及んで行樂するのみ、しかも、老に至つて屹屹たるものは、晚節末路、又復た歎すべし。白は氣骨自負、豈に辭人を以て終老するを願はむや。兩兩夾照、これ漫に談嘲の語を作すならず」といつて、まことに詩意を十分に盡して居る。

莊周夢蝴蝶 蝴蝶爲莊周

莊周は蝴蝶を夢み、蝴蝶は莊周となる。

一體更變易 萬事良悠悠

一體、更に變易、萬事、良に悠悠。

乃知蓬萊水 復作清淺流

乃ち知る、蓬萊の水、復た清淺の流を作すを。

青門種瓜人 昔日東陵侯

青門に瓜を種うるの人は、昔日の東陵侯。

富貴故如此 營營何所求

富貴、故より此の如くならば、營營何の求むる所ぞ。

【字解】(一) 莊周夢蝴蝶 莊子の齊物論に「昔者、莊周、夢に蝴蝶となる、栩栩然として、蝴蝶なり。自ら噓して、志に適するか、周たるを知らざるなり。俄然として覺むれば、蓬蓬然として周なり。知らず、周の夢に蝴蝶となるか、蝴蝶の夢に周となるか。周と蝴蝶と、必ず分あらむ。これを物化といふ」とある。(二) 蓬萊水 神仙傳に「麻姑云ふ、接待以來、東海三たび桑田となる。さきに蓬萊に至る。水又往日會せし時よりも淺く、略は半のみ、豈に復た陸陸とならむとするかと。王遠歎じて曰く、聖人皆言ふ、海中行くも復た塵を揚ぐるなり」とある。(三) 青門種瓜人 三輔黃圖に「長安城より東に出づる南頭の第一門を霸城門といふ。民、門色の青きを見、名づけて青城門といふ。或は曰く、青城門外、舊と佳瓜を出す。廣陵の人邵平、秦の東陵侯たり。秦、破れて、布衣となり、瓜を青門外に種ふ、瓜美なり、時人これを東陵瓜といふ」とある。(四) 營營 忙しげに立ち働く貌。

【題義】これは、李白の人世觀を述べたもので、その材料は、格別新しくもないが、巧に之を融化した處に、獨特の手際が見える。

【詩意】むかし、莊周が蝴蝶を夢み、栩栩然として蝶に成つたが、一たび夢が覺めると、その蝶は、依然として元の儘なる莊周であつた。蝴蝶が莊周と成つたのか、莊周が蝴蝶と成つたのか、自分でも分らぬといつて居る。もとより、一つの身體であるから、莊周が本當なのか、蝴蝶が本當なのか、どちらか一つに相違ない。一つの身體でさへ、かくの如く交互に變易するのであるから、人間萬事、變化して極まらず、悠悠として料り知ることの出來ぬのは、當り前の事である。東海中の蓬萊島を繞る水ですら、麻姑といふ仙女の言に據ると、たちまち淺くなつて、行く行くは塵を揚げるやうにも成らうといふので、一寸聞くと變であるが、一體變易が宇宙の原則であるとすれば、これも怪むに足らぬことである。されば、秦の東陵侯の邵平といふ人が、漢の世に成つて、零落した揚句の果に、長安の片隅の青門といふ處で、瓜を作つて、わづかに生活して居たといふが、猶ほ以て怪むには及ばぬことである。しかし、青門へ往つて、瓜を作つて居る人を見ても、これが昔日の東陵侯であらうとは、誰にしても思ひも寄らぬことであらう。一體變易の理から推せば、富貴とても、もとより此の如くであるのに、くよくよとして之を求めやうとするのは、まことに愚の骨頂である。

【餘論】阮籍の詠懷五十首の中に、昔聞東陵瓜、近在青門外といひ、持瓜思東陵といひ、邵平の故事は頻りに使つてある。それから、庾信の擬阮籍詠懷の詩中にも、千年水未清、一代人先改、昔日東陵侯、惟有瓜園在といつて、矢張同じ故事を用ひて居るし、次に尋思萬戶侯、中夜忽然愁、琴聲遍屋裏、書卷滿牀頭、雖言夢蝴蝶、定自非莊周といふに至りては、無論、莊子から引き來つたのである。李白の此詩は、阮籍庾信の作を踏襲して、同じ事を驅使して居るが、蝴蝶と東陵侯とを聯結する爲には、蓬萊清淺の一故事を用ひ、それが巧に圓熟して居るところから、全く面目を一新したので、さすがに換骨脱胎の活手段である。劉辰翁は「語意音節、適此の如くして止むべし」といひ、蕭士贇は「これ達生者の辭なり、謂へらく、忽然として、人化して物となり、忽然として、物化して人となる。一體變易、未だ嘗て知る能はず。悠然萬事、豈に能く盡く知らむや。況んや、又乃ち滄桑の變を知るをや。故侯、瓜を種う。富貴の者、固より是の如きなり。すでに、この理を燭破すれば、なほ何の求むるところあつて、營營苟苟として以て生を勞せむや」といひ、最後に、乾隆御批には「達語を作す、これ白が本色、然れども、意は後半に在り、前は乃ち興起のみ。莊周の三句、第四句を起し、五六兩句、横空突入、實に上下を貫く。この二語なければ、全詩使は是れ率直。青門の二語、事に就いて指點し、本意を結出し、無數の層折あり。その辭意の自然に至りては、韓愈が文如翻水成、初不用意爲と云ふところなり」とあつて、流石に善く見て居るし、殊に乃知蓬萊水の二句が、横空突入、實に上下を貫くといつたのは、まことに適評である。

齊有侗儻生。魯運特高妙。齊に侗儻生あり、魯運特に高妙。

明月出海底。一朝開光耀。
却秦振英聲。後世仰末照。
意輕千金贈。願向平原笑。
吾亦澹蕩人。拂衣可同調。

明月、海底に出で、一朝、光耀を開く。
秦を却けて、英聲を振ひ、後世、末照を仰ぐ。
意、千金の贈を輕んじ、願みて平原に向つて笑ふ。
吾も亦た澹蕩の人、衣を拂うて同調すべし。

【字解】【一】 側僞、不朝に同じ。【二】 魯連、即ち魯仲連、史記の列傳に詳しく、殘らず此に引くことは出来ぬから、極めて簡略に述べて置く。魯仲連は齊人、奇偉側僞の畫策を好み、嘗て仕官して職に任ぜず。適ま趙に遊ぶ、會ま、秦、邯鄲を圍み、魏、新垣衍を趙に遣し、平原君に勸めて、秦を帝とし、以て其難を緩うせむとす。魯仲連、これを聞き、平原君に因つて新垣衍を見、秦を帝とするの不可をいふ。新垣衍、再拜して之を謝す。適ま、魏の公子無忌、晉鄙の軍を奪ひ、趙を救うて秦を撃つや、秦軍、遂に引いて去る。ここに於て、平原君、魯仲連を封ぜむとす。魯仲連、辭讓して、終に受けず。平原君、乃ち置酒し、千金を以て魯仲連の壽を爲す。魯仲連、これを却け、遂に平原君に辭して去り、終身復た見えずとある。【三】 明月、夜光の珠、月光に似たるあるが故に明月といふ。【四】 英聲、すぐれたる名譽。【五】 末照、餘光に同じ、上に明月の珠といつたから、故らに此字面を用ひたのである。【六】 澹蕩、放蕩に同じ、世事に拘はらぬこと。【七】 同調、聲音の相和するをいふ。

【題義】 これは、李白が平生崇拜して居る古しへの英傑の一人、魯仲連の事を詠出したのである。

【詩意】 齊國は、山東に位し、もと太公望が封せられ、後には五霸の第一たる桓公が崛起した地であるから、個儼不羈の人物が頻りに輩出したが、就中、魯仲連は、特別に高妙なる大人物で、たとへば、

明月の珠が海底から現はれ、一旦光耀を放つと、萬人皆目を張つて眺めるといふ風である。魯仲連は、趙に遊んで新垣衍等が秦を尊んで帝とするといふ相談をして居る時に當り、斷じて秦を帝とするの不可なるを論じ、その爲に、秦軍も恐れ入つて退却した位。その優れたる名譽は、世間に轟き渡り、そして、後世までも、その餘光を仰ぐ程である。かくの如き大功があつたにも拘はらず、千金の贈を輕んじて、これを却け、平原君の方を顧みて笑ひ、平生客を好む翩翩たる佳公子だといふ評判があつても、格別偉くもなく、とても我が相手とするに足らぬものだといふので、平原君に辭して、さつさと國へ歸つて仕舞つた。われ李白も、この浮世に傲る澹蕩の人であるから、もし衣を拂つて、この人の處へ往つたならば、定めて、同調の者だといつて、相許して呉れるであらう。

【餘論】 蕭士贊は「太白、平生豪邁にして、權臣を邀視し、富貴を浮雲にす。この詩、蓋し仲連の人と爲りに慕ふことあるなり」といひ、乾隆御批には「曹植の詩、大國多良材、譬三海出明珠、即ち明月出海底の意。白、委性超邁、故に魯連に感興す。後篇の子陵君平も、亦た此志なり」とある。

黄河走東溟。白日落西海。
逝川與流光。飄忽不相待。
春容捨我去。秋髮已衰改。

黄河は東溟に走り、白日は西海に落つ。
逝川と流光と、飄忽として相待たず。
春容、我を捨てて去り、秋髮、すでに衰改す。

人生非寒松。年貌豈長在。人生は寒松に非ず、年貌豈に長へに在らむや。
吾當乘雲螭。吸景駐光采。吾、當に雲螭に乗じ、景を吸うて光采を駐むべし。

【字解】【一】東漢、東海に同じ、深は深き海をいふ。【二】流光、太陽をいふ。【三】飄忽、去ること急なる貌。【四】春容、少年の容。【五】秋髮、白髮。【六】雲螭、螭は龍の角なきもの。【七】吸景、日月の景を吸ふ、即ち宇宙の元氣を吞吐する。【八】光采、顔の色つや。

【題義】この詩は、人生倏忽つたのに因り、矢張、仙を學ぶより外に仕方がないといふ意を述べたものである。

【詩意】黄河の水は、滔滔として流れ、遂に東洋の大海に注ぎ、空に掛れる白日は、しばしも運行を停止せず、やがて西海に落ちて仕舞ふ。この東流の水、西没の日は、飄忽として去り、決して人に頼著せず、どんどん経過するのである。かくて、光陰は人を待たず、人は老の至るを禁じ得ぬもので、春の花の如き少年の容貌は、いつしか我を棄てて去り、やがて、秋の霜と見まがふ白髮頭に成りはてて衰へて行くのである。歳寒の松は、千歳の壽を保ち得るが、人は、さういふものでないから、年と容貌とは、決して長く留まつて居らぬ。そこで、吾は仙術を修得し、仙人の乗る雲間の龍に跨り、宇宙の元氣を吞吐して、よく顔色を住め、そして、長生したいと思ふのである。

【餘論】楊齊賢は「太白の意、謂へらく、黄河東に走り、白日西に落ち、晝夜を捨てず、青春の容色、倏忽推謝、長松の四時を貫いて、柯を改め葉を易へざるに如かず。九鼎を服煉し、精を含み、神を養ひ、長久を累積するに非ずんば、安んぞ能く形を變じて仙せむや。」といひ、蕭士贇は、古詩「廻車觀言過。悠悠涉長道。四顧何茫茫。東風搖百草。所遇無故物。焉得不速老。盛衰各有時。立身苦不早。人生非金石。豈能長壽考。奄忽隨物化。榮名以爲寶。太白の此詩、亦た此意。古詩は、世を用つて名を留めむと欲し、太白は、仙を學んで以て世を離れむと欲す。その見趣、又流俗に出づ」といひ、その旨意を解説して、復た餘蘊なきを覺える。乾隆御批には「郭璞游仙の詩に云ふ、雖欲騰丹鸞、雲螭非我親」と。結語、これに本づく。別本に誰能學天飛、三秀與君采に作る、語意、殊に釋」とある。

松柏本孤直。難爲桃李顏。
昭昭嚴子陵。垂釣滄波間。
身將客星隱。心與浮雲閑。
長揖萬乘君。還歸富春山。
清風灑六合。邈然不可攀。

使我長歎息。冥棲巖石間。我をして長しへに歎息せしむ、冥棲せむ巖石の間。

【字解】(一) 松柏本孤直。荀子に「桃李は、一時に備樂たるも、時至つて後に殺がる。松柏に至つては、隆冬を経て凋まず、霜雪を蒙つて變ぜず、その眞を得たりといふべし」とある。(二) 巖石。後漢書に其傳が出て居るが、ここでは、其概略を記することにする。巖光、字は子陵、會稽餘姚の人。少にして高名あり、光武と同じく游學す。光武の即位に及び、乃ち名姓を隠じ、身を隠して見えす。帝、その賢を思ひ、以て物色して之を訪はしむ。後、これを齊國に得たり。帝、使を遣して之を聘せしむ。三反して後に至り、北軍に舍して秣糧を給し、太官、朝夕膳を進む。車駕即日、その館に幸す。光、臥して起たす。帝曰く、子陵、我、竟に汝を下す能はざるかと。復た光を引いて入り、舊故を論道し、相對すること累日、因つて共に偃臥す。光、足を以て帝腹に加ふ。明日太史奏す、客星、帝座を犯すこと甚だ急なりと。帝笑つて曰く、朕、故人巖子陵と共に臥するのみと。除して諫議大夫となせるも、屈ぜず。乃ち、富春山に耕す。後人、その釣處を名づけて巖石瀬となす。(三) 長揖。前に見ゆ。(四) 萬乘君。漢書に「天子は畿方千里、提封百萬井、定めて賦を出す、四十六萬井、戎馬四萬匹、兵車萬乘、故に萬乘の主と稱す」とある。(五) 富春山。一統志に「富春山は桐廬縣西三十里に在り、一名嚴陵山、清麗奇絶、錦峰繡嶺と號す、乃ち漢の巖子陵隱釣の處。前は大江に臨み、上に東西二釣臺あり」と記してある。(六) 冥棲。前に見ゆ。

【題義】これは、巖子陵を詠じて、敬慕の意を寄せたのである。

【詩意】松柏は、元と孤直なもので、桃李の如き麗はしき顔色を持たぬのは當然である。それと同じく、隱逸の高士は、世の中へ引き出さうとしても、おいそれと出て來るものではない。昭昭乎として高風世に知らるる巖子陵は、桐江といふ處で、七里灘の滄波の間に始終釣を垂れて居た。元來、巖子陵は、天上の客星に應じたもので、長しへに山に隠れ、その心は、浮雲と共に閒であるから、召し出りである。

【餘論】松柏本孤直の二句と昭昭巖子陵との間には、一寸聯絡が絶えて居るやうな按排である。これは、詩經に云ふ興の筆法で、その關係は讀者の摸索に任かせたのである。後人ならば、ここに必ず説明の數句を入れねば、氣が濟まぬのであるが、さうすると、言筈に落ちて、興の眞意が得られない。ここからは、即ち古人の詩法を會得すべき處であらう。なほ沈德潛は「議論を著けず、詠古の一體」といひ、乾隆御批には「起句、これを荀子に本づき、直に本指を掲ぐ、巖羽の謂はゆる門を開いて山を見るものなり。左思の詠作と風格正に復た相似たり」とある。

君平既棄世。世亦棄君平。君平既に世を棄て、世も亦た君平を棄つ。
觀變窮太易。探元化羣生。變を觀て太易を窮め、元を探つて羣生を化す。
寂寞綴道論。空簾閉幽情。寂寞、道論を綴り、空簾、幽情を閉ざす。

騶虞不虛來。鸞鷟有時鳴。騶虞は虚しく來らず、鸞鷟は時あつて鳴く。
 安知天漢上。白日懸高名。安んぞ知らむ、天漢の上、白日、高名を懸くるを。
 海客去已久。誰人測沈冥。海客去つて已に久し、誰人か沈冥を測らむ。

【字解】(一)君平、漢書に「嚴君平、成都の市に卜筮す。日に纒に數人を問し、百餘錢を得て、自ら養ふに足れば、肆を閉ぢ、廉を下して、老子を授く。揚雄、少にして數を學び、朝廷在位者の爲に君子の徳を稱す」とある。(二)騶虞、詩の毛傳に「騶虞は、鶴鳴なり、白虎黒文、生物を食はず、至信の徳あれば之に應ず」とある。(三)鸞鷟、鳳凰に同じ。(四)天漢、銀河、即ち天の河、海上の人が、或る處に往つて、何處とも分らず、これを清次にて牛に飲つて居る人に問ふと「君、還つて、蜀都に至り、嚴君平を訪はば之を知らむ」といひ、因つて、蜀に歸つて、君平に問うて、そこが銀河だといふことが分つたと博物志に書いてある。荆楚歲時記には、張翥が河源を探險した時の事としてある。(五)海客、海上の人。(六)沈冥、深沈玄默の義。

【題義】これは、嚴君平の事を詠じたので、前の嚴子陵と同一の筆法である。

【詩意】嚴君平は、濟世の才あるにも拘はらず、賣卜に隠れて居た。これは、君平の方から世を棄てたのであるが、唯だ一とほりの賣卜者として之を遇したところを見ると、世間の方からも、亦た君平を棄てたのである。君平は宇宙の變を觀て、深奥なる易理を究め、老子の精髓たる玄を探つて、一般人民を訓化しやうといふ大抱負を持つて居た。そこで、賣卜は、生活費を得れば足れりとし、その餘は、簾を垂れて幽情を養ひ、心しづかに老子の註解を執筆して居た。まことに、君平は騶虞の如き仁

獸、鸞鷟の如き瑞鳥に比すべきもので、殆んど聖賢といつても善い人物である。抑も騶虞は、無意味に此世に出て來るものではなく、鸞鷟も、然るべき時に限つて鳴くので、天が君平を生じたのも、決して偶然では無いのに、かくの如く自ら世を棄て、又世に棄てられたのは、何たる情ないことぞ。この世間では、君平を知らないが、銀河の在る天上では、さながら白日が高く懸つて居るやうに、君平の名も通つて居た。しかし、海上の人が、銀河に往つたからして、君平の偉いことが、漸く分つたのであるが、今日海客去ること、すでに久しく、誰も、この沈深玄默の中に潜める君平の眞價を測り知るものはない。

【餘論】起二句は、鮑明遠の詩に君平獨寂寞、身世兩相棄に本づいたことは勿論であるが、更に遠く莊子の語意を併せ傳へて居るので、蕭士贇は「この兩句の意は、莊子の世喪道矣、道喪世矣、世與道交相喪の意に出づ。君平、濟世の才を抱いて、世に用ひらるる意なし。これ、平、斯世を棄つるなり。世の人復た君平の賢を知らずして之を用ひず。これ、世も亦た君平を棄つるなり」といつて居て、頗る穩當な解釋である。次に同じく蕭士贇が「この詩は、詠史の詩と雖も、その自負の意深し。大意、子陵を詠するの詩意と同じ」といつた通り、君平に託して、李白その人が自己の境涯を述べたので、李白も亦た、世を棄て世に棄てられたといふやうな感慨は常に絶えなかつたので、即ち海客去已久、誰人測沈冥は、前詩の使我長歎息、冥棲巖石間と略ぼ同じやうな意味合である。

胡關饒風沙。蕭索竟終古。
木落秋草黃。登高望戎虜。
荒城空大漠。邊邑無遺堵。
白骨橫千霜。嵯峨蔽榛莽。
借問誰凌虐。天驕毒威武。
赫怒我聖皇。勞師事鼙鼓。
陽和變殺氣。發卒騷中土。
三十六萬人。哀哀淚如雨。
且悲就行役。安得營農圃。
不見征戍兒。豈知關山苦。
李牧今不在。邊人飼豺虎。

胡關には風沙饒く、蕭索、竟に終古。
木落ちて秋草黄に、高きに登つて、戎虜を望む。
荒城、空しく大漠、邊邑、遺堵なし。
白骨、千霜に横はり、嵯峨として榛莽を蔽ふ。
借問す、誰か凌虐する、天驕、威武を毒す。
我が聖皇を赫怒せしめ、師を勞して、鼙鼓を事とす。
陽和、殺氣に變じ、卒を發して、中土を騷がしむ。
三十六萬人、哀哀として、涙、雨の如し。
且つ悲んで行役に就く、安んぞ、農圃を營むを得む。
征戍の兒を見ずんば、豈に關山の苦を知らむや。
李牧今在らず、邊人、豺虎を飼ふ。

【字解】【一】胡關 胡地に接近して居る關門で、雁門、玉門、陽關の類。【二】饒 多し。【三】蕭索 物さびしき貌。【四】

終古 いつまでも絶えぬこと。【五】大漠 大沙漠。【六】遺堵 堵は垣、残された城垣。【七】千霜 千年に同じ。【八】嵯峨 高く聳ゆる貌。【九】榛莽 榛は木の叢生、莽は草の深茂。【一〇】凌虐 凌いで暴虐を爲す。【一一】天驕 漢書に載せた單于の書に「南に大漠あり、北に胡あり、胡は天の驕子なり」とある。つまり、匈奴は、天の暴れ息子であるといふ義。【一二】毒 毒害なること。【一三】赫怒 盛に怒ること。【一四】鼙鼓 擊は鼙鼓。【一五】騷 擾す。【一六】三十六萬人 楊齊賢は、唐書に楊國忠の推薦した蜀郡長史鮮于仲通が、雲南を征伐して大敗したといふ事實を挙げ、三十六萬人は、二十六萬人の誤だらうといつた。しかし、この時は、主として、西北方の征伐を詠じたのであるから、そんな事に拘泥しなくても善い。現に蕭士資は「北邊を指して言ふ」といつて居る。【一七】行役 征伐に出かける。【一八】關山 旅の道。【一九】李牧 史記に「李牧は、趙の北邊の良將なり。常に代雁門に居て、匈奴に備ふ。匈奴少しく入れば、伴つて勝たす。單于、これを聞き、大に衆を率ゐて、來り入る。李牧、多く奇陣を爲り、左右の翼を張つて之を撃ち、大に破つて、匈奴の十餘萬騎を殺し、擒縱を滅し、東胡を破り、林胡を降す。單于、奔走す。その後、十餘歲、匈奴、敢て趙の邊境に近づかず」とある。

【題意】この篇は、玄宗が邊を開いて、頻りに兵を用ひた爲に、士卒が征戍に苦んで居ることを作つたのである。楊齊賢は、鮮于仲通が雲南を伐つて敗北したことに感じて、作つたのだといつて居るが、蕭士資は、之を訂正し、哥舒翰が石堡城を打破つた其時の事であらうといひ、乾隆御批も、この説に従つて居る。

【詩意】邊境に在る關門は、沙漠に接近して居るから、風沙は常に多く、蕭索として淋しげな景色は、昔も今も同じである。試みに高い處に登つて遙に見渡せば、木の葉が舞ひ落ち、秋草も黄ばんだ時分で、天も非常に澄み切つて居るから、戎虜の住んで居る處まで、明かに見える。その沙漠の中には、破れ

たる城を餘し、人の住んで居る村も無いでは無いが、邊邑一帯、すべて戦の爲に荒されて、牆壁さへ残つて居ない位、燦燦たる白骨は、千年の久しきを経て、いやが上にも積み重り、決して始末をして葬ることが無いから、嵯峨として高く、しかも、荆棘に蔽はれて居る。元來年年戦争の絶えぬのは、如何なる故か、又誰が邊境に侵入するといふやうな凌虐の振舞を爲すかといへば、匈奴は、自ら天帝の暴ばれ息子と稱し、威武を悪用して、毒毒しく、わが命に逆つてばかり居るから、我が神聖なる天子も、とうとう赫怒せられ、そこで、士卒を勞して、鼙鼓を事として、戦争をするので、何も、こちらから好んで兵を動かす譯ではない。かくて、長閑けき陽和の模様は、一變して、殺氣となり、三十萬といふ大軍を繰り出すことで、中國の騷擾は、言葉も及ばぬ位。まして、その三十六萬の大軍が、敵に破られて、すつかり陣歿して仕舞つたといふので、傳へ聞くに、哀哀たる涙は、雨の如く降り注ぐのである。それから、中國では、かくの如き大軍が一時に徵發されたから、農圃を營む男子は、一人も居ないといふので、まことに、困まり入つたことである。かねてより、戦争は、慘澹たるものだと聞いて居るが、征伐に出かけた兵隊の成り行を見ない限りは、關山道途の苦痛は、決して分らず、すべて、想像以上にあるのである。むかしは、李牧といふ名將があつて、一たび塞外に討つて出ると、さしもの胡人も、恐れ入つて、再び邊に近づかなかつたといふが、さういふ威望あり、才略ある大將が、今は居ないから、邊人を悪化して豺虎の如くならしめ、これを飼つて置いて、わが士卒をむざむ

ざと咬み殺させるといふ始末、まことに、哀れにも、又情ないことではないか。

【餘論】 蕭士贊の説に「この詩は、専ら北邊を指して言ふ、當に是れ、哥舒翰が吐蕃の石堡城を攻めし事の爲に作れるなるべし。唐史、天寶六歲。上、河西隴右節度使王忠嗣をして、吐蕃の石堡城を攻めしめむと欲す。忠嗣上言すらく、石堡城は、高固にして、吐蕃國を擧げて之を守る、今兵を其下に頓せむとす、數萬人に非ざれば克つこと能はず。臣、恐らくは、得るところ、亡ふところに如かざるを」と。上、意決せず、將軍董延光、自ら兵を將めて、石堡城を攻めむことを請ふ。上、忠嗣に命じ、兵を分つて之を助けしむ。忠嗣、已むを得ずして、詔を奉ず。延光、期を過ぎて克たず、忠嗣、軍計を沮撓するを言ふ。上、怒つて、忠嗣を漢陽太守に貶す。これに久しうして、漢東郡に徙されて卒す。入載、上、哥舒翰に命じ、隴右河西朔方河東の兵、凡そ六萬三千を帥めて、吐蕃の石堡城を攻めしむ。その城、三面險絶、唯だ一徑上るべし。吐蕃、但だ數百人を以て之を守り、多く糧食を貯へ、樅木及び石を積む。唐兵、前後、屢ば之を攻むれども、克つこと能はず。翰、進み攻めて、之を抜き、吐蕃の鐵刃悉諾羅等四百人を得たり。唐の士卒、死亡略ば盡く。果して、忠嗣の言の如し。蓋し、當時、上、邊功を好む、諸將皆旨を希うて、邊隙を開く。忠嗣、ひとり能く持重し、邊を安んじて事を生せず。かつて曰く、平世、將と爲つては、衆を撫せむのみ。吾、中國の力を竭し、以て功名を幸することを欲せず、と。傳中載するところ、全く李牧と相類す。この詩の末句に李牧今不在、邊人

伺豺虎」と曰ふは、蓋し李牧を以て忠嗣に比するなり」といひ、乾隆御批も、これを承けて「開元以來、歳ごとに征役あり、王君奐が戦つて青海に勝つに至つて、益す邊功を事とす。石堡は一城のみ、これを得るも、敵を制するに足らざれば、國に害なきを得ず。唐兵、前後屢ば攻め、失ふところ無數、哥舒翰、能く之を抜くと雖も、しかも、士卒死亡、亦た略ぼ盡く。この詩、邊塞の慘を極言し、中間、直に時事を入れ、字字沈痛、當に杜甫の前出塞と參看すべし。別本四句多し、語盡きて露はる。詩、詞意すでに足る。當に更に益すべからず」とある。別本に四句多しといふのは、不見征戍兒、豈知關山苦の下に、

爭鋒徒死節、乘鉞皆庸豎、戰士塗蒿萊、將軍獲圭組。

といふ四句があることであるが、無論、無い方が善い。しかし、ひよつとすると、李白の初稿に有つたのを、後で自分でも氣が付いて、刪り去つたのかも知れぬ。詩の異同は、大抵、こんな處から出て來るのである。それから、吐蕃は、今の西藏で、支那の正西より北にかけて其地を占有して居たから、もとより、むかしの匈奴の故地ではないが、ここでは、わざと斥言せずして、匈奴に託したのであらう。

燕昭延郭隗。遂築黃金臺。

燕昭、郭隗を延き、遂に黃金臺を築く。

劇辛方趙至。鄒衍復齊來。

劇辛は、方に趙より至り、鄒衍は、復た齊より來る。

奈何青雲士。棄我如塵埃。

奈何ぞ、青雲の士、我を棄つること、塵埃の如き。

珠玉買歌笑。糟糠養賢才。

珠玉、歌笑を買ひ、糟糠、賢才を養ふ。

方知黃鶴舉。千里獨徘徊。

方に知る、黃鶴舉がつて、千里、獨り徘徊するを。

【字解】

【一】燕昭、史記に「燕の昭王、位に即き、身を卑くし、幣を厚うし、以て賢者を招く。郭隗曰く、王、必ず士を致さむと欲せば、先づ隗より始めよ。況んや、隗より賢なるものをや」と。ここに於て、昭王、隗の爲に、改めて宮を築いて、之に師事す。樂毅は魏より往き、鄒衍は齊より往き、劇辛は趙より往き、士、争つて燕に趨る」とある。【二】黃金臺、李善文選註に引ける上谷郡岡經に「黃金臺は、易水の東南十八里に在り、燕の昭王、千金を臺上に置き、以て天下の士を延く」とある。【三】青雲士、立身した人。【四】黃鶴、楚辭に「黃鶴之一舉」とあり、韓詩外傳に「黃鶴一舉千里」とあり、蘇武の詩に黃鶴一遠別、千里顧徘徊とあり、黃鶴、黃鶴ともに混用して居る。

【題義】

これは、燕の昭王黃金臺の故事を主とし、今しも、士を養ふ人がないから、折角の英才も、その志を達することが出來ず、高く舉がつて立ち去る外は無いといふ意を述べ、自己の不遇に對して寄慨して居るのである。

【詩意】

むかし、燕の昭王は、どうしたら、天下の士を得られやうかといつて郭隗に相談したところ

が、郭隗は、自ら薦め、我を用ひよと云つた故に、昭王、これを延いて厚く禮を爲し、又臺を築いて、千金を其上に置き、士の遠く來るものは、これを以て歡迎するといふ意を示した。すると、劇辛は、趙から、態態やつて來るし、鄒衍も、齊から、このこ尋ねて來た。かくの如く、一代の英傑が、昭王の徳を慕つて、他國から、どしどし遣つて來たから、昭王の勢は、まことに、素張らしいもので、さしも盛なりし齊國を殆んど滅して仕舞つた。然るに、今日、青雲の上に居る先進の士は、どうかといへば、毫も才を愛して士に下るといふことは無く、現に我を棄てて、塵埃と同一視して居る。しかも、彼等が平生の所行を見ると、珠玉を惜まずして、美人の歌笑を買ふ癖に、とても、食へない様な糠や糟を以て、天下の賢才を養はうとして居る。これでは、とても、人物が出て來よう筈がない。されば、こんな處に居ても仕方がないから、むしろ、黄鶴を學んで、空中に舞ひ上り、千里の高空に徘徊して、人間界を離れたいと思ふのである。

【餘論】千里獨徘徊といふ五字中には、懸懸として去るに忍びざる趣がある。黄鶴は一舉千里であるから、何とか、この黄鶴を用ふる人はいないかと思つて、聊か脚躡した處に、無限の妙味があるので、何も、黄鶴の眞似をしやうといふので、直に黄鶴に乗つて去るといふ意味ではない。蕭士賛は、「太白、少にして、高尚の志あり。この篇、豈に山を出でし後、時賢に禮せられず、輕出の悔あるか。然らずんば、何を以て、方知黄鶴舉、千里獨徘徊といはむや。この詩を讀むもの、百世の下、なほ感慨ありし

といつて居るが、成程と頷かれる。それから、乾隆御批には、「國策に、田需、管燕に對して云ふ、士三日咽ぶを得ず、しかも、君の鵝鶩、餘粟ありと。孟子云ふところ、豕、獸畜に交るものと更に甚しきあり。乃ち知る。穆生、楚を辭する、色ここに舉がるを見るのみ」とある。

寶劍雙蛟龍、雪花照芙蓉。

寶劍雙蛟龍、雪花、芙蓉を照らす。

精光射天地、雷騰不可衝。

精光、天地を射り、雷騰つて衝くべからず。

一去別金匣、飛沈失相從。

一たび去つて金匣に別れ、飛沈、相從ふを失ふ。

風胡歿已久、所以潛其鋒。

風胡歿して已に久し、その鋒を潛むる所以。

吳水深萬丈、楚山邈千重。

吳水深さ萬丈、楚山邈として千重。

雌雄終不隔、神物會當逢。

雌雄、終に隔てず、神物會す當に逢ふべし。

【字解】(一) 寶劍雙蛟龍。二口の寶劍が元と蛟龍の精であるといふ義。(二) 雪花照芙蓉。その燒刃の匂が、芙蓉の雪白の花の初めて水を出でたやうであるといふ義。(三) 一去別金匣。晉書に「雷煥、字は孔章、襄陽の人。星曆卜占を善くす。司空張華、夜、異氣の斗牛の間に起るを見、煥に問うて、寶劍の氣たるを知り、煥を以て豐城の令となす。煥、縣に至り、賦を移し、掘り入ること三十餘尺、青石函中に雙劍を得たり。これを磨けば、光監照耀、乃ち一劍を張華に與へ、自ら一劍を留む。華の誅せらるるに及び、劍と金匣と、所在を知るなし。後に煥の子、爽、劍を帯びて延平津を經るや、劍、故なくして、水に墮つ。人をして水に没して逐覓せしむれば、二龍長さ數丈、盤交するを見る。須臾にして、光彩微發、日に耀き、川に映す」とある。(四) 風胡。越絶書に見え、楚王の命を受け、千

將歐冶子の二人をして鑄劍三枚を作らしめ、又楚王の問に答へて、三劍の相異なることを詳しく述べた、つまり刀の鑄定家である。

【題義】この篇は、寶劍に託して、矢張自分の才を知る人なくして、空しく風塵に埋没することを悲んだのである。

【詩意】寶劍二口、もと蛟龍の精であつて、燒刃の匂は、雪白の蓮の花が、初めて水を出でたるに比すべく、精光は天地を射り、動もすれば、雷の様な聲を出して、決して、觸れることさへ出来ない。しかも、この二劍は、もと金匣に收まつて居たのであるが、やがて離れ離れになつて、一は飛び去り、一は沈み、相従つて一所に居ることが出来なくなつた。むかし、風胡子は、楚王に答へて、善く劍を辨別したが、この人歿すること、すでに久しく、今は斯様な人が居ないから、劍は、その鋒を潜めて匿れて居る。かくて、其一は萬丈の深さある吳水の底に沈み、其一は遠く幾重にも疊める楚山の奥深き處に引込んで仕舞つた。しかし、この二劍は、もと雌雄で、決して相隔つべからざるものであるし、おまけに、精靈の憑依して居る神物の事であるから、どうにかして、必ずめぐり合つて、兩劍必ず相従ふこともあらう。

【餘論】君臣魚水の遇合は、李白の欲するところで、明主と忠臣とは、もとより相離るべからざるものである。但し、兩者の間に立つて仲介の勞を取る人が無ければならぬので、例せば、漢の昭烈帝と諸葛亮とは、必ず相従ふべき筈であつて、幸に司馬徽が之を推薦したやうな工合。李白も、玄宗の知遇を得ようと思つて居たが、はじめに推薦する人が無かつたから、痛恨の餘、この詩を作つたものと思はれる。それから、この詩は、鮑照の作に擬したとのことで、蕭士贇、先づ之を言ひ、王琦も亦た之を承けて「鮑照の贈故人馬子喬の詩に、

雙劍將別離。先在匣中鳴。烟雨交將夕。從此忽分形。雌沈吳江水。雄飛入楚城。吳江深無底。楚關有崇扇。一爲天地別。豈直限幽明。神物終不隔。千祀倘還并。

といふ。太白の此篇、蓋し之に擬するなり。然れども、鮑詩は故人の爲にして贈別す、その居要の處は神物の一聯に在り。李詩は、知己の存せざるを感ず、その警策の處は風胡の二語に在り。詞調近しと雖も、意旨自ら別なり」といつて居る。

金華牧羊兒。乃是紫煙客。金華牧羊の兒、乃ち是れ紫煙の客。

我願從之遊。未去髮已白。我、之に從つて遊ばむことを願へども、未だ去らざるに、

不知繁華子。擾擾何所迫。知らず、繁華の子、擾擾として、何の迫るところぞ。

崑山採瓊藥。可以鍊精魄。崑山に瓊藥を採らば、以て精魄を鍊るべし。

【字解】(一) 金華牧羊兒。神仙傳に「黃初平は丹溪の人なり、年十五、家、羊を牧せしむ。道士あり、その良譚を見、便ち將ぬ

て金華山石室の中に至り、四十餘年、復た家を念はず」とある。それから、兄の初起といふものが尋ねて往つて、羊はどうしたかといふと、初平が「羊起て」といつて叱するや、白石皆變じて羊となつたといふことである。【三】紫煙、列仙傳に「丹火冥輝、紫煙成蓋」とあり、郭璞の詩に「駕鴻乘紫煙」とある。【四】崑山、崑崙に同じ。【五】瓊樹、又玉英に同じ。大人賦の張揖註に「瓊樹は崑崙の西、流沙の濱に生ず、大三百圍、高さ萬仞、これを食へば長生す」とある。【六】精魄、魂魄に同じ。

【題義】これは、黄初平を思ふにつけて、仙家の術を學びたいといふ意を述べたのである。

【詩意】黄初平は、もと金華山中に羊を牧して居たものであつたが、道を學んで、紫煙に跨る神仙となつた。我は、この人に従つて教を受けたと思つて居るが、まだ此地を去らぬ前に、白髮頭に成つて仕舞つたので、それにつけても、一刻も早く浮世に暇乞をして、早く其處に往きたいと思ふ。願みれば、世上の富貴榮華に矜る者どもは、終日擾擾、何をさう忙しくして居るのか。試みに思へ、一たび崑崙山に攀ち上り、かの瓊樹の花を摘んで口にしたらば、魂魄を鍊り上げて、虚無の宅に入り、天晴、仙人となる事が出来るではないか。それなのに、何時までも、浮世に立ち交つて居るのは、まことに詰らぬことである。

【餘論】蕭士贇は「これ亦た遊仙の詩なり、その間、微に嘆世の意を寓するのみ」といつて居る。

天津三月時。千門桃與李。

天津三月の時、千門桃与李と。

朝爲斷腸花。暮逐東流水。

朝には斷腸の花となり、暮には東流の水を逐ふ。

前水復後水。古今相續流。

前水復た後水、古今相續つて流る。

新人非舊人。年年橋上遊。

新人は舊人に非ず、年年橋上に遊ぶ。

雞鳴海色動。謁帝羅公侯。

雞鳴いて海色動き、帝に謁して公侯を羅ぬ。

月落西上陽。餘輝半城樓。

月は落つ西上陽、餘輝、城樓に半ばなり。

衣冠照雲日。朝下散皇州。

衣冠、雲日を照らし、朝より下つて皇州に散す。

鞍馬如飛龍。黃金絡馬頭。

鞍馬、飛龍の如く、黃金、馬頭を絡す。

行人皆辟易。志氣橫嵩丘。

行人皆辟易、志氣、嵩丘に横ふ。

入門上高堂。列鼎錯珍羞。

門に入つて高堂に上れば、鼎を列して珍羞を錯ふ。

香風引趙舞。清管隨齊謳。

香風、趙舞を引き、清管、齊謳に隨ふ。

七十紫鴛鴦。雙雙戲庭幽。

七十の紫鴛鴦、雙雙として庭の幽なるに戯る。

行樂爭晝夜。自言度千秋。

行樂、晝夜を争ひ、自ら言ふ、千秋を度ると。

功成身不退。自古多愆尤。

功成つて、身退かず、古しへより、愆尤多し。

黃犬空歎息、綠珠成鸞鸞、
何如鴟夷子、散髮權扁舟。

【字解】(一) 天津 橋名、元和郡縣志に「天津橋は、河南縣の北四里に在り。隋の煬帝大業元年、はじめて、此橋を作り、以て洛水に架し、大船を用ひ、舟を維ぐには、皆鐵鎖を以て之を鈎連し、南北に路を夾んで、四樓を對起す。その樓には、日月表勝の象を爲る。然れども、洛水溢るれば、浮橋輒ち壞る。唐の貞觀十四年、更めて石工をして、方石を累れて脚と爲さしむ」とある。(二) 海色 曉色に同じ。雞鳴の時、天色昧明、海氣の朦朧たるが如く然り、故に云ふ。或は又、海は晦に通じ、晦色だといふ説もあるが、今しばらく前説に従ふことにする。(三) 西上陽 舊唐書に「東都上陽宮は、宮城の西南隅に在り。南、洛水に臨み、西、穀水を距つ。東は即ち宮城、北は禁苑に連る。穀水を隔てて西上陽宮あり、虹橋、穀に跨つて、行幸往來す、皆高宗龍朔の後に置く」とある。(四) 黃金駱馬頭 馬の籠や手綱に黃金の飾をつける。(五) 辟易 漢書顧師古の註に「開張して其本處を易ふ」とある、即ち散開してあとびさりをする。(六) 嵩丘 嵩山に同じ、又別に一つの山だといふ説もある。(七) 齊謳 梁元帝の墓要に「齊歌を謳といふ」とある。(八) 七十紫鸞 古しへの鴟鳴曲に鸞鸞七十二、羅列自成行とある。(九) 功成身不退 老子に「功成つて身退くは天の道なり」とあるに本づく。(一〇) 黃犬 史記に「李斯刑せらるるや、その仲子に謂つて曰く、吾、汝と黃犬を率ぬ、上蔡東門を出でて、狡兔を逐はむと欲するも、豈に得べけむや」とある。(一一) 綠珠 晉書に「石崇に妓あり、綠珠といふ、美にして豔、善く笛を吹く。孫秀人をして之を求めしむ。崇勃然として曰く、綠珠は吾が愛するところ、得べからざるなり」と。秀怒り、乃ち趙王倫に勸めて、崇を誅す。崇、正に樓上に宴し、介士、門に到る。崇、綠珠に謂つて曰く、我、今、爾の爲に罪を得たりと。綠珠泣いて曰く、當に死を官の前に致すべしと。因つて、自ら樓下に投じて死す。崇の母見妻子、少長となく、皆皆せらる。」(一二) 鴟夷子 漢書に「鮑王勾踐、會稽の上に困めらる、迺ち范蠡、計然を用ひ、十年にして國富み、厚く職士に賂し、遂に吳に報いて會稽の恥を散す。范蠡、乃ち扁舟に乗じて江湖に浮び、姓名を變じて齊に適き、鴟夷子皮となす」とある。顏師古の註に「鴟夷とは、酒を盛るの鴟夷の如く、容

受するところ多く、しかも巻いて懐にし、時と弛張すべきをいふなり」とある。(一三) 散髮 冠の爲に拘束せられざること。

【題義】この詩は、當時の權要を譏つたので、多分、楊國忠などを指したものであらうと思はれる。尤も大體の意匠は、初唐の劉廷芝の公子行、天津橋下陽春水、天津橋上繁華子といふ詩に本づいたので、殊に天津橋だの、桃李だの、斷腸花だのいふ字面を態態使つたのは、劉廷芝に本づいたといふことを公然顯はした積りであらう。

【詩意】洛陽に名高き天津橋の上から見たせば、頃しも、彌生の春の頃、千門立ち連れる都大路には、桃李が今を盛りと咲き亂れて居る。抑も、桃李は人の心を惱すやうな麗しい花であるが、朝咲いたかと思へば、暮には早くも散つて仕舞つて、東に向ふ天津橋下の水を逐うて流れ去るのである。花の果敢ないことは、云ふまでもないが、橋下の水は、水の後へ又水といふやうに、即ち前の水の直ぐ次に後の水が押し寄せ、古今相續いて、決して止んだことはない。橋下の水、すでに然り、橋上を往來する人も、今年の人とは違ひ、去年の人は一昨年の人とは違ふといふ様に、新人は、もとより舊人に非ず、年年異なつた人が來て、この橋上に遊んで居る。世の中の有爲轉變は、先づ此通り。今しも、橋上を往來して居る人を何かと見れば、即ち世に時めく公卿輩であつて、雞が鳴いて黎明の空が明るく成りかかつた時に、早朝を爲し、公侯より卿大夫に至るまで、列を正して天子に拜謁する。時しも、西上陽宮の上に、殘月が落ちかかり、殘んの光は、城樓の半に懸つて居る。かくて、

朝見を畢つて、銘銘家路を指して歸ると、煌煌たる衣冠は、雲日の光に映じて、都の四方に散じ、それから、天津橋を過ぐるのであるが、驚くべき勢で、鞍置きし馬は、さながら飛龍の如く、馬の頭には、黄金を鑲めた飾をつけ、意氣揚揚と練つて行くから、道行く人は、皆辟易し、路をよけて之を通すといふ次第で、その志氣の堂堂たるは、天津橋の向側に聳えて居る嵩丘の山に比すべき程である。さて此等公卿の家庭に於ける有様はどうかといふに、門を這入れれば、殿様の御歸りといふので、家來どもに迎へられ、それから、高堂に上ると、直に食事が始まる。その御馳走は、鼎を列ねて、山海の珍味を交へ、音楽が無くては面白くないといふので、趙國の美妓は、香風に舞ひ、齊國の佳人は、笛だの笙だのに和して歌を唱へる。庭上には池があつて、七十二の鴛鴦が、雙雙とし戯れて居る。かくて、思ふ存分に行樂を爲し、千年でも、萬年でも、相變らず、費澤を盡して、愉快に暮して往けるものと考へて居るらしい。しかも、天津橋上の人は、矢張、橋下の水と同じく、毎に變つて行かねばならぬから、功成つて身退かざれば、末路を全うすることは出來ず、散散な目に遇ふものと、むかしから決まつて居るから仕方がない。秦の李斯は、宰相にまで成つたが、遂に極刑に處せられ、その時、倅に向ひ、汝と共に黃犬を牽いて、上蔡の東門を出で、狡兔を逐はむと欲するも、豈に得べけむやといつて嘆息し、晉の石崇は、金谷で散散者を窮めたが、綠珠といふ婦人を愛した爲に、端なくも仇を結び、遂に身を亡ぼす様な破目に成つた。富貴は、もとより恃むに足らず、權勢とても、長く續くも

のでないから、かの范蠡が功成り名遂げし後、散髮の儘、冠も戴かず、扁舟に棹して、五湖に泛んで去つたのは、さすがに見るところがあつたのである。して見れば、橋上豪華の公卿輩は、早晚、かの李斯、石崇の如き否運に合ふことで、まことに、氣の毒に、且つ傷ましい事である。

【餘論】 范温は「建安の詩、辯にして華ならず、質にして俚ならず、風調高雅、格力遒壯、風雅騷人の氣骨を得、最も古しへに近しと爲す、惟だ李杜これあり」といひ、吳昌祺は「自ら一境を開く、必ずしも古人ならず」といひ、ともに、その詩格に就いて言つたのである。徐禎卿は「黃犬の句は、前の貴寵の言に應じ、綠珠の句は、前の歌舞の言に應じ、鴟夷の句は、前の功成身退の言に應ず」といひ、その收束、徒爾ならざるを觀るべきである。なほ蕭士贇は「この詩の作、其れ諷するところあるか。大意、蓋し謂ふ、天津橋の水、人を閱する亦た多し、富と貴とは、自ら以て長く保つべしというて退くを知らず、安んぞ、その李斯石崇の禍なきを知らむや。何ぞ范蠡の勇退高きを爲すに如かむや」といひ、乾隆御批には「これ當時貴幸の徒、怙侈驕逸にして、その後を恤まざるを刺るなり。杜甫の麗人行、その國忠を刺るや、微にして婉。これは、直にして顯。自らはれ異曲同工、書に曰く、高きに居て危きを思ふ、惟れ畏れざるなし、と。これを讀まば、能く權臣をして膽落ちしむ。詩眼、以て建安の風骨、惟だ李杜のみ之ありと爲す。良に然り」とあるが、これは諷刺の主旨を論じたのである。

西上蓮花山。迢迢見明星。
素手把芙蓉。虛步躡太清。
霓裳曳廣帶。飄拂昇天行。
邀我登雲臺。高揖衛叔卿。
恍恍與之去。駕鴻凌紫冥。
俯視洛陽川。茫茫走胡兵。
流血塗野草。豺狼盡冠纓。

西、蓮花山に上れば、迢迢として明星を見る。
素手、芙蓉を把り、虛歩して、太清を躡む。
霓裳、廣帶を曳き、飄拂、天に昇つて行く。
我を邀へて雲臺に登り、高く揖す衛叔卿。
恍恍として之とともに去り、鴻に駕して、紫冥を凌ぐ。
俯して洛陽の川を視れば、茫茫として胡兵を走らす。
流血、野草に塗れ、豺狼盡く冠纓。

【字解】一 蓮花山 華山を指して云ふ。初學記に「華山は、五岳の西岳なり。周官豫州、その嶺山を華山といふと。華山記に云ふ、山頂に池あり、千葉の蓮華を生じ、これを服すれば羽化す、因つて華山といふ」とある。二 明星 明星玉女の略、仙女の名。太平廣記に「明星玉女は、華山に居り、玉葉を服し、白日天に昇る」とある。三 素手 白き手。四 芙蓉 即ち蓮花。五 霓裳の若きあり」と記してある。六 衛叔卿 神仙傳に「衛叔卿は、中山の人、雲母を服して仙を得たり。漢の元封二年八月壬辰、孝武帝、殿上に閑居す。忽ち一人あり、雲車に乗じ、白鹿に駕し、天よりして下り、來つて殿庭に集まる。その人、年三十ばかり、色は童子の如く、羽衣星冠。帝、驚いて問ふ、誰とが爲すと。答へて曰く、我は中山の衛叔卿なり。帝曰く、子、もし是れ中山の人ならば、乃ち朕の臣なり、前んで共に語るべしと。叔卿、本意、帝に謁す、謂へらく、帝、道を好む、これを見れば、必ず優禮を加へむと。しかも、帝、問うて、是れ朕の臣なりといふ。ここに於て、大に望を失ひ、默然として應ぜず、忽焉として、在るところを知らず。帝、甚

だ悔恨す。即ち使者梁伯を遣し、中山に至つて叔卿を推求せしむ、見るを得ず、但だ其子度世を見、共に華山に之いて、その父を尋求す。未だ其嶺に到らざるに、細廬の下に於て、その父、數人と石上に博戲するを見る。紫雲、その上に鬱鬱たり、白玉を擘となし、數仙童あり、幢節を執つて其後に立つ」とある。七 洛陽川 洛陽の地に同じ、川は平郊の橋に用ふ。

【題義】この詩は、矢張、遊仙を詠じたのであるが、これと人間の事とを對映せしめた處に於て、一段の新意を發見するのである。

【詩意】西の方、蓮花山の稱ある華山に、はるばると攀ち登り、明星玉女といふ仙女に遇つた。玉女は、眞白な手に、今を盛りと咲ける千葉の蓮の花を捧げ、そして、歩も輕げに空中を飛行し、霓裳を著下して、廣い帯を後方へ長く引ずり、ひらひらと衣帯を飄し揺がしつ、天上に昇つて行くのである。かくて、我を迎へて雲臺峰に登らしめたるに因り、我は衛叔卿といへる仙人に遇つて會釋し、恍然として、これと連れ立ち、鴻に跨つて大空を飛んで行くやうになつた。かくて、鴻の背の上から、脚下に洛陽一帶を望めば、茫茫たる平郊の間に、幾萬といふ夥しい數の胡兵が東西に馳せ廻り、宛然として、戰爭でも始まつたやうな有様。かくて、討死した兵士の血は、野草に塗れ、その暴虐、豺狼に比すべき大將どもは、やがて、美官を得て、冠の紐を結び、得意になつて威張り散らすことであらう。天上の誠に樂しきに比較して、人間界は、かかる慘澹たる模様で、これに就けても、早く世を辭して仙を學んだことは、我ながら、まことに先見があつたことと、心に甚だ嬉しく思つたのである。

【餘論】蕭士資の説に「安史亂離の際、朝廷、回紇の兵を借りて兩京を復す、故に茫茫走胡兵といふ、復び官爵を用ひて、功を賞し、流品を別たす、故に豺狼皆冠纓といふなり。太白の此詩は、紀實の作に似たり。豈に祿山洛陽に入るの時、太白、適ま雲臺觀に在りしか」といつて居るが、折角、唐を助けて克復の功を成した回紇を、如何に野蠻人だとして、直に斥けて豺狼といふのも、稍や苛酷である。そこで、王琦は之を駁し「この詩、大抵、洛陽破没の後作るところ、胡兵は、祿山の兵を謂ひ、豺狼は、祿山用ふるところの逆臣をいふ。蕭氏、胡兵を以て、回紇となし、豺狼皆冠纓を以て、官爵を用ひて功を賞し、流品を分たすと爲す、未だ是ならざるに似たり」といつて居るが、これは、王氏の方が、無論、穩當である。

昔我遊齊都。登華不注峰。
 茲山何峻秀。綠翠如芙蓉。
 蕭颯古仙人。了知是赤松。
 借予一白鹿。自挾兩青龍。
 含笑凌倒景。欣然願相從。

むかし、我、齊都に遊び、華不注の峰に登る。
 この山、何ぞ峻秀、綠翠、芙蓉の如し。
 蕭颯たる古仙人、了に知る是れ赤松なるを。
 予に一の白鹿を借し、自ら兩青龍を挾む。
 笑を含んで倒景を凌ぎ、欣然として相從はむことを願ふ。

泣與親友別。欲語再三咽。
 勗君青松心。努力保霜雪。
 世路多險艱。白日欺紅顏。
 分手各千里。去去何時還。
 在世復幾時。倏如飄風度。
 空聞紫金經。白首愁相誤。
 撫己忽自笑。沈吟爲誰故。
 名利徒煎熬。安得閒余步。
 終留赤玉舄。東上蓬萊路。
 秦帝如我求。蒼蒼但煙霧。

泣いて親友と別れ、語らむと欲して、再三咽ぶ。
 君が青松の心を勗め、努力して霜雪を保てよ。
 世路、險艱多く、白日、紅顔を欺く。
 手を分てば各千里、去去何の時か還らむ。
 世に在る、復た幾時ぞ、倏として、飄風の度るが如し。
 空しく、紫金の經を聞き、白首、相誤るを愁ふ。
 己を撫して、忽ち自ら笑ふ、沈吟、誰が爲めの故ぞ。
 名利、徒に煎熬、安んぞ余が歩を閒にするを得む。
 終に赤玉の舄を留め、東、蓬萊の路に上る。
 秦帝、もし我を求めなば、蒼蒼として但だ煙霧のみ。

【字解】(一)齊都、歴下、即ち濟南を云ふ。(二)華不注峰、水經に「濟水、又東北して、華不注山を徑す」とあり。酈道元の註に「單椒秀澤、邱陵に連らず、以て自ら高うす。虎牙榮立、孤峰特拔、以て天を刺す。青崖翠壁、望、點黛に同じ、山下に華泉あり」とある。それから、通志には「華不注山は、濟南府城の東北十五里に在り」と記してある。不は拊、即ち花の蒂で、その山の孤秀、さながら花の蒂が水面に注するが如く然りといふ處から名づけたといふ説がある。(三)赤松、列仙傳に「赤松子は、神農の時

の雨師なり。水玉を服し、以て神農に教へ、能く火に入つて自ら焼け、往往にして、崑崙山上に至り、常に西王母の石室中に止まり、風雨に隨つて上下す。炎帝の少女、これを追うて、亦た仙を得、ともに去る。高辛の時、復た雨師となる」とある。【四】倒景 大人賦に「貫三列缺之倒景兮」とあつて、服虔の註に「人、天上に在り、下に向つて日月を視る、故に、景、倒に下に在るなり」とあり。如淳の註に「日月の上になつて、反つて下より照らす、故に其景倒なり」とある、つまり、日月の音が下より照らす影といふ義。【五】努力 力を盡す。【六】欺 壓倒する。【七】颯風 旋風に同じ。【八】紫金經 煉丹の書。【九】終留赤玉冠 列仙傳に「安期生は、瑯琊阜鄉の人なり、藥を東海邊に賣る。時人、皆、千歳の翁といふ。秦の始皇、東遊して見むことを請ひ、ともに語ること三日三夜、金璧を賜ふ、度數千萬。阜鄉亭に出で、皆置き去り、書を留め、赤玉冠一編を以て報となす。曰く、後十年、我を蓬萊山に求めよ、と。始皇、即ち使者徐市盧生等數百人を遣し、海に入らしむ、未だ蓬萊山に至らず、輒ち風波に逢つて還る。祠を阜鄉亭の海邊十數處に立つといふ」とある。赤玉冠は、赤玉を以て飾りし冠。

【題義】これも遊仙を詠じ、はじめ赤松に遇つて、愈よ仙術を修行することとなり、それから、親友に別れて、遠く立ち去る時の感慨を敘したのである。

【詩意】われ曩に齊都の濟南に遊び、城外程遠からぬ處に在る華不注の山に登つた。この山は、平原の上に崛起し、山勢峻にして秀、草木が之を被うて、緑の色の豔麗しいことは、さながら芙蓉の花の匂に同じである。やがて山の頂に登りつくと、道風蕭颯たる一個の老仙人に出會つたが、問はずして、名だたる赤松子であることが分つた。赤松子は、自ら二つの青龍を挾んで、その上に跨り、そして、予に一頭の白鹿を貸して、これに乗れといつたから、予は、その白鹿に騎し、欣然として笑を含み、日月の倒影を眼底に見下しつと、赤松に隨つて、愈よ天に上ることになつた。かくて、一たび天に

上つて仕舞へば、何時還るとも分らぬから、暫時の暇を偷んで、親友に暇乞をなし、これと語らむとすれば、再三涙に咽んで、言葉も出ぬ位。さて云ふには、君は、勉めて堅強なる心を保有し、かの松が霜雪に擽まぬやうに、努力して養生をするが善い。顧みれば、この世には險難多く、しかも、白日は流るるが如く立ち去つて、紅顔は決して長く存せず、やがて、白髮頭の老人に成つて仕舞ふから、精精衰病をせぬやうにすることが肝要である。ここに、君と手を分てば、各千里を隔つべく、吾は一たび此を去れば、何時還つて來るか分らない、折角御大事にといつて、愈よ親友と別れた。さて考へて見れば、人が此世に居るのは、幾ばくの間であらうか、その忽然として去ることは、恰も旋風が吹きめぐると同じである。折角、鍊丹の秘訣を聞いたところで、老人に成るまで、世事に妨げられて、仙道の修行が出來ず、むなしく相誤るやうなことになるれば、又再び遇ふことも出來ない。かく思ひ悩んだ揚句に、豁然として大悟し、そこで、大笑していふには、今しも、沈吟して別を惜むは、畢竟、誰が爲にするのか、また全く人間離れをせぬから、かかる愚癡な了見も出るので、世間に居れば、名利の爲に煎られたり、熬られたりして、始終忙しく駈け廻らねばならず、どうして、予が足なみを靜にしようか、そんな事は、少しも、自分に益がないから、そこで、決心して、愈よ遠遊に出かけて、翻然高擧、かの赤松子に從つて、ゆつくり仙術の修行を爲さうと思ふので、かの安期生が赤玉の靴を留めて、はるかに、東蓬萊山に往つたと同じく、我も亦た遺跡を人間に留めた儘、立ち去らうとするので

ある。安期生は、一たび去りし後、秦の始皇が使者を遣して、いくら尋ねても分らず、東海は蒼蒼として唯だ煙霧の立ち籠むるに任かせ、何處に居るか知る由もなかつたと同じく、我とても、この世を辭せし後は、たとひ、帝王が探されたとして、見付からないは必定、まして、區區たる親友の交誼などは、特に問ふまでもないことである。

【餘論】古本には、この詩の起首、昔我遊齊都一以下、五韻十句、欣然願三相從一に至るまでを一首となし、泣與親友一別より以下、四韻八句、去去何時還に至るまでを一首となし、在世復幾時より以下六韻十二句、結の蒼蒼但煙霧に至るまでを一首となし、都合三首であつたのを、蕭士資本には併せて一首となし、自ら之を解して「この篇は、遊仙の詩、意、三節に分つ。第一節は、仙人に従ひ、以て遠遊するを謂ふ。第二節は、親友に別れて嗚咽するを謂ふ。第三節は、これ泣別の際、忽ち翻然自ら悟つて、笑つて曰く、沈吟泣別するものは、誰が爲めの故ぞや、世に在ること幾時ぞ、名利の爲に煎熬せらるるに過ぎざるのみ、己が分上の事に於ては、初めより何の益するところぞ。末の四句は、是れ意を決して遠遊するの辭、謂へらく、終に當に高擧すべし、但だ遺跡を人間に留めむのみ、帝者これを求むと雖も、且つ得べからず、豈に更に復た親友の戀を爲さむや、と。この詩、恐らくは是れ、一時、親友と話別するもの、故に、中、情を忘るる能はざるの詞あり、末、永訣割斷の語あるなり」といつた。しかし、王琦は之に慊らずして、按ずるに、中節の語意、上下と全く相類せず、世を棄てて遠

遊するに當つて、何事ぞ、猶ほ兒女子の態を爲して、親友と泣いて別れ、語らむと欲して、再三咽ぶに至らむや。章毅の才調集、只だ中四韻を選んで一首となして、前後録せず、これ古本末だ眞を失はざるに似たり。蕭本、未だ誤つて合するを免れざるを知る。但だ首章は語意未だ完からざるに似たり。或は缺文あるも、未だ知るべからず。朱子謂ふ、太白の詩、多く人に亂され、一篇分れて三篇となるものあり、二篇合して一篇となるものありと。豈に此章を指して言ふか。今しばらく蕭本に仍り、識者の再び爲に之を定むるを俟たむ」といつたが、いかにも尤も千萬で、これを一首の詩として見ると、到底不完全なるを免れぬやうである。

郢客吟白雪。遺響飛青天。郢客、白雪を吟すれば、遺響、青天に飛ぶ。

徒勞歌此曲。舉世誰爲傳。徒勞、この曲を歌ふ、舉世誰が爲に傳へむ。

試爲巴人唱。和者乃數千。試に巴人の唱を爲せば、和するもの乃ち數千。

吞聲何足道。歎息空凄然。聲を吞む、何ぞ道ふに足らむ。歎息、空しく凄然。

【字解】「一」郢客、宋玉の對楚王問に「客に郢に歌ふものあり。その始を下里巴人といふ。國中屬して和するもの數千人。その闕阿蒨露を爲すや、國中屬して和するもの數百人。その陽春白雪を爲すや、國中屬して和するもの數十人。引商刻羽、泛して以て流徵すれば、國中屬して和するもの數人に過ぎざるのみ。これ其曲調と高くして其和調と寡し」とある。郢は楚の都。「二」遺響、餘韻

【題義】これは、知音の難きを慨し、兼ねて、高才世に容れられざるを悲んで作つたのである。

【詩意】郢中に客たりし人が、最高の調を以て知らるる白雪の曲を吟ずれば、餘韻嫋嫋として、青天に飛び上り、長しへに其響を絶えせぬ程である。しかし、その曲が高いだけに、世に之を解するものがなく、いくら、骨を折つて、これを歌つたところで、到底、無駄な事である。これに反して、試に巴人の曲を歌へば、その曲が卑いだけに、大勢に持て囃され、和するもの數千の多きに及んだ。これは、昔から流傳して居る故事であるが、人間の事は、すべて此通り、何でも、卑いものでなければ、通らないので、聲を呑んで泣いた處で、仕方がないから、唯だ悽然として、歎息するのみである。

【餘論】蕭士贇の言に「この篇は、感嘆の詩なり。高才の者は、知遇すること難く、卑汚の者は、投合すること易し、古しへ、猶ほ今のごときなり。士、才を負うて遭はず、能く其詩を讀んで、これが爲に、聲を呑んで嘆息せざらむや」とある。

秦水別隴首。幽咽多悲聲。

秦水は隴首に別れ、幽咽、悲聲多し。

胡馬顧朔雪。躑躅長嘶鳴。

胡馬は朔雪を顧み、躑躅、長く嘶いて鳴く。

感物動我心。緬然含歸情。

物に感じて、我が心を動かし、緬然として、歸情を含む。

昔視秋蛾飛。今見春蠶生。

昔は秋蛾の飛ぶを視、今は春蠶の生ずるを見る。

嫋嫋桑結葉。萋萋柳垂榮。

嫋嫋として、桑、葉を結び、萋萋として、柳、榮を垂る。

急節謝流水。羈心搖懸旌。

急節、流水に謝し、羈心、懸旌を揺がす。

揮涕且復去。惻愴何時平。

涕を揮つて、且つ復た去る、惻愴何時か平かならむ。

【字解】一 秦水別隴首。秦地に流れ来る水が隴頭に別れて下るといふ義。三秦記に「隴右の西關、その口紆頭、高き巖里なるを知らず、登らむと欲するものは、七日乃ち越ゆ。高處は、百餘家を穿るべし。上に清水あり、四に注いで、流下す。俗歌に曰く、隴頭流水、鳴聲幽咽、遙望三秦川、肝腸斷絶と。隴首は即ち隴頭なり」とある。

二 躑躅。行く貌。三 緬然。緬は遠き貌。四 急節。季節の推移極めて速なること。五 謝。去る。六 懸旌。旌は指し物、旗の屬、中空に懸つて飄へるをいふ。

【題義】これは、別れの時の詩で、流水に情思の纏綿たるものがある。

【詩意】秦地に向つて流るる水は、隴首山を去るに臨んで、幽けく咽んで居るし、胡馬が其處を去る時には、ぼこぼこ歩みつつ、朔地の雪を顧みて長く嘶き、さながら、其故郷に對して別を惜むが如くである。ここに外界の景色を見るにつけて、我が心に感動し、はるかに歸郷の念を起さしめるのは、もとより、無理ならぬことである。さきには、秋の蛾の飛ぶのを見たが、いつしか冬も過ぎて、春の蠶の生ずる時節となり、桑の葉は簇がり生じて、かたまつて居る様であるし、柳は見事に茂つて、煙れ

る枝を垂れて居る。時節の移り變ることは、流れる水よりも早く、わが心の落ち付かぬことは、空に懸れる旗の如くである。かくて今や涙を揮つて故郷を去らうとするので、愴然として、心を痛ましめ、悲哀の念は、何時平かに消えるであらうか。

【餘論】蕭士贇の説に「この篇は、別情の詩なり。其れ亦た物に感じて悲を興し、景に觸れて懷を傷ましむるか」とある。

秋露白如玉。團團下庭綠。

秋露は白くして玉の如く、團團として、庭綠に下る。

我行忽見之。寒早悲歲促。

我が行、忽ち之を見、寒早くして、歳の促すを悲む。

人生鳥過目。胡乃自結束。

人生、鳥、目を過ぐ、胡ぞ乃ち自ら結束する。

景公一何愚。牛山淚相續。

景公、一に何ぞ愚なる、牛山、涙、相續ぐ。

物苦不知足。得隴又望蜀。

物は足るを知らざるに苦む、隴を得て又蜀を望む。

人心若波瀾。世路有屈曲。

人心は、波瀾の若く、世路には、屈曲あり。

三萬六千日。夜夜當秉燭。

三萬六千日、夜夜當に燭を秉るべし。

【字解】 一、團圓。粒の回き貌。謝靈運の詩に團圓滿葉露とある。 二、庭綠。庭中の草木。 三、歲促。年の盡きる、こと。

【一】鳥過目。張協の詩に人生瀛海内、忽如鳥過目とある。【二】結束。窮屈に檢束する、萬事控へ目にする、古詩に蕭蕭放情志、何爲自結束とある。【三】景公一何愚。列子に「齊の景公、牛山に遊び、北、その國城に臨んで流涕して曰く、美なるかな國や、豈半羊たり、若何ぞ、滴瀝として此國を去つて死するか。古しへ死者なからしめば、寡人將た斯か去つて何處にか之かむと。艾孔、梁丘據、皆從つて泣く。晏子、ひとり傍に笑ふ。景公、故を問ふ。對へて曰く、吾が君、入つて安んじて此位を得て立つ、その逃に之に處り逃に之を去るを以て、君に至るなり。しかるに、獨り之が爲に流涕す、これ不仁なり、不仁の君を見、詔諷の臣を見る、臣の獨り竊に笑ふ所以なり」と。景公慙ち、觴を擧げて自ら罰し、二臣を罰すること各二觴」とある。【四】物苦不知足。後漢書、光武帝が岑彭に與へたる書に「人は足るを知らざるに苦む、すでに隴を得て復た蜀を望む」とある。即ち隴を平定したら、更に進んで蜀を取りたくなつた、然には限りないといふこと。【五】三萬六千日。百年に同じ。【六】夜夜當秉燭。古詩に晝短苦三夜長、何不秉燭遊」とある。

【題義】 この詩は、歲月の去ること早きにつけて、行樂を事とすべしといふ意を述べたのである。

【詩意】 庭中の草木に置ける秋の露は、團圓として白く、さながら玉と見まがふばかり。ふと外に出て之を見ると、寒氣の早く來らむとするを知り、やがて、今年の程なく盡きることが悲しくて堪まらない。人の一世は、飛鳥が目を過ぐると同じく、ほんの束の間に限られて、まことに、果敢ないことの極みであるのに、いかなれば、自分から窮屈に檢束するのか。むかし、齊の景公は、牛山に登り、人は死なねばならぬといふことを、ひどく悲んで涙を流したといふが、それも、愚の骨頂で、矢張り、十分に快樂を縱にしたら、それで善いのである。抑も人間社會が、ごたごたして、争鬭などの絶えぬのは、もともと慾に限りがないから起つて來るので、光武帝の云へるが如く、すでに隴を得れば、

又蜀を望み、すべて生きとし生ける物は、決して足ることを知らぬといふ慾望の念があるが、これこそ、まことに困つたものである。かくて人心の反覆定めなきは、さながら波瀾の如く、世路は眞直ではなく、うねりくねつて、ここを無事に通過することは容易ではない。限りなき慾望を以て、この六つかしい浮世に居たとて、果して何の樂があらう。それよりも、世間の事は、善い加減にして置いて、三萬六千日、即ち生きて居る百年の間、夜ごと夜ごとに燈火を乗つて、酒盛りをなし、心のどけく樂むのが第一であらう。

【餘論】三萬六千日といふ語は、抱朴子に「百年之壽、三萬餘日耳」とあり、沈炯の詩に「百年三萬日、處處此傷情」とあり、駱賓王の詩に「且論三萬六千是、寧知四十九年非」とあり。古來數ば費用して居て、必ずしも、太白の獨創ではない。蕭士贇は、左傳を祖としたのであらうとて「三萬六千日は、人生百年の光景なり、太白造詞かくの如しと雖も、然れども、その意は、却つて左傳を祖とす。絳縣の人、年長せり、ともに年を疑ふものあり、之をして年いはしむ。曰く、臣は小人なり、年を紀するを知らず、臣生まれて四百有四五甲子なり。師曠曰く、七十三年なり。士文伯曰く、三萬六千六百有六句と、これ謂はゆる換骨脫胎事を使うて、事に使はれざるものか」といつて居る。なほ此篇の主旨に就いて、蕭士贇は「この篇の大意、謂へらく、人生世に在る、少にして壯、壯にして老、老にして死、猶ほ春にして夏、夏にして秋、秋にして冬、四時代謝するがごとく、功成るもの去るは理

の常なり。奈何ぞ、死を畏れ、斯世に戀戀として、常に不足の嘆を懐き、謬つて其心を用ひむや。すでに此の如くして、止足するを知らざれば、百年の内、惟だ當に夜夜遊宴して、以て光景に流連すべきのみ。識者、これを觀ば、豈に大に笑ふべからざらむや」といつて居る。大體は、それで善いが、止足することを知らない癖に、夜夜燭を乗つて遊んだとても、識者に笑はれるといったのは、稍や作者の眞意を得ぬ感がある。故に乾隆御批には「唐風蟋蟀の意、感興かくの如し。詩の神韻、古しへと化を爲す。これを十九首に擬するに、波瀾二なし」といふべし。結處、通篇と一意相貫く、即ち桃李園序の意、或は謂ふ、若し止足を知らざれば、夜夜宴遊すべきも、識者に笑はれむ、と。その説、當らず」といつて居る。それから唐風の蟋蟀は、詩經に見えた詩で、

蟋蟀在堂。歲聿其莫。今我不樂。日月其除。無已大康。職思其居。好樂無荒。良士瞿瞿。
蟋蟀在堂。歲聿其逝。今我不樂。日月其邁。無已大康。職思其外。好樂無荒。良士嘒嘒。
蟋蟀在堂。役聿其休。今我不樂。日月其悵。無已大康。職思其憂。好樂無荒。良士休休。
といふのであるし、十九首といふは、漢の古詩で、ここでは、特に、

青青陵上柏。磊磊澗中石。人生天地間。忽如遠行客。斗酒相娛樂。聊厚不爲薄。驅車策駑馬。遊戲宛與洛。洛中何鬱鬱。冠帶自相索。長衢羅夾巷。王侯多第宅。兩宮遙相望。雙闕百餘尺。極宴娛心意。戚戚何所迫。

生年不滿百。常懷千歲憂。晝短苦夜長。何不秉燭游。爲樂當及時。何能待來茲。愚者愛惜費。但爲後世嗤。仙人王子喬。難可與等期。

といふのなどを指したのであらう。それから、桃李園序は、同じく李白の作に係り、古來極めて有名なもので、その起首に「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生如夢、爲歡幾何、古人秉燭、良有以也」の數句がある。これ等は、悪く言へば、浮世三分五厘主義に近く、極めて淺薄なるものではあるが、或る點からいへば、いつの世、如何なる處に於ても、到底擺脫すべからざる人間の至情である。

大車揚飛塵。亭午暗阡陌。

大車、飛塵を揚げ、亭午、阡陌暗し。

中貴多黃金。連雲開甲宅。

中貴は、黃金多く、雲に連つて、甲宅を開く。

路逢鬪雞者。冠蓋何輝赫。

路に鬪雞の者に逢ふ、冠蓋何ぞ輝赫たる。

鼻息干虹蜺。行人皆怵惕。

鼻息、虹蜺を干し、行人皆怵惕。

世無洗耳翁。誰知堯與跖。

世に耳を洗ふの翁なく、誰か知らむ堯と跖と。

【字解】「一」亭午。亭は至、日、午に至る、即ち眞晝。「二」阡陌。もとは田間の道、後には意味が變つて、風俗通に「南北を

阡といひ、東西を陌といふ、河東以東は東西を阡となし、南北を陌といふ」とあつて、つまり縦横の街衢。【三】中貴。崔浩は「中に在つて貴せらる、謙望に非ず、故に中貴といふ」といひ、服虔は「内臣の貴せらるるもの」といひ、いづれにしても、宮中に奉侍する寵臣、多くの場合には宦官であるが、必ずさうとは限つて居らぬ。【四】甲宅。甲第と同じ、上屋敷。【五】鬪雞者。唐書に「玄宗、鬪雞を好み、貴臣外戚、皆之を尙ぶ、貴者、或は木雞を弄す」とある。その時、賈昌といふものがあつて、七歳にして鳥語を解し、雞を取扱ふのに妙を得たるに因つて、大に寵遇されたといふことで、その詳は、陳鴻の東坡老父傳に見えて居る。【六】怵惕。恐懼と同じ。【七】洗耳翁。高士傳に「堯の許由に譲るや、由以て累父に告ぐ。累父曰く、汝、何ぞ汝の形を隠し、汝の光を藏せざる。若は吾が友に非ざるなり」と。その臂を撃つて之を下す。由、慨然として自得せず、乃ち清冷の水を過ぎ、その耳を洗つて曰く、さきに貪言を聞き、吾が友に背くと。遂に去つて、終身相見えず」とある。【八】堯與跖。跖は黃帝の時の大盜。

【題義】これは、中貴が君寵を得て、さも得意げに振舞つて居る有様を敍して、自己の不遇に對照したのである。

【詩意】大きな立派な車に乗つて、勢よく驅けて來るものがあつて、街上の塵を捲き上げ、眞晝時なるにも拘らず、縦横の街衢が暗くなつて仕舞つた。これは、即ち中貴の輩で、今しも、君寵を專にするが故に、黃金に不自由をせず、樓閣高く雲に連るやうな上屋敷を都の眞中に建てた。これ等、中貴の中にも、鬪雞の技を以て召し出された者があるが、これなどは、一きは寵幸を得て居るとのこと、自分も路で其者に逢つたが、頭に戴く冠だの、車の上に懸せる天蓋だのは、いづれも、見事に、きらきらしく、その鼻息の荒いことは、虹を衝くばかりで、路行く人も、恐れ入つて、平伏して仕舞

ふ、この手合、格別の才藝もないのに、一寸したことが天子の御氣に入り、それで、かくの如く富貴を擅にして居るので、まことに仕合なことである。これに反して、自分は、天晴な濟世の才を懐けるにも拘はらず、運が悪くて、未だ聖王の一顧を得ず、むなしく陋室に燻つて居るといふ始末、なんと情ないことではないか。顧みれば今の世には、古しへの許由に比すべき識見の高い人が居ないから、堯の聖と、盜跖の暴とを見分けないので、わが才を知つて推薦するといふやうな賢者に遇はぬのも、尤も至極の事である。

【餘論】蕭士贇は「この篇は、時を諷するの詩なり。蓋し賈昌輩の爲にして作る。末句に謂ふ、世に高識の者なし、故に此等の跖の行たる」と、太白の賢人たることを知るなきなり。亦た太白不遇にして、自ら歎するか。といつて居る。元來、玄宗の開元天寶の間は、唐の極盛時期で、天下太平であつた爲に、宮中に於ては奢侈を縦にし、從つて、謂はゆる中貴も、その數、頗る多く、無論、その大部分は、宦官であつた。新唐書の宦者傳に「開元天寶中、宦官、黃衣以上三千員、朱紫を衣るは千餘人、その旨に稱ふものは、輒ち三品將軍に拜し、戟を門に列す。その殿頭、供奉に在るは、委任華重、節を持し、命を傳へ、火焰般般、四方至るところ、郡縣奔走して、獻遺、萬計に至る。功德を修し、禽鳥を市ふ、一たび之が使と爲れば、猶ほ且つ數千緡。監軍は權を持し、節度、反つて其下に出づ。ここに于て、甲舍名園、上服の田、中人に占めらるるもの、京畿に半せり」とあるし、高力士傳には

「中人、黎嚴仁、林昭隱、尹鳳翔、韓莊、牛仙童、劉奉廷、王承恩、張道斌、李大宜、朱光輝、郭全邊令誠等の如き、竝に内に供奉し、或は、外、節度の軍を監し、功德を修し、鳥獸を市ふに、皆これが使となり、使して還れば、哀獲するところ、動もすれば巨萬ばかり、京師の甲第池園、良田美産、占むるもの十の六、力士と略ぼ等し」とある。それから、序に賈昌の事を記せる東城老父傳を一寸引くと「賈昌は、長安宜陽里の人、生まれて七歳、趨捷人に過ぎ、應對を善くして、鳥の語を解す。玄宗、藩邸に在りしとき、民間清明節鬪雞の戲を樂む。位に即くに及びて、雞坊を兩宮の間に治め、長安の雄雞、金尾鐵距、喬冠昂尾、千數を索めて、雞坊に養ひ、六軍の小兒五百人を選びて、之を馴擾教飼せしむ。上、これを好み、民風尤も甚しく、諸王外戚公主侯家、幣を傾け、産を破り、雞を市ひ、以て雞直を償ふ。都中の男女、弄雞を以て事となし、貧者は假雞を弄す。帝、出遊し、昌が木雞を雲龍門の道傍に弄するを見、召し入れて雞坊小兒となし、右龍武軍に衣食せしむ。昌は三尺の童子、雞羣に入つて狎るるが如く、羣小の壯なるもの、弱きもの、勇なるもの、怯なるもの、水穀の時、疾病の候、悉く能く之を知る。一雞を舉げ、喂して之を馴使すること、人の如し。護雞坊中の調者王承恩、玄宗に言ふ。召して、殿廷に試むるに、皆玄宗の意に中る。即日、五百小兒の長となす。加ふるに、忠厚謹密を以てし、天子皆これを受幸し、金帛の賜、日に其家に至る。開元十三年、雞三百を籠して、東封に従ふ。父忠、太山の下に死す。尸を奉じて、雍州に歸葬す。縣官、葬器喪車を爲つて、

洛陽の道に傳ふ。十四年三月、關雉の服を衣て、玄宗に温泉に會す。當時、號して雞神童といふ。時人、これが語を爲して曰く、買家小兒年十三、富貴榮華代不如。能令金距期勝負。白羅縹衫隨三載。父死長安千里外。差レ夫治道挽三喪車一と。八月五日、千秋節、天下に師を賜ひ、或は洛に酺し、元會と清明節と、率ね皆關山に在り。この日に至るごとに、萬樂ともに舉がり、六宮必ず從ふ。昌、鸚翠金華冠を冠し、錦袖繡褙の袴、鐔拂を執り、羣雞を導き、廣場に鉞立す。顧盼、神の如く、指揮、風生ず。毛を樹て、翼を振ひ、吻を颯ぎ、距を磨き、怒を抑へ、勝を待ち、進退期あり、鞭の指すに隨ひ、低昂失はず、昌、勝負を度つて、すでに決す。強きものは前み、弱きものは後れ、昌に隨ひ、雁行して雞坊に歸る。角觥萬夫、劍に跳り、撞を尋ね、毬を蹴り、繩を踏み、竿頭に舞ふもの、意索し、氣沮み、すでに遠巡して敢て入らず、豈に敢て擾龍の徒か」とある。これ等を併觀すれば、謂はゆる中貴貴寵の狀が直に分るし、從つて、この詩の寓意も愈よ明白になることと思ふ。

世道日交喪、澆風散淳源。
不採芳桂枝、反棲惡木根。
所以桃李樹、吐花竟不言。

世道、日に交も喪ひ、澆風、淳源を散す。
芳桂の枝を採らずして、反つて、惡木の根に棲む。
桃李の樹、花を吐いて竟に言はざる所以。

大運有興沒、羣動爭飛奔。
歸來廣成子、去入無窮門。

大運に興沒あり、羣動、争つて飛奔す。
歸り來れよ廣成子、去つて無窮の門に入れ。

【字解】(一) 世道日交喪 莊子に「世喪道矣、道喪世矣、世與道交相喪也」とあるに本づく。唐士贊は、此句を釋して、「世有道の尊ぶべきを知らず、これ世、道を喪ふなり。有道者、世の此の如きを見て、亦た世に用ひらるるに心なし、謂はゆる道、世に喪ふものに非ざるか。故に、交相喪といふなり」といつて居る。(二) 澆風 澆季の世風。(三) 淳源 淳朴なる源流。(四) 大運 天運に同じ。(五) 羣動 主として飛禽走獸を指す。(六) 歸來 來は助語、意味なし、故に歸り去れといふに同じ。(七) 廣成子 神仙傳に「廣成子は、古しへの仙人なり、崆峒の山、石室の中に居る。黃帝聞いて遣り、身を治むるの要を請ひ問ふ。廣成子曰く、至道の精、杳冥冥、觀るなく、聽くなく、神を抱いて以て靜、形、將に自ら正しからむとす。必ず靜、必ず清、爾の形を勞するなかれ、爾の精を搖かすなかれ、乃ち長生すべし。内に慎み、外を閉ぢ、多く知れば敗を爲す。我、この一を守り、以て其和に處る。故に千二百歳にして、形、未だ嘗て衰へず、吾が道を得るものは、上、皇となり、吾が道を失ふものは、下、土となる。將に汝を去つて、無窮の門に入り、無極の野に遊ばむとす。日月と光を參し、天地と常をなし、人其れ盡く死して、我ひとり存せむ」とある。

【題義】この篇は、世の愈よ下れるに憤激し、ここを去つて、仙道を修得しようといふ意を述べたので、前の遊仙諸詩と略ぼ其歸を一にして居る。
【詩意】世道愈よ衰へて、有道者を容れず、有道者も、亦た世に用ひらるるを欲せずして、互に相喪ふやうな状態で、折角淳朴であつた原始的道德は、末俗の弊風の爲に全然惡化されて仕舞つた。世の

有^う道^{だう}者^{しや}を用^{もち}ひず、却^{かへ}つて、不^ふ道^{だう}者^{しや}を用^{もち}ふるのは、たとへば、香^かばしき桂^{けい}の花^{はな}の枝^{えだ}を采^とらず、却^{かへ}つて、惡^{あく}木^{ぼく}の根^ねに休^{やす}んで居^ゐるやうなものである。されば、有^う道^{だう}者^{しや}が、世^よの道^{だう}を重^{おも}んぜざるを見^み、ひとり其^{その}身^みを善^よくし、終^{しゆう}身^{しん}默^{もく}黙^{もく}として引^ひ込んで居^ゐるのは、丁^{ちやう}度^ど、桃^{たう}李^りの樹^きが花^{はな}を開^{ひら}いても、自^{みづか}ら物^{もの}言^いはぬと同じである。抑^{おさ}も、大^{たい}道^{だう}には盛^{せい}衰^{すい}があるのに、世^よ人^{じん}が其^{その}中^{ちゆう}に居^ゐて、嗜^{しやく}慾^{よく}を縱^{しん}にするのは、恰^{あた}も昆^{こん}蟲^{ちゆう}鳥^{てう}獸^{じゆう}が何^{なに}も思^{おも}はずに飛^ひ奔^{ほん}するやうなものである。されば、廣^{くわう}成^{せい}子^しよ、早^{はや}く人^{じん}間^{けん}世^せ界^{かい}を立^たち去^さつて、無^む窮^{きゆう}の門^{もん}に入^いつて、行^やひ澄^{せい}ますが善^よい。この世^よの中^{ちゆう}は、到^{たう}底^{てい}、有^う道^{だう}者^{しや}の住^すむに堪^たへぬところ、たとひ、住^すんで居^ゐたところで、用^{もち}ひられねば、それまでの事^{こと}、何^{なん}の役^{やく}にも立^たたぬ。それよりも、早^{はや}く浮^う世^せを思^{おも}ひ切^きつて、自^じ己^きの仙^{せん}分^{ぶん}を全^{ぜん}うするのが第一^{だいいち}である。

【餘論】蕭^{せう}士^し賛^{さん}は、詳^{しやう}細^{さい}に此^{この}詩^しを解^{かい}して居^ゐるが、その文^{もん}句^くが餘^{あま}り長^{なが}いから、終^まの方^{はう}だけ引^ひいて置^おく。曰^{いは}く「有^う道^{だう}者^{しや}、世^よに用^{もち}ひられず、しかも、世^よを擧^あげて、遂^{つひ}に道^{だう}を知^しるの人^{ひと}なし。ここに於^おてか、澆^{じやう}風^{ふう}日^{じつ}に扇^{せん}し、淳^{じゆん}源^{げん}日^{じつ}に散^{さん}ず、大^{だい}運^{うん}には興^{きゆう}あり、沒^{ぼつ}あり、しかも、世^よの人^{ひと}、膠^{かう}膠^{かう}擾^{じゆう}擾^{じゆう}、情^{じやう}慾^{よく}聲^{せい}利^りの中^{ちゆう}に汨^こ汨^ことして、昆^{こん}蟲^{ちゆう}鳥^{てう}獸^{じゆう}の争^{せう}つて飛^ひ奔^{ほん}するが如^{ごと}きに過^すぎざるのみ、嘆^{たん}するに勝^かふべけむや。歸^き來^{らい}廣^{くわう}成^{せい}子^し、去^さ入^に無^む窮^{きゆう}門^{もん}とは、乃^{すなは}ち、太^{たい}白^{はく}、世^よ道^{だう}かくの如^{ごと}きを見^み得^とし、意^いを決^{けつ}して、有^う道^{だう}者^{しや}の歸^きを爲^なす。廣^{くわう}成^{せい}子^しは、乃^{すなは}ち上古^{じやうこ}有^う道^{だう}の人^{ひと}、黃^{わう}帝^{てい}の師^しなり、故^{ゆゑ}に廣^{くわう}成^{せい}子^しに託^{たく}して言^いふなり。吁^あ、この詩^しを讀^よむもの、百^{ひやく}世^せの下^{もと}、猶^{なほ}は感^{かん}激^{げき}あらむ」と。

碧^ひ荷^か生^{せい}幽^{ゆう}泉^{せん}。朝^{ちゆう}日^{じつ}豔^{えん}且^{かつ}鮮^{せん}。

碧^ひ荷^かは幽^{ゆう}泉^{せん}に生^{せい}じ、朝^{ちゆう}日^{じつ}豔^{えん}にして且^{かつ}鮮^{せん}なり。

秋^{しゆう}花^か冒^{ぼう}綠^{りく}水^{すい}。密^{みつ}葉^{えつ}羅^ら青^{せい}煙^{えん}。

秋^{しゆう}花^かは綠^{りく}水^{すい}を冒^{ぼう}ひ、密^{みつ}葉^{えつ}は青^{せい}煙^{えん}を羅^らす。

秀^{しゆう}色^{しき}空^{くう}絕^{ぜつ}世^せ。馨^{けい}香^{かう}竟^{けい}誰^{たれ}傳^{でん}。

秀^{しゆう}色^{しき}空^{くう}しく絶^{ぜつ}世^せ、馨^{けい}香^{かう}竟^{けい}に誰^{たれ}か傳^{でん}へむ。

坐^ざ看^{くわん}飛^ひ霜^{そう}滿^{まん}。凋^{てう}此^こ紅^{こう}芳^{ほう}年^{ねん}。

坐^ざに看^{くわん}る、飛^ひ霜^{そう}滿^{まん}ちて、この紅^{こう}芳^{ほう}の年^{ねん}を凋^{しぼ}ましむるを。

結^{けつ}根^{こん}未^み得^{とく}所^{しよ}。願^{げん}託^{たく}華^{くわ}池^ち邊^{へん}。

根^ねを結^{むす}んで、未^いだ所^{ところ}を得^えず、願^{ねが}はくは、華^{くわ}池^ちの邊^{へん}に託^{たく}せむ。

【字解】一、碧^ひ荷^かは蓮^{れん}。二、幽^{ゆう}泉^{せん}。幽^{ゆう}僻^{へき}な處^{ちよ}に湧^わき出^でづる清^{せい}泉^{せん}。三、冒^{ぼう}。覆^{おほ}ふ。四、羅^ら。あみす。五、華^{くわ}池^ち。史^し記^きに「崑崙山上に華池あり」といひ、陸^{りく}機^きの詩^しに「移^{うつ}居^こ華池邊」とある。

【題義】これは、荷^か花^かに託^{たく}して、おのが懷^{くわい}抱^{ぼう}を寫^{うつ}したので、折^{せつ}角^{かく}の材^{さい}能^{のう}があつても、朝^{ちゆう}廷^{てい}の上^{うへ}に於^おて満^{まん}腹^{ぼく}の經^{けい}綸^{りん}を行^なふことが出^で來^きぬのは、まことに遺^い憾^{かん}至^し極^{ごく}である、しかし、われは一刻^いも君^{きみ}を忘^{わす}れず、從^{したが}つて、終^{しゆう}始^し君^{きみ}の御^{おん}側^{がは}に居^ゐたいといふ心^{こころ}を述^のべたのである。

【詩意】幽^{ゆう}泉^{せん}に生^{せい}じて居^ゐる碧^ひ荷^かは、もとより綺^き麗^{れい}で、朝^{あさ}日^ひに映^{たい}すれば、艶^{えん}艶^{えん}しく且^{かつ}鮮^{せん}かに見^みえる。かくて、秋^{あき}になると、花^{はな}は綠^{りく}水^{すい}の上^{うへ}に覆^{おほ}ひかぶさり、密^{みつ}生^{せい}した大^{おほ}な葉^{えつ}は、青^{せい}煙^{えん}を羅^らしたやうに見^みえる。碧^ひ荷^かは、絶^{ぜつ}世^せの秀^{しゆう}色^{しき}を有^あするに拘^かはらず、その場^ば所^{しよ}が幽^{ゆう}僻^{へき}である爲^{ため}に、折^{せつ}角^{かく}、靈^{れい}妙^{めう}な句^くがあつても、誰^{たれ}も之^{これ}を傳^{でん}へる人^{ひと}がない。彼^{かれ}此^こして居^ゐる内^{うち}に、花^{はな}の盛^{さか}りは、まことに短^{みづか}く、やがて、秋^{あき}の末^{すえ}、霜^{しも}の飛^と

ふ時節に成ると、この紅芳の年を測ませて、それで花は済んで仕舞ふ、まことに情ないことで、根を結ぶに所を得なかつたから、どうにも仕方がない。この碧荷の心では、崑崙山上の華池の様な處に生えたいと願つて居るであらう。さうすれば、十分に秀色を發揮し、馨香をも人が傳へて賞美されるに相違ない。

【餘論】蕭士贇の解に「この篇、荷と華池とは比興なり。謂へらく、君子、絶世の行ありと雖も、僻野に處れば世に知られず、常に老の將に至らむとするを恐る。しかも、抱くところは、用ふるところに見はれず、安んぞ、身を朝廷の上に託して、世に用ひらるるを得んや。これ亦太白自ら傷むの意なるか」といひ、乾隆御批には「前に郢客白雪の一篇あり、舉世誰爲傳といひ、この篇には馨香竟誰傳といふ、不遇を傷むなり。情、辭に見はる。白、未だ嘗て一日も君に事ふるを忘れざるなり。仙を求め藥を採るは、豈に其本心ならむや。嚴羽云ふ、白の詩を觀るには、その安身立命の處を識るを要すと。この類、是れなり」とあつて、いかにも、事理を盡して居る。

燕趙有秀色。綺樓青雲端。

燕趙に秀色あり、綺樓、青雲の端。

眉目豔皎月。一笑傾城歎。

眉目、皎月よりも豔に、一笑すれば、城を傾けて歎ぶ。

常恐碧草晚。坐泣秋風寒。

常に恐る、碧草の晩、坐に秋風の寒きに泣くを。

纖手怨玉琴。清晨起長歎。

纖手、玉琴を怨み、清晨、起つて長歎す。

焉得偶君子。共乘雙飛鸞。

焉んぞ君子に偶し、共に雙飛鸞に乗するを得む。

【字解】(一) 燕趙有秀色 古詩に燕趙多佳人、美者顏如玉とあるに本づく。(二) 傾城歎 漢書李延年の歌に北方有佳人、絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國とあるに本づく。(三) 偶 配偶となる。(四) 共乘雙飛鸞 秦の穆王の女、弄玉、蕭史とともに道を得、鳳に乗じて飛び去りしことを用ふ。江淹の詩に畫作秦王女、乘鸞向三煙歸とある。

【題義】これも前首と同義で、材藝の士、用ひられず、老の將に至らむとするに因り、君子を得て、それと行動を共にし、どうにかして、世に用ひられたいといふ意を述べたのである。

【詩意】名だたる燕趙の佳人が、青雲の上に聳ゆる立派な二階の上に住んで居る。その眉目の匂やかなるは、皎月よりも豔にして、一たび笑へば、滿城の人を傾けて歎ぶ程である。しかるに、この佳人は、ただ獨り住んで居て、その淋しさに堪へず、秋風一たび至れば、寒氣忽ち催し、今まで縁であつた草も、忽ち枯れて仕舞ふと同じく、いかなる美人でも、寄る年波には敵はず、早く身の振り方をつけたいといふので、常に思ひ悩んで居る。かくて、朝早く夢の醒めたときなど、覺えず長嘆し、その憂さをまぎらす爲に、細い手で琴を奏でるが、その音は、流石に怨を帯びて聞える。されば、どうがな

して、君子に配し、やがて、ともに道を得て、鸞に跨り、雙飛して昇天したいと、かう思ひつづけて居る。

【餘論】蕭士贇は「この篇、比興、二十六首（即ち前首、碧荷生幽泉）と同意。謂へらく、才を懐き、藝を抱く之士、惟だ未だ世に用ひられざるの時にして、老の將に至らむとするを恐れ、君子を得て附離し、ともに爵位を共にして、世に用ひられむことを思ふなり。士の志あつて不遇なるもの、これを読まば、能く一唱三嘆して餘悲あらざらむや」といつて居る。

容顔若飛電。時景如飄風。

容顔は飛電の若く、時景は飄風の如し。

「なり。」

草綠霜已白。日西月復東。

草は緑にして霜は己に白く、日は西にして月は復た東

華鬢不耐秋。颯然成衰蓬。

華鬢、秋に耐へず、颯然として衰蓬を成す。

古來賢聖人。一一誰成功。

古來、賢聖の人、一一誰か功を成す。

君子變猿鶴。小人爲沙蟲。

君子は猿鶴に變じ、小人は沙蟲となる。

不及廣成子。乘雲駕輕鴻。

及ばず廣成子、雲に乗じて輕鴻に駕するに。

【字解】「一」時景、時時の風景。「二」飄風、旋風、燕子に「速かなること飄風の如し」とある。「三」華鬢、白髮。「四」衰蓬、

枯れた蓬。「五」君子變猿鶴、藝文類聚に引ける抱朴子には「周の穆王、南征して、久しうして歸らず、君子は猿となり、鶴となり、小人は蟲となり、沙となる」とあるが、今本の抱朴子には「三軍の衆、一朝盡く化す、君子は鶴と爲り、小人は沙と成る」とあつて、稍や文句が違つて居る。「六」廣成子、前に見ゆ。

【題義】この篇は、年華しきりに移り、四時の節物は、毎に推移し、現象界は變化極まらず、まことに詰らないから、そこで道を得て、宇宙の本體に參透したいといふ意を述べたのである。

【詩意】人の容顔は、電光の如く、東の間に消え行くもので、昨日の紅顔も、今日は、血の氣もなく、青ざめて仕舞ふし、四季折折の景色は、旋風の如く、その遷り變ることは、極めて速なものである。されば、草葉の緑も、わづかの内で、忽ち霜を置いて白けて仕舞ふし、日が西に沈むと見る内に、月が復た東の空から上つて来る。白髮は、もとより秋に耐へず、一たび西風に遇へば、颯然として枯れた蓬の如くに成る。人の此世に在るは、極めて短い年月であるから、むかしから聖賢を以て稱せらるる人と雖も、皆成功した譯ではなく、折角の志を齎らして死んだものも、決して少くはない。周の穆王が南征して反らざりしとき、三軍盡く覆没し、その中の君子は猿鶴となり、小人は沙蟲となつたといふ通り、千變萬化、もとより極まりの無いことである。されば、廣成子の如く、輕げに飛ぶ鴻に跨つて、大空を自由に翱翔するのが一番で、自分も、どうかして仙術を修得したいものである。

【餘論】蕭士贇は「ここに言ふは、人は暫く、少くして忽ち老い、光景流れ易く、千變萬化、未だ始

より極あらず、然れども、仙化の高しと爲すに若かざるなり」といつて居る。それから、結二句は、前に在つた歸來廣成子、去入無窮門と極めて類似して居るので、いくら李白でも、同じやうなことが、あまり數ば繰り返されると、やがて、有り難くもないやうに成る虞がある。

【三季分戰國。七雄成亂麻】

三季は戰國に分れ、七雄は亂麻を成す。

【王風何怨怒。世道終紛拏】

王風何ぞ怨怒、世道終に紛拏。

【至人洞玄象。高舉凌紫霞】

至人は玄象に洞らかに、高舉して紫霞を凌ぐ。

【仲尼欲浮海。吾祖之流沙】

仲尼は海に浮ばむことを欲し、吾が祖は流沙に之く。

【聖賢共淪沒。臨歧胡咄嗟】

聖賢共に淪沒、歧に臨んで胡ぞ咄嗟せむ。

【字解】【一】三季、三代、即ち夏殷周の末。【二】七雄、六國、即ち韓魏趙燕齊楚と秦とを合稱す。【三】王風、前に見ゆ。【四】

怨怒、毛傳に「亂世の音は怒み以て怒り、その政乖」といひ、正義に「亂世の政教民心と乖戻す、民、その政教を怨む、忿怒する所以。その忿怒の心を述べて、歌を作る、故に亂世の音、亦た怒み以て怒るなり」とある。【五】紛拏、顏師古の解に「亂れて相持擥するなり」とある。つまり入り交つて擥み合ふ。【六】至人、聖人に同じ。【七】洞、洞察する、明かなること。【八】玄象、天象をいふ。【九】仲尼、孔子の字、論語に「道行はれず、桴に乗じて海に浮ばむ」とある。【一〇】吾祖、老子を指す、列仙傳に「關令尹喜は、周の大夫人なり。老子、西に遊ぶ。喜、先づ其氣を見て、真人の當に過ぐべきあるを知り、物色して之を遮り、果して老子を得たり。老子、亦

た其奇を知り、爲に書を著はして之に授く。後、老子と俱に流沙に遊び、胡に化して、巨勝の實を服す。その終るところを知るなし」とある。【一一】臨歧、岐は分れ路。【一二】咄嗟、歎息に同じ。

【題義】この詩は、亂後、難に遭つた時の作であらうといふことである。

【詩意】三代の末は、分れて戰國となり、強は弱を併せ、大は小を併せた揚句には、七雄だけが残されて、その騷擾の甚しきこと、さながら亂麻の如くであつた。かくて大雅亡びて、王風わづかに存するものの、その詩は、亂世の音であるから、怨んで且つ怒り、もとより、雍和の氣象に乏しく、當時の世道は、擥み合の大喧嘩を旨として居た。この間、聖人と稱すべき人が居たが、天象を視て、興亡の數を洞察し、とても、堯舜の道は行はれないと見切りを付けたから、高く擧つて、風塵の表に出で、仙を學んで紫霞を凌ぐを事とした。現に、孔子も、世愈々亂れ、道の到底行はれざるを見るや、桴に乗つて海に浮ばむといひ、吾が祖老子は、周の衰へたるを見て、はるかに流沙の方へ行つて仕舞つた。かくの如く、亂世には、聖賢が皆淪沒して、世間から離れて仕舞ふので、歧路に臨んで、東へ行かうか、西へ行かうかといふやうに、さまざまに思ひ惑ひ、そして、嘆息したところで何にも成らぬ。

【餘論】蕭士資は「この詩は、其れ安史亂離の後、難に遭うて黜けらるるの時に作れるか。然らずんば、何ぞ古人の高飛遠舉するものに羨むあらむや。その志、亦た哀むべし」といつて居る。

玄風變太古。道喪無時還。

玄風は太古に變じ、道喪へば、時として還るなし。

擾擾季葉人。雞鳴趨四關。

擾擾たる季葉の人、雞鳴、四關に趨る。

但識金馬門。誰知蓬萊山。

但だ金馬門を識るのみ、誰か蓬萊山を知らむ。

白首死羅綺。笑歌無時閒。

白首、羅綺に死し、笑歌、時として閒なるなし。

綠酒晒丹液。青娥凋素顏。

綠酒、丹液を晒ひ、青娥、素顏を凋ましむ。

大儒揮金椎。琢之詩禮間。

大儒は金椎を揮ひ、これを詩禮の間に琢く。

蒼蒼三珠樹。冥目焉能攀。

蒼蒼たる三珠の樹、冥目ぞ能く攀ぢむか。

【字解】(一)玄風、玄素の風。(二)季葉、季世に同じ。(三)雞鳴、史記の孟嘗君傳に「夜中、函谷關に至る、關法、雞鳴いて客を出す」とある。(四)四關、文選註に引ける陸機の洛陽記に「洛陽に四關あり、東は成皋、南は伊闕、北は孟津、西は函谷」とあるし、史記の秦本紀に「關中は咸陽なり、東は函谷、南は褒武、西は散關、北は蕭關」とある、いづれにしても四方の關門といふこと。

【三】金馬門、三輔黃圖に「金馬門は、宦者の署。武帝、大宛の馬を得、銅を以て象を鑄り、署門に立つ、因つて、以て名となす。東方朔、主父偃、嚴安、徐樂、皆金馬門に待詔すとは、即ち此」とある。(四)晒、笑ふ。(五)丹液、仙家の藥方。(六)青娥、方言に「秦晉間、美貌を稱といふ」とある、青は、すべて若若しい意味に用ひる。(七)大儒揮金椎、莊子に「儒、詩禮を以て家を費す。大儒、禮傳して曰く、東方作事、事、これ何如。小儒曰く、未だ措楯を解かず、口中に珠あり、時、まことに之あり、曰く、青青之夢、生於陵陽」と、生きて布施せず、死して何ぞ珠を含むを爲すと。その夢を接し、その夢を壓し、儒、金椎を以て其頭を挫き、徐に其頭を別ち、口中の珠を傷くるなからしむ」とあり。(八)三珠樹、山海經に「三珠の樹は赤水の上に生ず、その樹たる、柏葉の如く、皆珠を爲す、一に曰く、その樹たる、華の如きなり」とあり、淮南子に「凡そ海外三十六國、三珠樹は、その東北方に在り、玉樹あり、赤水の上に在り、崑崙華丘は、その東南方に在り」と見えて居る。(九)冥目、死のこと。

【題義】これは、季世の薄俗、日に甚しく、儒者までが、さまざまの悪いことをするといつて、憤激の意を寓したのである。

【詩意】玄素の風の變じたのは、何も昨今の事ではなく、實は太古の時分からの事で、大道一たび淪喪すれば、再び元へ還ることは出来ない。ここに於て、季世の人は、榮枯得失を以て、一身の損益となし、唯だ名利のみに趨つて居て、雞が晨に啼く時分から、おのがじし、東奔西走、さも忙しげに四關に向つて驅け出す。彼等は、唯だ人間に金馬門といふものがあつて、そこへ行けば、天子の恩寵を蒙り、心のままに富貴が得られるといふことだけを知つて居るが、海外には蓬萊山といふ仙境があつて、そこへ往けば、長生不死になれる、まことに此上もない結構な處であるといふことは、全く知らない。かくて綺羅を著かされる女どもを左右に侍らして、淫樂を事とし、やがて年が寄り、白髮頭になつて、その間で往生するまで、笑ひさざめいて、しばらくも、閒なる時がない。それから、綠酒を以て仙家の丹液に勝れりとなし、若若しい美色に命を斷つても、一向平氣で居る。世間は、すべて、名利聲色に溺れ、死に至るも、その害を悟らないので、まことに情ないことである。それは未だしも、儒者と稱する連中は、口でこそ詩禮などを唱へて、さも人物を琢くやうなことを言ひ觸らして居るが、

利慾の爲には、鐵椎を揮つて、墓場さへ發き兼ねぬので、いやはや、ひどいことである。こんな事であるから、仙士に生ずる三珠の樹が、蒼蒼として、眼前に茂つて居たとて、死に至るまで、攀ち上ることが出来ないで、つまり、出世間の道は、いくら近い處に在つたにしても、利慾に迷つて居る者は、どうにも仕方がない。

【餘論】蕭士贇の言に「この詩は、太白、時を感じ世を憂ふるの作なり。意へらく、古道日に喪ひ、季世の人復た樸に返らず、名利聲色の場に汨没し、死に至るまで悟らず、謂はゆる儒者は、又皆經を假り世を誤るの人、儒術を借り、以て、その竊取の心を行ふ。漢諺に謂はゆる、牛頭を懸けて馬脯を賣る、盜跖の行にして孔子の語なるもの、皆是れなり。彼、豈に大道無爲自然の化を知らむや。三珠の樹は、大道に喩ふるなり。蒼蒼として前に在りと雖も、乃ち此の如き人、目冥然として見る事なし、安んぞ能く攀ちて至らむや。憂憤の意、微にして顯なり」とあつて、大體は善いが、冥目焉能攀の句の解釋が宜しくない。そこで、王琦は説をなして「按ずるに、三珠の樹は、乃ち仙境生ずるところ、冥目焉能攀とは、死に至るまで探るを得ず、以て上文焉知蓬萊山の意に照らす」といつて居て、その方が穩當である。

鄭客西入關、行行未能已。

鄭客、西して關に入り、行行未だ已む能はず。

白馬華山君、相逢平原里。

白馬華山君、相逢平原の里。

壁遺鎬池君、明年祖龍死。

壁は鎬池君に遺れ、明年祖龍死せむ。

秦人相謂曰、吾屬可去矣。

秦人相謂つて曰く、吾が屬去るべしと。

一往桃花源、千春隔流水。

一たび桃花源に往けば、千春、流水を隔つ。

【字解】

【一】鄭客西入關 史記に「秦の始皇の三十六年、使者、關東より、夜、華陰平舒の道を過ぐ。人あり、璧を持し、使者を逢つて曰く、吾が爲に鎬池君に遺れ。因つて言つて曰へ、今年祖龍死せむ」と、使者、その故を問ふ。因つて、忽ち見えす。その璧を置いて去る。使者璧を奉じて、具に以聞す。始皇、默然、良久、久しうして曰く、山鬼、もとより一歳の事を知るに過ぎざるなりと。退いて言つて曰く、祖龍は、人の先なるものなりと。御府をして、璧を見せしむれば、乃ち二十八年、行いて江を渡るとき沈めしと。その璧なり」とある。して見れば、平原里は平舒里の誤であらう。又同じ事が搜神記に見え「秦の始皇の三十六年、使者鄭客、關東より來り、將に、關關に入らむとし、西、華陰に至り、素車白馬、華山の上より下るを望み見る。その人に非ざるを疑ひ、道に住まり、止まつて之を觀る。遂に至り、鄭客に問うて曰く、安んじか之。鄭客曰く、咸陽に之く、と。車上の人曰く、吾は華山の使なり、願はくは、一讀の書を託して、鎬池君の所に致さむ。子、咸陽に之く、道、鎬池を過ぎて、一大梓を見む、文石あり、取つて梓を欸かば、當に應ふるものあるべしと。即ち書を以て之に與ふ。客、その言の如くし、石を以て梓を欸けば、果して人あり、來つて、書を取る。云ふ、明年祖龍死せむ」とあつて、鄭客は、鄭容の誤かと思はれる。そして、李白は、主として、搜神記に據つたものと見える。【二】桃花源 陶淵明の記に「晉の太元中、武陵の人、魚を捕ふるを樂となし、溪に緣つて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花に逢ふ、岸を夾むこと數百步、中に雜樹なく、芳華鮮美、落英繽紛たり。漁人、甚だ之を異み、復た前行して、その林を窮めむと欲す。林、盡きて、水源に便ち一山を得たり。山に小口あり、勢窮として光あるが若し。便ち舟を捨てて口より入る。初め極めて狭

く、わづかに人を通ず、復た行くこと數十歩、豁然開朗、土地曠空、屋舍儼然、良田美池桑竹の屬あり、阡陌交過、雞犬相聞、こゝ、男女衣著、悉く外人の如く、黃髮垂髫、並に怡然として自ら樂む。漁人を見て大に驚き、従つて來るところを問ふ。具に之に答ふ。便ち要して家に歸り、爲に酒を設け、雞を殺して食を作す。村中の人、この人あるを聞き、咸な來つて問訊す。自ら云ふ、先世、秦の難を避け、妻子邑人を率ゐて、この絕境に至り、復た出でず、遂に外人と隔間す。今は何の世ぞ。乃ち漢あるを知らず、魏晉に論なし。この人、一一ともに聞くところを言ひ、皆爲に嘆惋す。餘人各復た延いて其家に至り、皆酒食を出す。停まること數日にして、歸して去る。この中の人、語つて曰く、外人の爲に道ふに足らざるなり、と。すでに出でて、その船を得、便ち扶けて路に向ひ、處處に之を誦し、郡に及びて、乃ち太守に歸り、説くこと此の如し。太守、即ち人を遣し、之に隨つて往いて之を尋れしむ、遂うて復た路を得ず、後、遂に津を問ふものなし」とある。

【題義】これは、詠史の作とも見られるが、秦人に機を知るの明あつて、早く世と隔離したのが、いかにも善く、自分も、かく有りたいたいといふ理想を述べたのである。

【詩意】鄭客が、西の方、函谷關に入り、行き行きて止まらず、急よ咸陽に近づかうとして、關中を歩いて居ると、忽ちにして、白馬に乗つた華山の君が出て來て、平舒道に於て出合つた。その華山君が云ふには、どうか、この玉をば鑄池に住んで居る主の君に贈つて貰ひたい、さうして、來年は祖龍が死ぬと傳言して呉れるといつた。元來、鑄池の鑄は、秦都咸陽を去ること遠からず、むかし周の武王の都した處、鑄池君は即ち武王である。武王は、生時に殷紂を討つて、天下を取つたが、今や始皇の荒淫は、丁度殷紂の如く、それも善いのであるが、天命の廻り合せで、來年は死ぬといふ意である。

祖龍の祖は始まり、龍は人君で、即ち始皇帝といふ隠語である。又一説には、鑄池君は水神で、始皇が前年大江を渡るとき風雨に遇ひ、晴を祈る爲に、璧を江中に投じたことがある。そこで、江神が特に使を遣し、その璧を鑄池君といふ水神に贈り、來年は始皇が死ぬるぞよといつたのである。且つ秦は水徳を以て王となつたのであるから、その君、將に亡びむとするに際し、水神に向つて、先づ之を告げ、その積りで居れといつたものと見える。兎に角、奇妙な話で、さしも盛なりし始皇の世も、最早運の盡きとなつた。すると、秦人は之を聞き、これは大變だ、始皇帝が崩せられると、天下は再び亂れて、騷動が屹と劇しくなるに相違ない。吾吾は、いつまでも、安閑として、ここに居るべきではないといつて、一たび去つて桃花源に隠れし後は、長しへに、一道の流水が、之を人間と隔て、いつしか、仙人に成り澄まして仕舞つた。

【餘論】この篇は、鑄池君の事と桃花源の事とを結びつけて、好個の結構を成したのである。勿論、桃花源の秦人が鑄池君の事を聞いて、それから、俄に立ち去つたといふ史實は無いが、兎に角、有り得べきことであるから、かく云つたので、しかも、それが、如何にも自然である。それから、桃花源は、陶淵明が老莊の理想とせる社會状態を現實化して、描き出したので、もとは單なる想像の産物に過ぎぬが、後世から全く事實の如く思はれて居る。又陶淵明の記立で見ても、その先世が秦の難を避けたといふから、現存せるものは、その遠い子孫で、もとより、秦民その人ではない。されば、桃

花源は、實際有つたに似たところが、恰も我が國に於ける五個莊とか、祖谷とかいふ平家の末孫の住んで居る處と、丁度同じで、すこしも不思議はない。しかし、李白が一去桃花源、千春隔流水といつたのは、いかにも塵外の仙境そつくりで、従つて、その住民も、不死の仙人らしく聞こえるから面白い。元來、この詩は、僅僅十句、しかも全く敘事で、すこしも作者自身の主觀を交へて居らぬが、一讀すれば、餘韻縹渺、しかも、それが作者の理想たること顯然たるに至りては、愈よ妙と稱すべく、かういふ筆致は、古今を通じて、あまり多くは見ない。後世では、高青邱などが、時たま、これを真似て居るばかりである。それから、例に依つて、蕭士贇の説を擧げると「危邦には入らず、亂邦には居らず、明哲身を保つての道なり。太白も亦た、夫の秦を避くるの人、幾を見て作り、卒に能く身を全うし害に遠かるものを羨むか。太白、はじめ、永王璘の逼迫に遭ひ、繼いで、自ら白する能はず、竟に竄逐の禍に遭ひ、憂に罹つて羨むあり。その志、亦た哀むべきのみ。秦人相謂曰、吾屬可去矣、この兩句は是れ、暗に史に謂はゆる、侯生廬生、相與に謀つて曰く、始皇、人と爲り、天性剛戾、刑殺を以て威と爲すを樂む。秦法、方を兼ねるを得ず、驗あらざれば、輒ち死す、權勢を貪ること、かくの如きに至る、未だ爲に仙薬を求むべからずといひ、ここに於て、亡げ去りし事を指す。脱胎換骨し了り、斧鑿の痕なし。詩に聖なるに非ざれば、孰れか能く此に與からむや」といつて居る。それから、乾隆御批には「その風調致佳なるを賞す」といつてある。

尊收肅金氣。西陸莖海月。

尊收、金氣肅たり、西陸、海月に莖す。

秋蟬號階軒。感物憂不歇。

秋蟬、階軒に號び、物に感じて、憂歇まず。

良辰竟何許。大運有淪忽。

良辰竟に何許ぞ、大運に淪忽あり。

天寒悲風生。夜久衆星沒。

天寒くして、悲風生じ、夜久しくして、衆星沒す。

惻惻不忍言。哀歌達明發。

惻惻として言ふに忍びず、哀歌、明發に達す。

【字解】(一) 尊收、秋の神、禮記に「孟秋の月、その神は尊收」とあり、山海經に「西方尊收、左耳蛇あり、兩龍に乗す」郭璞の註に「人面虎爪白毛、鏡を執る」とある。(二) 西陸、秋に成つて月の通過する軌道。北堂書鈔に「漢書、立春春分には、月、東方赤道を行く、東陸といふ。立夏夏至には、月、南方赤道を行く、南陸といふ。立秋秋分には、月、西方赤道を行く、西陸といふ。立冬冬至には、月、北方赤道を行く、北陸といふ」とある。(三) 弦、釋名に「月中の名、その形、一は旁曲、一は旁直、弓を張つて弦を弛めたるが如し」とある。(四) 何許、何處に同じ。(五) 大運、天運。(六) 淪忽、暮れ行くこと。(七) 明發、明旦に同じ、將に旦ならむとして光明開發すること。

【題義】これは、悲秋の情緒を述べたのである。

【詩意】尊收の神が西方を掌るといふ秋の期節になると、金氣が肅然として、身にしみ、海から出る上弦の月は、西陸の軌道を通つて行く。物さびしげに日ぐらしが階軒に鳴くにつけても、ここに節物の推移に感じ、わが憂は、決して止まない。天運も今や盡きなむとし、良辰は何時とも分らず。こ

れと同じく、人も功名を立つべき好機會には容易に出合はず、やがて、窮途に沈淪する。かくて、その秋も次第に暮れ行けば、悲風蕭颯として寒空を拂ひ、夜も長くして、多くの星も、いつしか消えて仕舞ふ。かくて、惻惻の情、自ら言ふに忍びず、強ひて哀歌を發し、夜もすがら、寢もやらで、忽ち明け方に成つて仕舞つた。

【餘論】蕭士贊の説に、「この詩は、秋を悲む者の詩なり。古しへより、志士秋に感じて悲むものは何ぞ、蓋し天道一歳の運は、猶ほ人生一世の期のごときなり、時、秋に至つて歳功成る、老の將に至らむとする、功業未だ建たず、名聲昭かならず、能く此に感じて悲を興さざらむや」とある。

北溟有巨魚。身長數千里。北溟に巨魚あり、身の長さ數千里。

仰噴三山雪。横呑百川水。仰いで三山の雪を噴き、横に百川の水を呑む。

憑陵隨海運。燁赫因風起。憑陵、海の運するに隨ひ、燁赫、風の起るに因る。

吾觀摩天飛。九萬方未已。吾、天を摩して飛ぶを觀るに、九萬方に未だ已まず。

【字解】【一】北溟有巨魚。莊子の逍遙遊に「北冥に魚あり、その名を鯢と爲す。鯢の大、その幾千里なるを知らざるなり。化して鳥となる。その名を鵬となす。鵬の背、その幾千里なるを知らざるなり。怒つて飛ぶ、その翼、垂天の雲の若し。この鳥や、海、應すれば、將に南冥に従らむとす。南冥は天池なり。齊諧は怪を志するものなり。諧の言に曰く、鵬の南冥に従るや、水擊つこと三

千里、扶搖を搏つて上るもの九萬里」とある。【二】三山。蓬萊・方丈・瀛洲を合稱す。【三】憑陵。勢凌しく迫り凌ぐ。【四】燁赫。飛び上る貌。【五】九萬。九萬里の略。

【題義】この詩は、莊子に本づき、鯢鵬の變化を述べて、おのが志を託したのである。

【詩意】北溟に鯢といへる大魚があつて、その長さは數千里、仰いで息をすれば、飛沫紛紛、雪となりて三山に瀾漫し、横に吸へば、百川の水を呑み盡すばかりである。この鯢が一たび變すれば大鵬となるので、勢凌まじく海の運行に乗じて動き出し、一たび羽ばたきをすれば、天地を吹き拂ふ様な大風に乗じて舞ひ上るのである。かくて、天を摩する其勢を見れば、九萬里を一息に飛んでも、未だ已まない位、本當に力の限り飛んだならば、どれ程行くか、とても、凡智を以て臆度することは出来ない。

羽檄如流星。虎符合專城。羽檄は流星の如く、虎符は專城に合す。

喧呼救邊急。羣鳥皆夜鳴。喧呼、邊の急を救はむとし、羣鳥皆夜鳴く。

白日曜紫微。三公運權衡。白日、紫微に曜き、三公、權衡を運す。

天地皆得一。澹然四海清。天地、皆一を得、澹然として、四海清し。

借問此何爲。答言楚徵兵。借問す、これ何をか爲す、答へて言ふ、楚、兵を徵す。

渡瀘及五月將赴雲南征。 瀘を渡つて、五月に及び、將に雲南に赴いて征せむとす。
 怯卒非戰士。炎方難遠行。 怯卒は戰士に非ず、炎方は遠行し難し。
 長號別嚴親。日月慘光晶。 長號して、嚴親に別れ、日月、光晶慘たり。
 泣盡繼以血。心摧兩無聲。 泣盡きて、繼ぐに血を以てし、心摧けて、兩ながら聲なし。
 困獸當猛虎。窮魚餌奔鯨。 困獸、猛虎に當り、窮魚、奔鯨に餌す。
 千去不一回。投軀豈全生。 千去して、一も回らず、軀を投じて、豈に生を全うせむや。
 如何舞千戚。一使有苗平。 如何か千戚を舞はし、一たび有苗をして平かならしめむ。

【字解】(一) 羽徽 顧師古の漢書註に「徽は、木簡を以て書を爲り、長さ一尺二寸、用つて徵召するなり。その急事あるは、加ふるに鳥羽を以てして、之に挿み、疾速を示すなり」とある。多くの場合には、徵兵の書をいふ。(二) 虎符 後漢書に「舊制、兵を發する、皆虎符を以てす、その餘の徵調は、竹使符のみ」とある。地方の兵權を司る者に朝廷より下付せし割符。(三) 專城 一城を擅にするもの、守宰、即ち地方長官。(四) 紫微 大帝の座、即ち天子の常居。(五) 三公 司馬・司空・司徒を合稱す。韓詩外傳に「司馬は天を主り、司空は地を主り、司徒は人を主る、故に陰陽和せず、星辰度を失ひ、災變非常なれば、これを司馬に責む。山陵崩弛し、川谷流れず、五穀殖せず、草木茂らざれば、これを司空に責む。君臣正しからず、人道和せず、國に盜賊多く、下、その上を怨めば、これを司徒に責む」といひ、通典には、周は太師・太傅・太保を以て三公となし、漢は丞相・大司馬・御史大夫を以て三公となす。後漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・後魏・北齊、皆太師・司徒・司空を以て三公となし、後周は太師・太傅・太保を以て三公となし、隋は太尉・司徒・司空を以て三公となし、大唐これに因る」とある。(六) 天地皆得 老子に「天、一を得て以て清く、地、

一を得て以て尊し」とある。一とは即ち無爲の道。(七) 楚 南方一帯を汎稱す。(八) 瀘 水の名、もと高麗州の黒水、漢には瀘水、唐より以後は金沙江といつて居る。諸葛亮の出師表に「五月瀘を渡る」とあるは、即ち此地で、三四月の頃は、瘴氣殊に甚しく、これに中れば、必ず死ぬので、五月以後、やつと通行が出来る。白居易の新豐折臂翁の詩にも、聞道雲南有瀘水、椒花落時瘴煙起、大軍徒涉水如湯、未過三十人、二三死とある。(九) 夷方 南荒夷蕞の地。(十) 慘 痛ましむ。(十一) 光晶 光明に同じ。(十二) 舞千戚 書經に「帝曰く、あゝ、禹、有苗率は、汝、狙いて征せよと。三旬まで、苗氏命に違ふ。益、禹を贊けて師を班す。帝、乃ち誕に文德を敷き、千羽を兩階に舞はす、七旬にして有苗格る」とあり、藝文類聚に引ける帝王世紀に「有苗氏、國を負んで服せず、禹、これを征せむことを請ふ。舜曰く、我、德厚からずして武を行ふは、道に非ざるなり。吾が前の教由、未だしきなり」と。乃ち數を修むること三年、千戚を執つて之を舞はしむ、有苗、服せむことを請ふ」とある。

【題義】これは、古風十九首の中でも、最も時事に關係ある詩で、即ち雲南征伐に就いて、その無謀なることを刺つたのである。舊唐書に「南蠻の質子閣羅鳳、亡げ歸る。帝、怒つて之を討たむと欲す。楊國忠、蘭州の人鮮于仲通を薦めて益州長史となし、精兵八萬を率ゐて、南蠻を討たしめ、羅鳳と瀘南に戦ひ、全軍陥没す。國忠、その敗状を掩ひ、その戦功を敘し、依つて、仲通をして國忠の益部を兼領することを請はしむ。十載、國忠、權りに蜀郡都督府長史に知とし、劍南節度副大使に充てられて、節度の事に知たり。國忠、又司馬李宓をして、師七萬を率ゐて、再び南蠻を討たしむ。宓、瀘水を渡り、蠻に誘はれ、太和城に至つて、戦はずして敗る。李宓、陣に死す。國忠、又その敗を隠し、捷書を以て上聞す。仲通、李宓、再び討蠻の軍に與つてより、その徵發は、皆中國の利兵、然れども、

土風に于て便ならず、沮洳の陥るところ、瘴疫の傷つるところ、饋餉の乏しきところ、物故するもの、十の八九、凡そ二十萬の衆を擧げて、これを死地に棄て、隻輪返らず、人ごとに寃毒を銜めども、敢て言ふものなしといひ、新唐書の楊國忠傳には「國忠、國に當ると雖も、常に劍南召募使を領し、瀘南に遣戍す。餉路險乏、擧つて還るものなし。舊と勳家行を免するは、戦功を寵する所以、國忠、當行者をして、先づ勳家を取らしむ。故に士に闘志なし。凡そ、募法、奮ふを願ふものは之を籍す。國忠歳ごとに、宋昱、鄭昂、韋儂を遣し、御史を以て郡縣に迫促す、吏、窮して以て應ずるなし、乃ち詭つて餉を設け、貧弱者を召し、密に縛して室中に置き、絮を衣せ、械して送屯す。亡ぐるものは、送吏を以て之に代ふ。人人亂を思ふ。尋いで、劍南の留後李宓を遣し、兵十餘萬を率ゐて、閣羅鳳を討たしめ、西洱河に敗死す。國忠矯つて、捷書を爲つて上聞す。再び師を興せしより、中國の驍卒二十萬を傾け、踰屢遺すなく、天下これを寃とす」といひ、通鑑には「天寶十載夏四月、劍南節度使鮮于仲通、南詔蠻を討つて大に瀘南に敗る。制して、大に兩京及び河南北の兵を募り、以て南詔を撃つ。人、雲南に瘴癘多く、未だ戦はざるに、士卒死するもの十の八九なるを聞き、肯て募に應ずるなし。楊國忠、御史を遣し、道を分つて人を捕へ、連枷、送つて軍の所に詣る。晝制、百姓の勳あるものは、征役を免す。時に調兵すでに多く、國忠奏して先づ高勳を取る。ここに于て、行くもの愁怨し、父母妻子、これを送り、所在哭聲野に振ふ」とある。李白の此詩は、即ち其時の狀況を述べて、

感慨を寄せたのである。

【詩意】羽檄を以て、頻りに雲南征伐の兵を徵發することが、流星の如く急である。一城を獨占して居る地方長官で、兵權を兼ねたものは、朝廷から虎符を寄越し、若干の人数を出せといつて嚴命されるので、いづれの地方に於ても、邊境の急を救ふが爲に、大騒ぎである。ひとり、人のみならず、羣鳥までが、これに驚かされて、夜な夜な鳴いて騒いで居る。おもへば、今は開元天寶至治の世で、太平長く打續き、天子の御座所には、白日が照り耀き、三公の位には、立派な人が坐わつて居て、權衡を掌中に廻らし、天晴善い政治を施して居る。唐家の先祖たる老子が天地各一を得て清寧であるといはれたことは、恰も今の天下に當つて居る位で、澹然と澄み渡つて、四海皆治まつて居る。この太平の世界に於て、かくの如く騒ぎ出すのは、抑も、何の故であらうか。かく尋ねると、答へて言ふには、いや、それは外の事ではない、雲南に接近して居る楚地に於て、兵士が入用だといひ、これを徵發する爲に、かくの如く騒いで居るのである。たださへ、雲南は熱帯に近く、非常に暑い處であるのに、今しも、五月になつて、瀘水を渡らうといふので、その困難なことは、思ひやられる。そのみならず、中原は、既に疲弊し、勇悍なる戰士は、大抵討死をして、今残つて居るのは、役にも立たぬ弱い兵隊ばかりで、とても南方の暑い處へは行かれない。しかし、是非、遠征に出かけなければならぬから、死ぬ覺悟で父母に別をすると、その長號の聲は、天地を動かし、日月の光までも、慘澹とし

て、光明を失ふかと思はれる。かくて、涙盡くれば、繼ぐに血を以てし、遂に心も摧けて、聲さへ出ぬといふ位。その悲しさは、思ひやられる。かういふ怯弱な兵卒を以て、敵に向ひ、さて勝つ見込があらうか。たとへて言はば、極く弱つて居る獸を猛虎の前に驅り出し、窮して居る小さな魚を大きな鯨の前に出すやうなもので、一呑みに噬み殺されることは言ふまでもない。されば、千人出かけても、一人の回るものなく、一たび此に身を投ずれば、決して生を全うすることは出来ない。むかし、舜は一兵を動かさず、干戚を舞はして、威徳を振ふと、三苗の蠻族までも、その威徳に懐いて、皆之に服従したといふが、今日に於ても、どうか、さういふ風にありたい。しかし、戦はずして他を服すといふことは、到底出来ないことと思はれる。

【餘論】羣鳥皆夜鳴は、唯だ一句であるが、四海洶湧の状況は、眼前に見るが如く、且つ之があるが爲に、平板に陥るの弊を免れて居る。それから、如何舞干戚、一使有苗平は、前の白日曜紫微三公運三權衛に應じて、その結構、極めて面白く、且つ緊密である。蕭士賛は、この詩を細評して、「この詩は、蓋し雲南を討する時の作なり。首四句は、即ち兵を徵する時の景象を見て言ふ。五句より八句に至るまでは、是れ難を設けて謂へらく、この君明かに、臣良く、天清く、地寧く、海内灑然として四郊警なきの時に當つて、忽ち此舉あるは、果して何の爲めぞやと。九句より十二句に至るまでは、乃ち、白、これを人に問ひ、はじめて、兵を徵するは雲南の質子亡去の罪を討つことを知る。十三句

より二十二句に至るまでは、乃ち、白、逆め、當時調するところの兵、甲を受くるに堪へず、悲號して別るを知る、眞に謂はゆる市人を驅つて之を戦はしむ、困獸を以て虎に當らしめ、窮魚鯨に餌するが如し、吾、師の出づるを見て、師の入るを見ざるなり。末の二句は、南詔を比して有苗となし、深く夫の國に當るの大臣、益が禹を賛け、禹が舜を佐け、文徳を敷いて、以て遠人を來たすが如きこと能はず、軍を覆へし、將を殺すの恥あるを致すを嘆するなり」といひ、乾隆御批には「羣鳥夜鳴は、騷然の狀を寫し出す。白日の四句は、武を顯すの非を形容す。征夫の悽慘、軍勢の怯弱に至りては、色色顯豁、字字沈痛。結、徳化に歸す、自ら是れ至論。これ等の詩、殊に關繫あり、體、風雅に近し。杜甫の兵車行、出塞等の作と工力悉く敵し、軒輊すべからず。宋人羅大經、鶴林玉露を作り、乃ち謂へらく、白、歌詩を作爲するも、花月の間に狂醉するに過ぎず、社稷蒼生、かつて其心脊に繫がす、甫の憂國憂民に視ぶれば、年を同じうして語るべからず」と。この種の識見、まことに蚘蟬、大樹を撼かす、多く其量知らざるを見るなり」とある。まことに、この詩は、古風中の長篇であつて、殊に顯著なる史實に關係があるから、精細に玩味せねばならぬ。それから、乾隆御批が羅大經の無責任なる放言を駁して、一擊の下に打倒したのは、極めて痛快である。その語中に引ける蚘蟬撼大樹は韓愈が李杜の優劣を論じ、兎角、李白を下位に置きたがる世人の短見を嘲つた句で、ここに移して來たのは、極めて的確である。

醜女來效顰。還家驚四鄰。

醜女、來つて顰に效ひ、家に還つて四鄰を驚かす。

壽陵失本步。笑殺邯鄲人。

壽陵、本歩を失ひ、邯鄲の人を笑殺す。

一曲斐然子。雕蟲喪天真。

一曲斐然の子、雕蟲、天真を喪ふ。

棘刺造沐猴。三年費精神。

棘刺、沐猴を造り、三年、精神を費す。

功成無所用。楚楚且華身。

功、成つて、用ふるところなく、楚楚且つ身を華にす。

大雅思文王。頌聲久崩淪。

大雅、文王を思ひ、頌聲、久しく崩淪。

安得郢中質。一揮成風斤。

安んぞ得む、郢中の質、一揮、風斤を成すを。

【字解】【一】醜女來效顰 莊子に「西施心を病んで顰す、その里の醜人、見て之を美とし、歸つて、亦た心を排けて顰す。その里の富人、これを見、堅く門を閉じて出でず、貧人、これを見、妻子を挈へて之を去る」とある。【二】壽陵 莊子に「ひとり夫の壽陵の餘子の歩を邯鄲に學ぶを聞かずや。未だ國能を得ず、又その故行を失ふ、直に匍匐して歸らむのみ」とある。【三】斐然 韋を成す貌。【四】雕蟲 揚子法言に「或は問ふ、吾子少にして賦を好むや。曰く、然り、童子、雕蟲篆刻。俄にして曰く、壯夫は爲さざるなり」とある。【五】棘刺造沐猴 韓非子に「燕王、微巧を好む。衛人曰く、臣、能く棘刺の端を以て母猴を爲ると。王、これに悦び、美ふに五樂の奉を以てす。王曰く、吾、試に客の棘刺の母猴を爲るを觀む。衛人曰く、人主必ず之を觀むと欲せば、必ず中藏宮に入らず、酒を飲み肉を食はず、雨霽れ日出でて、これを晏陰の間に觀る、而して、棘刺の母猴、乃ち見るべし」と。燕王、因つて衛人を養ふも、その母猴を觀る能はず。邯鄲に臺下の治者あり、王に謂つて曰く、臣は削者なり、諸の微物、必ず削を以て之を削る

而して削るところは、必ず削りも大なり。今、棘刺の端、削鋒を容れず、以て棘刺の端を治め難し、王、試に客の削を觀ふ、能と不能と知るべきなり。王曰く、善し、と。衛人に謂つて曰く、客、棘刺の端を爲むるに削を以てす。吾、これを觀見せむと欲す。客曰く、臣請ふ、舍に之いて之を取らむ、と。因つて逃る。治人、王に謂つて曰く、計るに、度量なし、言談の士、棘刺の説多きなり」とある。削は削る道具。【六】楚楚 鮮明の貌。【七】頌聲 頌は風雅頌の頌で、神を祀る爲に特に作つた詩。【八】郢中質 莊子に「郢人、その鼻端を粟漫して、蠅の翼の若くし、匠石をして之を斲らしむ。匠石斤を運らし、風を成し、聽いて之を斲る、塵を盡して、鼻、傷かず、郢人、立つて容を失はず。宋の元君、これを聞き、匠石を召して曰く、試に寡人の爲に之を爲せ。匠石曰く、臣は嘗て能く之を斲る、然りと雖も、臣の質、すでに死す、夫子の死せしより、吾以て質と爲すなし、吾與に言ふなし」とある。質は、あて、即ち目あてとなすもの。

【題義】この詩は、世の詞賦を作るものが、その本領を了解せざることを嘲つたのである。

【詩意】むかし、醜婦があつて、美女が癩に惱んで胸の苦しい時に眉を顰めて顔をしかめた、それが却つて風情があつて美しいといふので、よせば善いのに、家に歸つて、その眞似をし、苦しくもないのに顔をしかめると、醜は愈よ醜、まるで化物のやうであつたから、四鄰の人は、驚いて仕舞つた。それから、壽陵といふ處の次男息子が行儀作法を趙の都の邯鄲に習ひに往つたが、まだ十分に修業が出来ないのに、從來の足なみを忘れたので、立つて歩けず、仕方がないから、四つ這ひに成つて、その故郷に還つたといふので、邯鄲の人の笑ひ草に成つて居る。かの斐然として文章ある子弟輩が、詩歌を作るも善いが、雕蟲の小技を弄し、つまらぬ細工ばかりするから、却つて、天真爛漫たる妙趣を

無くして仕舞ふ。それから、棘の刺の先端に猴を雕るといつた人がある。それは、もとより虚言であつたが、實際、三年の間、精神を費して成し得たに似たところで、何の役にも立たず、唯だ其人が物好きな人主の氣に入つて、俸祿を得、楚楚として、見事に其身を著飾るに過ぎぬ。要するに、つまらぬ技工は、いくら獨絶であつたにしても、實際價値の無いものである。かの大雅は、文王の功徳を賛したもので、まことに結構であるが、その後、全く嗣音なく、今日これを誦すれば、古しへを懐ふ情に堪へぬし、頌の一體は、更に立派なるものであるが、それが崩れ淪んでは、すでに久しいものである。ここに最も稱すべきは、匠石が郢人の爲に、その鼻に塗つた白堊を削り落したことで、その質が精良であつたから、斤を一たび運べば、さながら風を生ずるが如く、その技は、まことに神に入つたものである。詩を作るにしても、かくの如き入神の技が欲しいので、その以上は、何もいふべきことはない。

【餘論】蕭士贇の説に「この篇は、蓋し世の詩賦を作るものを諷する。これを藉つて、以て科第を取り、祿位を干むるに過ぎざるのみ、何ぞ世教に益あらむや。太白、かつて詩を論じて曰く、將に古道に復せむとす、我に非ずして誰ぞや」と。雅頌の作、太白自負するもの、かくの如く然り。安んぞ、雅頌の人、これを識ること、郢人の質、能く匠石の斤を運するに當るが如きを得むや」とある。

抱玉入楚國。見疑古所聞。

玉を抱いて楚國に入り、疑はれしは、古しへ聞くところ。

良寶終見棄。徒勞三獻君。

良寶終に棄てられ、徒勞、三たび君に獻す。

直木忌先伐。芳蘭哀自焚。

直木は先づ伐らるるを忌み、芳蘭は自ら焚くを哀む。

盈滿天所損。沈冥道爲羣。

盈滿は天の損するところ、沈冥、道、羣を爲す。

東海沈碧水。西關乘紫雲。

東海、碧水に沈み、西關、紫雲に乗す。

魯連及柱史。可以躡清芬。

魯連と柱史と、以て清芬を躡むべし。

【字解】(一)抱玉入楚國。卞和の故事、韓非子に「卞和、玉璞を楚山の中に得たり。奉じて之を楚の武王に獻す。王、玉人に示す。曰く、石なり、と。その右足を削る。武王歿して、これを文王に獻す。王、玉人に示す。曰く、石なり、と。その左足を削る。成王即位、その璞を抱いて郊に哭す。王、人をして之を剖かしむ、中、果して玉あり。乃ち和を封じて陵陽侯となす、和、就かず」とある。(二)直木忌先伐。莊子に「直木は先づ伐られ、甘井は先づ竭く」とある。(三)芳蘭哀自焚。金樓子に「蚌は珠を懐にして剖かるるを致し、蘭は香を含んで焚に遭ふ」蘭は木蘭で、香木である。(四)沈冥。前に見ゆ。(五)西關乘紫雲。紫雲は紫氣、關尹内傳に「關令尹喜は、關の大夫なり、天文に善し、樓に登つて四望し、東極に紫氣あるを見、喜んで曰く、應に聖人の過ぐるあるべし、と。果して老子を見る」とある。(六)魯連。前に見ゆ。(七)柱史。老子、周の柱下の史たりし故に云ふ。(八)清芬。清美芬芳の徳。

【題義】これは、感歎の詩で、士の用ひられぬは、もとより不幸、又用ひられても、まごまごすると

禍に遭ふ。そこで、魯仲連や、老子の如く、高舉遠踏するのが第一だといふ意を述べたのである。

【詩意】むかし聞くところに據れば、卞和といふ人が、玉璞を携へて楚國に入り、わざわざ之を楚王に獻じたところが、誰も之を見分けるものがなかつた爲に、折角の良寶も、終に棄てられて仕舞つた。そこで、無駄骨折をして、三度目に漸く玉だといふことが分つて、君の御手許に收まつたといふことである。士の不遇にして知己に遇はないのは、丁度、こんな様なものである。しかし、士たるものが偶ま用ひられても、動もすれば、その才が却つて累を爲すことがあるので、たとへば、木が眞直なるが爲に、却つて伐り去られ、香木が香を含むが爲に、燃やされるやうなものである。すべて、物事が十分であるのは、宜しくないもので、盈満になると、天から之を損する。又沈冥隱晦の域に至れば、長しへに、道と羣をなして、一處に居ることが出来る。されば、魯仲連は、東海を踏んで、碧水に沈まむとし、老子が西、關に入れば、紫氣が之に従つて來たといふが、この二人は、まことに、沈冥隱晦の處を得たもので、吾も亦た此等の人を學び、その清美芳芬の徳を繼ぎたいと思ふのである。

【餘論】蕭士贇の説に「この詩は、感嘆の詩なり。前四句は、士の知己に遇はざるもの爲に嘆するなり。直木忌先伐、芳蘭哀自焚」とは、才士世に用ひられ、進むを知つて退くを知らず、適ま以て其身を累するもの爲に嘆するなり。ここに於て、翻然として悟つて曰く、虧盈は天道なり、曷んぞ、沈冥隱晦、魯連柱史の高舉遠踏、道と羣を爲し、以て其身を保つに若かむや」とあつて、無論、李白が自己の理想を述べたのである。

が自己の理想を述べたのである。

燕臣昔慟哭。五月飛秋霜。
 庶女號蒼天。震風擊齊堂。
 精誠有所感。造化爲悲傷。
 而我竟何辜。遠身金殿旁。
 浮雲蔽紫闥。白日難回光。
 羣沙穢明珠。衆草凌孤芳。
 古來共歎息。流淚空沾裳。

燕臣、むかし慟哭すれば、五月、秋霜を飛ばす。
 庶女、蒼天に號せば、震風、齊堂を撃つ。
 精誠、感ずるところあり、造化爲に悲傷。
 而して、我、竟に何の辜か、身を遠ざく金殿の旁。
 浮雲、紫闥を蔽ひ、白日、光を回し難し。
 羣沙、明珠を穢し、衆草、孤芳を凌ぐ。
 古來共に歎息、流淚、空しく裳を沾す。

【字解】【一】燕臣、昔慟哭、論衡「都衍、罪なくして燕に拘へられ、夏五月に當つて、天を仰いで歎す、天、爲に霜を降す」とある。【二】庶女、號蒼天、淮南子に「庶女、天に叫んで雷霆下り撃ち、景公、蓋より墮ち、支體傷折し、海水大に出づ」とあつて、高誘の註に「庶女の女は、齊の寡婦、子なけれども嫁せず、姑に事へて謹敬。姑、男なくして女あり、女、母の財を利せむとし、母をして婦を嫁せしむ。婦、終に肯んぜず。女、母を殺して、以て婦を誣ふ。婦、自ら宛結を明かにする能はず、天に叫ぶ。天、爲に雷を降り、下つて景公の蓋を撃つて墮らし、景公の支體を破毀し、海水、これが爲に大に溢出するなり」とある。【三】衆草、天子の居るところ。【四】孤芳、芳草の孤生するもの。

【題義】これも、感嘆の詩であつて、李白が讒に遇うて放たれ歸りし後に作つたものと思はれる。

【詩意】鄭衍、燕に臣として忠を盡せしに拘はらず、讒に遇うて、獄に繋がれしに因り、天を仰いで慟哭すると、五月の盛夏、霜が飛んだといふことがある。又齊の一庶女が、小姑に誣ひられて、無實の罪を言ひ解くこと能はざりしに因りて、蒼天に號泣すると、風雷大に作つて、景公の臺を打ち砕いたといふ話。すべて、人の一心は偉いもので、精誠を以て感ずるところあれば、天地も爲に悲傷し、その爲に不時の變が起るものである。ここに、自分は、如何なる罪があつて、金殿の傍から、この身を遠ざけて、孑然たる一身、江湖に飄泊するやうに成つたか。浮雲は、天子の居ます宮闕を蔽ひ、白日爲に暗く、遂に光を回らし難きと同じく、小人が君の聰明を蔽へば、聖慮も決して本へ還すことが出来ない。かくて、多くの沙が明珠を覆し、さまざまの雜草が孤生の花を凌いで蔓ると同じく、小人どもは、勝手に黨を結んで跋扈し、少數の君子は、その爲に穢され、そして、小人は君子を凌いで、専横の振舞をするので、まことに、話にも成らぬ次第。かかることは、むかしから、毎毎ある事であつて、一たび之に出遇へば、誰しも嘆息し、涙流れて衣裳を霑すことを禁じ得ぬ始末である。

【餘論】蕭士資の説に「太白の此詩、その高力士、脱靴の恥を懷き、清平樂の詞の語を摘んで、貴妃に踏し、放黜せられしの時、作るところか。前八句は、興を引き、事を述べ、浮雲は力士に比し、紫闕は中宮に比し、白日は明皇に比す。その意、謂へらく、力士、これを貴妃に踏し、明皇復た貴妃の言を信じて之を疎んず。難回光とは、上の意、卒に回すべからざるなり。羣沙衆草は、以て小人に喩へ、明珠孤芳は、以て君子に喩ふ。古來共歎息、流淚空沾裳は、これ乃ち太白自ら解嘲するの辭、謂ふは、君子、小人に讒せらるるは、古しへより皆然り、豈に獨り今の世のみならむや、夫れ是の如くなれば、惟だ空しく自ら涙を流し、裳を霑し、以て吾が暗戀の意を寄すといふあるのみ。ああ哀んで傷らず、怨んで誹らず、太白の此詩蓋し之を得たり」といつて、善く其旨を盡して居る。なほ、一本には、悲傷の下に、而我竟何辜、遠身金殿旁の二句が無い。無くても、意義は略ぼ疏通するが、有つた方が更に明白である。

孤蘭生幽園。衆草共蕪沒。

孤蘭は幽園に生じ、衆草、共に蕪沒す。

雖照陽春暉。復悲高秋月。

陽春の暉を照らすと雖も、復た高秋の月を悲む。

飛霜早淅瀝。綠豔恐休歇。

飛霜、早く淅瀝、綠豔、恐らくは休歇せむ。

若無清風吹。香氣爲誰發。

もし清風の吹くなくんば、香氣誰が爲にか發する。

【字解】(一) 暉 日光。(二) 高秋 九月。(三) 淅瀝 細かに下る貌。

【題義】これは、前の碧荷生幽泉と同じ様な詩で、草木鳥獸に託して、その胸懷を述べ、孤蘭は

即ち自ら比したのである。李白は、一時、玄宗の知遇を得て、君前に咫尺する身分に成つたが、讒者の爲に放黜されたので、この詩あるは、もとより必然の事である。

【詩意】 蘭は國香とさへ稱して、香の高い草であるが、その生じた場所が宜しくなく、むなしく幽園の中に在るから、誰にも賞せられることなくして、つまらぬ衆草と共に蕪没して、枯れて仕舞ふ。無論、陽春の日は、これを照らして、花を咲かせるのであるが、九月の寒氣の爲に凋まされるのが、心配で堪まらぬ。すでに秋に成つたかと思ふ間に、霜が降つて来て、折角持つて生まれた綠豔の色は全く賞美されることなくして、休歇して仕舞ふ。唯だ一つ、清風が吹いて来て、蘭の香氣を四方に傳播して呉れば善いが、もし清風が吹いて來なかつたならば、折角の香氣も、何等の効果を成さずして終るのである。自分も、折角、一時は天子の知遇を得て、君側に咫尺したが、小人の讒言を受けて、放逐されて仕舞つた。唯だ一つ頼とするのは、知己の人の汲引であるが、さういふ人が無ければ、我が才藝も、何の役にも立たずに仕舞ふであらう。

【餘論】 蕭士贇は「これ亦た比興の詩なり。首兩句は、君子、野に在つて、未だ自ら衆人の中に抜く能はざるを謂ふ。三句より六句に至るまでは、王の知を蒙ると雖も、しかも、小人の讒譖するもの、すでに至るを謂ふ。孤寒の士、亦た是の如きのみ。末句、すなはち謂ふ。若し位に在るの人、類を引き奉を抜いて、薦めて之を用ふるに非ざれば、德馨ありと雖も、亦た何を以て自ら見はれむや」といひ、乾隆御批には「前に燕臣昔働哭の一章あり、これと俱に讒に遭ひ、放たれて作る。前篇は、哀んで傷らず、怨んで誹らず、尙ほ離騷悲痛の音に近し。此は、溫柔敦厚、上、風雅を追ふ」とある。

登高望四海。天地何漫漫。高きに登つて四海を望めば、天地何ぞ漫漫たる。

霜被羣物秋。風颿大荒寒。霜は被つて羣物秋に、風は颿つて大荒寒し。

榮華東流水。萬事皆波瀾。榮華は、東流の水、萬事皆波瀾。

白日掩徂輝。浮雲無定端。白日、徂輝を掩ひ、浮雲、定端なし。

梧桐巢燕雀。枳棘棲鴛鴦。梧桐に燕雀を巢はしめ、枳棘に鴛鴦を棲ましむ。

且復歸去來。劍歌行路難。且つ復た歸り去らむ、劍歌す行路難。

【字解】 一、四海。天下に同じ、支那人は其國が四方海で界されて居ると考へて居た。二、大荒。荒野の地。三、徂輝。落日の光。四、羣。羣は羣の誤であらう。莊子に「南方に鳥あり、その名は羣羣、南海より發して北海に飛び、梧桐に非ざれば止まらず、練實に非ざれば食はず、醴泉に非ざれば飲まず」とあつて、陸德明の註には「羣羣の屬なり」とあり、廣韻には「羣羣は風に似たり」とある。五、劍歌。劍を弾じて歌ふ。六、行路難。樂府の曲名、その詳は、後に見ゆ。

【題義】 これも、前の數章と同じく、自己の感懷を述べて、その不平に就いて慨嘆したのである。

【詩意】 高い山丘の上に登り、目を放つて眺めやれば、天地は漫漫として、果てしもない。頃しも、秋

の末、凜凜たる霜が降つたので、あらゆる草木は黄ばんで枯れかかり、颯颯たる西風は、いとも寒げに荒野を吹きめぐつて居る。天地間の物は、かくの如く、一たび榮えれば、やがて衰へるものと決まつて居る。されば、人間の榮華とても、いつまでも續くものではなく、東流の水、一たび逝いて、復た歸らざると同じく、萬事に常なく、有爲轉變の甚しきは、波が寄せては返し、返しては寄するやうなものである。太陽も、西に斜なる時分には、變幻定めなき浮雲に蔽はれ、わづかに落日の微光を剩すばかり。人君が晩年になつて、姦臣に其明を蔽はれ、政令常なきは、矢張かくの如くである。元來、梧桐には鳳凰が棲み、枳棘には燕雀が巢ふべき筈であるのに、今や冠履顛倒し、却つて、燕雀が梧桐に巢ひ、鸞鳳が枳棘に困んで居る。かの君子が位を失ひ、小人が得意に跋扈するのは、丁度こんな有様である。されば、自分は、今の世に居たとて、到底志を得ることが出来ぬから、劍を弾じて、行路難の一曲を歌ひ、そして、早く歸隱することにしようと思ふ。

【餘論】蕭士資の説に「この篇、登高望四海、天地何漫漫は以て、高見達識の士、時世の昏亂を知るに喩ふるなり。霜被羣物秋、風飄大荒寒は、以て陰小事を用ひて、殺氣の盛なるに喩ふるなり。榮華東流水、萬事皆波瀾は、謂へらく、時の此の如きに遭ふ、謂はゆる榮華は、水の逝くが如く、萬事の常なきは、亦た猶ほ波瀾の底止あるなきがごときなり。日は君の象、浮雲は姦臣、掩は蔽、徂輝は日落の光なり。以へらく、人君晩節、姦臣に其明を蔽はるる、猶ほ白日將に落ちむとし、浮雲の爲に

其輝を掩はるるがごときなり。無定端は、政令の常なきなり。梧桐巢燕雀は、小人、上位に在つて、志を得るに喩ふるなり。枳棘棲鸞鳳は、君子、下位に在つて、所を失ふに喩ふるなり。且復歸去來、劍歌行路難は、白の意、蓋し謂へらく、危邦には入らず、亂邦には居らず、時を識り、幾を知るの士、この際に當つて惟だ歸隱あるのみ」といひ、大體は善いが、何でも、毎句を政治的方面に引き付けやうとするから、少しく無理があつて、起首などは、特にさうである。そこで、王琦は、改めて説を爲し「登高望四海、天地何漫漫は、宇宙廣大の意を見る。霜被羣物秋、風飄大荒寒は、生計蕭索の意を見る。榮華東流水は、年華日に去つて、水の東流し、滔滔として返らざるが如きをいふ。萬事皆波瀾は、生事擾擾として、反覆相乗じ、水の波瀾、靜時あるなきが如きをいふ。白日掩徂輝は、日、將に落ちむとして光なく、人、將に去志あらむとして、意色不快なるが如きをいふ。浮雲無定端は、言ふは、人、世上に生まる、行踪原と一定するなし、何ぞ必ずしも此に戀戀たらむと。或は落日浮雲に掩はるるを以て、英明の人、讒邪に惑はさるるに喩へ、兩句、一意となして解するもの、亦た可。梧桐の木は、本と鳳凰の止まるるところにして、燕雀、その上に巢ふを得たり。小人志を得るに喩ふ。枳棘の樹は、本と燕雀の萃まるるところにして、鸞鳳反つて其間に棲む、君子、所を失ふに喩ふ。以上、皆景に即いて、感嘆を間に寓し、以て歸來の念を動かさざるを得ざるを見はす。おもふに、この時、太白投するところの主人、羣小に惑はされて、親禮せられず、將に之を去らむと欲して、

此詩を作る。舊註、時政昏亂、陰小事を用ふるを以て解となし、専ら朝政を指して言ふ、恐らくは、未だ是ならず」といつて居る。これは、劍歌といふに因つて、馮驩が孟嘗君の客となつて居たことを思ひ出し、そこで、投ずるところの主人云云といつたのであらうが、さうすると、起句の登、高望、四海、天地何漫漫云云などが、あまりに氣象瀾大にして、前後相應せぬやうな感がある。そこで、大體は、蕭士賛の説に従ひ、その解の面白からざる處に限つて、王琦の言を取つて、略ぼ上の如く解釋したのである。なほ、一本には、この詩の第四句より以下を殺氣落喬木。浮雲蔽層巒。孤鳳鳴天。遺聲何辛酸。遊人悲舊國。撫心亦盤桓。倚劍歌所思。曲終涕泗瀾に作つてあるが、これは、本文の方が、はるかに善いやうである。

鳳飢不啄粟。所食唯琅玕。

鳳は飢うるも粟を啄まず、食ふところは、唯だ琅玕。

焉能與羣雞。刺蹙爭一餐。

焉んぞ能く羣雞と、刺蹙して一餐を争はむ。

朝鳴崑丘樹。夕飲砥柱湍。

朝には崑丘の樹に鳴き、夕には砥柱の湍に飲む。

歸飛海路遠。獨宿天霜寒。

歸り飛んで、海路遠く、獨宿、天霜寒し。

幸遇王子晉。結交青雲端。

幸に王子晉に遇はば、交を青雲の端に結ぶ。

懷恩未得報。感別空長歎。

恩を懷うて、未だ報するを得ず、別を感じて空しく長歎。

【字解】(一) 所食唯琅玕。離騷の註に「南方に鳥あり、その名を鳳となす、天、爲に樹を生じ、名づけて琅玕といふ、高さ百二十仞、大さ三十圍、琳瑯を以て實と爲す」とある。琳瑯も、琅玕も、同一なるべく、即ち竹の實。【二】刺蹙。同促に同じ。【三】崑丘。崑崙、山海經に「西海の南、流沙の濱、赤水の後、黒水の前、大山あり、名を崑崙の邱といふ」とある。【四】砥柱湍。元和郡縣志に「砥柱山、俗名三門山、陝州硤石縣の東北五十里、黃河の中に在り。禹貢に曰く、河を積石を導いて龍門に至り、又東、砥柱に至る」といひ、その註に「河水分流、山を包んで過ぐ、山、水中に見はれ、柱の若く然るなり」とある。即ち龍門の附近、湍は早瀬、この二句、淮南子に「鳳凰、かつて高仞の山に遊ぎ、四海の外に翱翔し、崑崙の流園を過ぎ、砥柱の湍瀾に飲む」とあるに本づく。【五】王子晉。列仙傳に「周の靈王の太子、名は晉、好んで笙を吹いて、伊洛の間に遊ぶ、道士浮邱公、接へて嵩高山に上る。三十年後、白鶴に乗じて緱氏山頭に在り、手を舉げて時人に謝し、數日にして去る」とある。

【題義】これも、君側を遠ざけられた感慨を鳳凰に寄せたので、孤蘭生幽園などと同じであるが、世上の毀譽褒貶は、どうでも善いとして、唯だ一たび君の鑒識を被り、君の恩寵を受けながら、これに報することの出来ないのは、まことに残念だといふので、流石に詩人忠厚の本領を見るべきものである。

【詩意】鳳凰は、百鳥の王であるから、如何に飢ゑたとして、ただの粟などは、決して啄まない。鳳凰の食ふのは、琅玕の玉に比すべき竹の實に限られて居る。そこで、如何なる場合に於ても、羣がる雞と一所に、齧齧として一餐を争ふやうな、そんな吝な眞似は、一切しない。かくて、朝には、崑崙の

頂に聳ゆる高い樹の上で鳴き、夕には、黄河の中に突つ立つて居る砥柱の早瀬を飲むのである。それから、渺渺たる萬里の波濤を越えて飛び歸り、その宿とする處も、人世を遠く離れて居るから、空より降る霜も、寒げに覺ゆる。その獨宿して寒いことなどは、決して厭はぬが、唯だ曩に王子晉と交を青雲の端に結んで、その恩を受けたことがあるから、かくの如く、海路を飛び歸り、霜寒き深山などへ往つては、その恩を報ずることが出来ぬ、そこで、この人に別れるのが、いかにも残念だといふので、覺えず長嘆して居るのである。

【餘論】歸飛の二句で、一轉して悲哀の境に入り、その用筆が極めて巧妙で、すこしの無駄も無い。殊に自己の不得意が、天霜寒の三字に籠つて居る處は、極めて面白い。それから、王子晉は、帝室に關係ある人で、天子に咫尺するといふと、あまり憚多いから、わざと王子晉を借うて、その意味を顯はしたので、ここらは、洵に用意周到である。蕭士贊は「この詩、太白自ら比するの作たるに似たり。太白は、帝族にして、凡輩の儕しうすべきに非ずと雖も、然れども、孤寒疎遠、知章、これを薦めて、方に能く身を金鑿に致し、帝の知遇を蒙る、結交青雲端」と謂ふべし。この恩、未だ報せず、別に臨むの時、安んぞ、能く感歎せざらむや」といひ、乾隆御批には「前に鳳凰九千仞の一篇あり、これと皆、白自ら比す。恩を懷うて未だ報せず、別を感じて長嘆す、惓惓の誠、言表に溢る」とある。

朝弄紫泥海。夕披丹霞裳。

朝に紫泥の海を弄し、夕には丹霞の裳を披く。

揮手折若木。拂此西日光。

手を揮つて若木を折り、この西日の光を拂ふ。

雲臥遊八極。玉顏已千霜。

雲臥して八極に遊び、玉顏、すでに千霜。

飄飄入無倪。稽首祈上皇。

飄飄として、無倪に入り、稽首して、上皇に祈る。

呼我遊太素。玉杯賜瓊漿。

我を呼んで、太素に遊び、玉杯、瓊漿を賜ふ。

一食歷萬歲。何用還故鄉。

一食、萬歲を経、何ぞ故郷に還るを用ひむ。

永隨長風去。天外恣飄揚。

永く長風に隨つて去り、天外、恣に飄揚せむ。

【字解】(一) 紫泥海 洞冥記に「東方朔、去つて年を経て、乃ち歸る。母曰く、汝、行いて年を経て一たび歸る、何を以て、我を慰めむや。朔曰く、見、紫泥海に至る、紫水あり、衣を汚す、仍つて、廣淵を過ぎて洗滌す、朝に發し、中に返る、何ぞ年を経たりといふか」とある。(二) 丹霞裳 赤色の衣。(三) 若木 楚辭に折若木以拂日兮、朝暉遙以相羊とあつて、王逸の註に「若木は、崑崙の西極に在り、その華、下地を照らす。拂は撃なり。若木を折取し、以て日を拂撃し、これをして還り去らしむ。或は謂ふ、拂は蔽、若木を以て、日を蔽蔽し、過ぐるを得ざらしむ」とある。(四) 雲臥 雲に臥す。(五) 八極 八方、宇宙。(六) 千霜 千年。(七) 無倪 倪は際、即ち無邊。(八) 上皇 上帝。(九) 太素 列子に「太素は質の始」とある、即ち物質の出来る前、宇宙の元氣。

【題義】これは、游仙の詩で、前に見えたのと類似して居る。

【詩意】すでに仙術を修得し、朝には、紫泥の海に往つて戯れ、夕には、霞と見まがふ赤い衣を着て、自由に天空を飛び廻る。かくて、手を揮つて、崑崙の西に生ふる若木を折り、これを以て一たび拂へば、落ちかかつた太陽を招き回すことも出来るので、その通力は大したもののである。かくて、身は雲に臥した儘、精神を八極の表に遊ばしめ、顔色、玉の如く、千年を経ても、少しも變つた容子が無い。やがて、飄飄として、無際涯なる大空に驅け入つて、天宮に朝し、稽首して上帝に拜謁すると、上帝は、辱くも、我を召して、元氣の鍾まれる太素の境に遊ばしめ、結構な玉の杯に仙液を注いで、下し賜はつた。これを唯だ一度飲めば、萬歳の齡を得るといふので、どうして、今さら、塵の浮世の故郷に還らうか。願はくは、長風に隨つて飛び去り、飄揚として、勝手に天外を驅け廻りたいものである。

【餘論】蕭士贇の言に、「これは是れ遊仙の詩、然れども、比興を以て之を觀れば、亦た深意あり」とあるのみで、格別新しいこともない。唯だ起二句は、どうも不釣合だといふ説もあるので、蕭士贇は之を駁し、この篇は、人多く疑うて、兩句、起句に類せずと爲す、殊に知らず、正に是れ法を遺詩の體に取ることを。朝發鄴都橋、暮濟白馬津、朝發廣莫門、暮宿丹水山、朝日發陽厓、景落憩陰峰の類の如き、皆起句なり。而して、その文法は、又皆楚辭中より來る、朝發三朝於天津兮、夕余濟乎西極、朝馳予馬乎江皋、夕濟乎西極の如き、是れなり。この篇、自ら一首たること疑なし」といつて居る。

といつて居る。

搖裔雙白鷗、鳴飛滄江流。

搖裔たる雙白鷗、鳴いて飛ぶ滄江の流。

宜與海人狎、豈伊雲鶴儔。

宜しく、海人と狎るべし、豈に伊れ、雲鶴の儔ならむや。

寄形宿沙月、汎芳戲春洲。

形を寄せて沙月に宿し、芳に汎うて春洲に戯る。

吾亦洗心者、忘機從爾遊。

吾、亦た心を洗ふもの、機を忘れて、爾に從つて遊ばむ。

【字解】(一)搖裔、搖蕩。(二)與海人狎、列子に「海上の人、瀛島を好むものあり、毎旦、海上に之を、瀛島に從つて遊ぶ。瀛島の至るもの、百住にして止まらず。その父曰く、吾聞く、瀛島、皆汝に從つて遊ぶと。汝、取り來れ。吾、これを玩ばむ」と。明日、海上に行く、瀛島、舞うて下らず」とある。(三)雲鶴、雲中の鶴。

【題義】これも、託興の詩で、自ら白鷗を以て擬したのである。

【詩意】波の上に浮きつ沈みつする一雙の白鷗は、滄江の上に飛鳴して居る。この白鷗は、無心なる海上の若者と狎れて遊ぶべくして、仙人を乗せて飛ぶといふ雲中の鶴の類ではない。鷗は、あくまで閑散を好み、その行動は、すべて自在である。かくて、形骸を寄せて沙上の月に宿し、花の下に居て春の洲渚に戯れて居る。その長閑さは、他に其類を見ない位、吾も亦た塵心を洗ひ去り、浮世の機を忘れ、悠悠として、汝に從つて遊びたいものである。

【餘論】蕭士贇の説に「これ太白託興の詩なり。鮑照の詩に曰く、事作三野中之雙鳧、不願雲間之別鶴」と、詩意、實に此を祖とす。雲中の鶴は、乃ち仙官の控御に供するもの、以て在位の人に喩ふるなり。海上の鷗は、乃ち野人と狎玩するもの、以て閒散の人に喩ふるなり。太白、少にして、放逸の志あり、この詩、豈に翰林に供奉するとき、忽ち江海の興を動かして作れるか」とある。

周穆八荒意。漢皇萬乘尊。

周穆、八荒の意、漢皇、萬乘の尊。

淫樂心不極。雄豪安足論。

淫樂、心極まらず、雄豪、安んぞ論するに足らむ。

西海宴王母。北宮邀上元。

西海、王母を宴し、北宮、上元を邀ふ。

瑤水聞遺歌。玉杯竟空言。

瑤水に遺歌を聞き、玉杯竟に空しく言ふ。

靈跡成蔓草。徒悲千載魂。

靈跡は蔓草を成し、徒に千載の魂を悲ましむ。

【字解】【一】周穆、列子に「穆王、八駿に駕して、赤水の陽に至り、崑崙の丘に升つて、黃帝の宮を觀、王母に瑤池の上に騰す。王母、王の爲に詣り、王、これに和す」とある。【二】漢皇、太平廣記に「元封元年七月七日、王母、紫雲の轡に乗じ、九色の斑麟に駕して、漢宮に降り、東向して坐す。帝、跪いて寒暄を問ふ。畢るや、因つて帝を呼んで坐せしめ、侍女を遣し、上元夫人と相聞して云ふ、比る相見ること四千餘年、劉徹道を好む、適來つて之を觀る。夫人、しばらく來るべきや否やと。帝問ふ、上元は何の眞ぞや。曰く、是れ三天眞皇の母、上元の官と。俄にして、夫人至る、年二十餘ばかり、頭には三角髻を作し、餘髮は散垂して腰に至る。帝拜す。夫人曰く、汝、道を好むや、汝、胎性壽、胎性淫、胎性奢、胎性賤、胎性賊、五者常に榮衛の中に會す、長生を冀ふ

と雖も、亦た自ら勞するのみ」とある。【三】瑤水、瑤池、即ち王母の居るところ。【四】玉杯、三輔黃圖に「神明臺、武帝造る。仙人を祭る處、上に承露盤あり、盤に銅仙人あり、掌を舒べ、銅盤玉杯を舉げ、以て雲表の露を承け、露を以て玉屑に和し、これを服して、以て仙道を求む」とあるを引いてあるが、別に漢武故事に「上崩ぜし後、鄠縣に一人あり、市に於て、玉杯を賣す。吏、その御物たるを疑うて、之を捕へむと欲す。因つて、忽ち見えす。縣、その器を遂つて推問すれば、乃ち茂陵中の物なり。靈光、自ら吏を呼んで之を問へば、市人の形貌を説く、先帝の如し」とある方が當つて居る。

【題義】この詩は、周の穆王、漢の武帝を並舉し、これを借りて、玄宗の崩御を悼んだのである。玄宗は、豪奢を事とし、殊に神仙の道を好んだ其點が、二君に酷似して居るのを、これに擬したのも、決して虚泛ではない。

【詩意】周の穆王は、八駿の名馬に乗じ、造父を御となし、八荒の遠い處まで巡遊せられ、漢の武帝は、萬乗の尊位に居て、四海を経營された。穆王は、淫樂の心、極まらず、はては中原で満足せず、何か變つた處に往つて見たいといふ考を起したからであるし、武帝は、雄豪な人であつたが、その結果を觀れば、もとより論するに足らぬ始末である。穆王は、西海の端まで往つて、西王母と酒宴を催し、武帝は、北宮に於て上元夫人を迎へられた。二君ともに、その當時は、この上もない事だと思つて居られたらうが、穆王は、瑤池の宴が畢ると、やがて王母に別れを告げて還つて仕舞ひ、白雲の歌のみが残つて居るだけで、その樂は、決して再びすることは出来ないし、武帝は、間もなく崩御に成つて、茂陵に葬られ、その棺の中に收めた玉杯が、知らぬ間に、長安の市へ賣物に出たと

いふ話もあつて、いづれ誰かに墓を發かれたのであらう。して見れば、これ等の帝王と雖も、死後には一物の存するなく、折角の靈跡も、蔓草となつて、千歳の下、いたづらに人の魂を悲ましめるのは、誰しも皆同じ事で、殊に淫樂を縱にし、雄豪を以て自ら快としたとても、何にも成らぬ話である。

【餘論】蕭士贇の説に「當時、明皇、亦た神仙の事を好む、この詩、諷するところありといふ」とあるが、あまり十分ではない。そこで乾隆御批には「唐人、多く王母を以て楊妃に比す、杜甫の西望瑤池降王母の如きも、亦た然り、上元は、即ち秦虢輩を指す。末句、蓋し之を傷むなり」とある。「傷む」といへば、無論、玄宗崩御の事だといふ積りであらうし、且つ其方が痛切である。それから、この詩は、二君の事を隔句で分寫してあつて、周穆八荒意を第一句とし、第三、第五、第七の三句は、皆穆王の事に屬し、漢皇萬乗尊を第二句とし、第四、第六、第八の三句は、皆武帝の事に係つて居る。普通の作法ならば、穆王の事を初に四句で片付け、次に武帝の事を又四句述べるのであるが、これは、わざと交互に入れ違ひとなし、靈跡の二句で併せて、これを收束したので、その章法は、たしかに、一新機軸を出して居る。

綠蘿紛葳蕤。繚繞松柏枝。

綠蘿は葳蕤紛たり、繚繞す松柏の枝。

草木有所託。歲寒尚不移。草木、託するところあり、歲寒、尙はくは移らざらむ。

奈何天桃色。坐嘆葑菲詩。天桃の色を奈何せむ、坐して嘆ず葑菲の詩。

玉顏豔紅彩。雲髮非素絲。玉顏、紅彩豔なり、雲髮、素絲に非ず。

君子恩已畢。賤妾將何爲。君子、恩すでに畢る、賤妾、將に何をか爲さむとする。

【字解】【一】綠蘿、松蘿、ひめかづら、詩の類并に葛與ニ女蘿ニ施ニ于松柏トあるに本づく。【二】葳蕤、房房と垂れる貌。【三】天桃、天は少壯なる貌、詩の桃夭に、桃之夭夭、灼灼其華とあるに本づく。【四】葑菲詩、詩の谷風に習習谷風、以陰以雨、履勉同心、不宜有怨、采芣采芣、無以三下體、德音其遠、及爾同死とあるを指す。その序に「谷風は、夫婦道を失ふを刺るなり。舊人、その上に化し、新婦に淫して、その舊室を棄て、夫婦離絶し、國俗傷敗す」とある。

【題義】これは、詩經中の文字を巧に點綴し、それに因つて、おのが感懐を述べ、色衰へた爲に棄てられた婦人を以て、自ら比したのである。

【詩意】姫かづらは、いきいきとして緑鮮かに、紛然として房房と垂れ、それが丈夫さうな松柏の枝に巻きついて居る。姫かづらは、もとより非情の草木であるが、託するところを知り、そして、松柏は、歳寒うして猶ほ、其色を改めぬといふ勁節を有して居るから、姫かづらは、矢張おのが色も、亦た何時までも變らぬやうにと希つて居る。婦人が男子に嫁するも、矢張、この通りで、心を一つにして、何時までも變らぬやうにと願ふのである。かくの如く、長しへに變らじと希うて身を託した

のであるが、その顔色は、さながら、天桃の灼灼たるが如く、極めて美しきに拘はらず、わづかの間に、かの谷風の詩に在る如く、夫に棄てられて仕舞つた。もとより、色の衰へた爲に、愛が弛むのならば、仕方がないとして、その人は、色未だ衰へず、その玉顔は、花の如く紅の澤があるし、その髪は、雲の如く長く美しく、白い絲に變じたといふ譯でもない。然るに、君子の恩は、すでに畢つて、全く棄てられたのである。もとより棄てられる覺えが無いから、更に譯が分らぬが、最早、何とも致方の無い次第である。

【餘論】蕭士贇の説に「江淹の詩に、君子恩未畢、零落在中路」とあり、これ謂へらく、玉顔未だ改まらず、雲鬢未だ衰へず、しかも、君子の恩、中道にして絶ゆ、尚ほ何をか言はむや。詩に比あり、興あり、下情を抒べて諷諭を通ずる所以なり。當時、君臣夫婦の大倫、禮義に合はずして、終を克くせざるもの、有らざるところなし。太白の此詩、必ず爲にするあつて作るならむ」といひ、王琦は「古しへ稱す、色衰ふれば愛弛む、と。この詩、色、未だ衰へずして、愛、すでに弛むと謂ふ。感あつて發す。その寄諷の意深し」といひ、乾隆御批には「純ら比興を用ふ、亦た騷雅の遺、金鑾召對、託するあるを欣ぶ。中道にして放たる、去婦が盛顔鬢髮を以て答へられざるが如きなり。辭意、怨んで怒らず、旨を風人に合す。蕭士贇以爲へらく、爲にするところあつて作ると、殆んど未だ然らず」とある。つまり、蕭士贇は、他人の事を諷したといひ、御批は、専ら自己の境遇に就いて述べたものとし、

その怨んで怒らざる處を推賞したのである。

八荒馳驚颺。萬物盡凋落。

八荒 驚颺を馳せ、萬物盡く凋落。

浮雲蔽頽陽。洪波振大壑。

浮雲、頽陽を蔽ひ、洪波、大壑を振ふ。

龍鳳脫罔罟。飄飄將安託。

龍鳳、罔罟を脱し、飄飄として、將に安にか託せむとする。

去去乘白駒。空山詠場藿。

去去白駒に乘じ、空山、場藿を詠す。

【字解】【一】驚颺 暴風。【二】頽陽 落日。【三】大壑 莊子に「大壑の物たるや、注げども満たず、酌のども竭きず」とあつて、陸德明の註に「大壑は東海なり」とある。又列子に「渤海の東、幾億萬里なるを知らず、大壑あり、實に惟れ無底の谷、その下、底なし、名を歸墟といふ」とある。【四】罔罟 あみ、罟は鳥に用ひ、罟は魚に用ふ。【五】白駒 詩經の篇名、皎皎白駒、食我場藿、毛傳に「藿は苗なり」とある。

【題義】これは、李白が亂に遭ひしに因つて、超然高蹈の志を述べたのである。

【詩意】暴風、颺然として、一たび天地の間を吹きめくれば、ありとしあるものは、盡く枯れて凋んで仕舞ふ。仰いで望めば、浮雲飛び迷うて落日を蔽ひ、俯して見れば、大波が東海を振ひ動かし、萬象すべて慘澹。逆臣一たび起つて、四海兵戈に苦む模様も、矢張、これと同じである。かくて、龍や

鳳が幸に網を逃れた處で、飄飄として、どこへ往つて善いか分らない。自分も幸に難を免れたが、これから如何に爲やうか。もし明君が自分を用ひて呉れるならば、留まつて居ても善いが、然らざれば、白い馬に跨つて、この世を逃れ、そして空山へ往つて「わが場藿を食む」といふ詩でも歌つて居やう。

【餘論】蕭士贇は「この詩、前四句は、最も祿山の亂に遭ひ、乘輿播遷、天下驚擾するを指す。五句より末句に至るまでは、これ太白、難に罹り、身を脱し、羈囚して依託するところなきなり。然れども、太白も亦た人中の豪、時君卒に之を用ふる能はず、惟だ白駒の詩を詠じて、以て自ら遣らむのみ」といつて居る。

一百四十年、國容何赫然。

一百四十年、國容、何ぞ赫然たる。

隱隱五鳳樓、峨峨橫三川。

隱隱たる五鳳樓、峨峨として三川に横ふ。

王侯象星月、賓客如雲煙。

王侯は星月に象り、賓客は雲煙の如し。

鬪雞金宮裏、蹴鞠瑤臺邊。

雞を鬪はす金宮の裏、鞠を蹴る瑤臺の邊。

舉動搖白日、指揮回青天。

舉動、白日を搖かし、指揮、青天を回す。

當塗何翕忽、失路長棄捐。

當塗何ぞ翕忽、失路長く棄捐。

獨有揚執戟、閉關草太玄。

ひとり、揚執戟あり、關を閉ちて太玄を草す。

【字解】(一) 一百四十年、唐の武德元年より、天寶十四載まで、百三十八年で、ここでは大数を取つたのであるから、多分天寶の初年であらう。(二) 五鳳樓、唐書に「開元二十三年、上、五鳳樓に御して饗宴す」とある。(三) 三川、初學記、關中記に「涇と渭洛とを關中の三川となす」とある。(四) 關、前に見ゆ。(五) 蹴鞠、劉向別錄に「蹴鞠は黃帝の造るところ、本と兵勢なり、或は云ふ、戰國に起る」とあるし、漢書顏師古の註に「蹴は、足、これを蹴るなり。鞠は、韋を以て之を爲り、中、實たすに物を以てし、蹴鞠して戲となすなり」とある。(六) 當塗、揚雄の解嘲に「塗に當るものは青雲に升り、路を失ふものは流渠に委す」とある。(七) 翕忽、疾き貌。(八) 揚執戟、揚雄、曹植の書に「揚子雲は先朝執戟の臣のみ」とある、執戟は、侍郎の職。(九) 閉關、門を閉づ。(一〇) 太玄、書名、漢書に「哀帝の時、丁傳、董賢、事を用ひ、諸の之に附離するもの、或は家を起して二千石に至る。時に、揚雄、方に太玄を草し、以て自ら守るること泊如たり」とある。

【題義】これは、唐朝盛極まつて漸く衰運に向はむとするに際し、時尚の日に非なるを刺り、并せて、おのが操守に及んだのである。

【詩意】わが大唐の御世も、開國より、すでに一百四十年の久しきを経、今しも、國力强盛の絶頂に達し、國の光は、赫然として外夷にまで耀きわたつて居る。長安の宮城には、五鳳樓といふのが隱隱として簇り、しかも、峨峨として高く、涇渭洛といふ三つの河の間に横はつて居る。權勢の盛なるを矜る王侯輩は、星月の天上に輝くに象り、その家に入出入する賓客の夥しいことは、さながら雲

煙の如くである。太平の今日、行樂に餘念なく、或は金宮の中に難を闢はし、或は瑤臺の邊に鞠を蹴つて遊んで居る。天子も、かかる遊戯が非常に御好であるから、彼等の舉動指揮は、白日青天の下に、天子の視聽を動かすことが出来る。しかし、關雎蹴鞠を以て進む幸臣等は、その志を得て居るのも、ほんの束の間で、一朝寵を失へば、長しへに棄捐されて、復た用ひられず、まことに、氣の毒千萬の事である。そこで、吾は、古しへ執戟の微職に居た揚雄が、門を閉ちて、太玄の著述に耽つて居たと同じく、平生、浮世と絶縁して、ひとり清節を守つて居るのである。

【餘論】蕭士贊の説に「この篇、前六句の意は、梁鴻の五噫歌より出づ。大意に謂へらく、有唐、國を得るの久しきこと、かくの如く、國容の盛なること、かくの如く、王侯賓客、又かくの如し。謂はゆる金宮瑤臺は、正に賢を延くの地たるべくして、今は乃ち關雎蹴鞠の場となる。白日青天の天日は、以て其君に比す。關雎蹴鞠は、明皇の好むところ。これ等の人、志を得て事を用ひ、舉動指揮、以て主聽を搖動するに足るなり。當塗何翁忽とは、以てその蹊徑を得て之に依附するもの、以て翁忽にして暴貴なるべきに喩ふるなり。失路長棄捐とは、以てその蹊徑を得ずして之に依附せざるもの、棄捐に終りて用ひられざるに喩ふるなり。惟だ儒者のみは、獨り定守あり、門を閉ちて書を著すのみ。この詩は、時を刺るの作、亦た感ずるところあつて發するか」といつて居る。この中、當塗の二句を解して、關雎蹴鞠の輩に緣故を求めて依附すれば立身し、然らざれば棄てられるといつたのは、あまり

甚しく、且つ面白くないので、これは、元が關雎蹴鞠の輩であるから、その榮辱升沈も極めて早いといふ様に見た方が善いので、王琦は「太白の意謂へらく、この輩幸臣、その志を得るに當つても、翁忽の頃に過ぎず、一朝寵を失へば、長く棄捐して用ひず、蓋し恃むに足らざるの意を言ふ」といつて居る。なほ一本には、首句六句を帝京信佳麗。國容何赫然。劍戟擁三川。蓬萊象天橋。珠翠誇雲仙に作つてある。

桃花開東園。含笑誇白日。

桃花は東園に開き、笑を含んで白日に誇る。

偶蒙春風榮。生此豔陽質。

偶ま春風の榮を蒙つて、この豔陽の質を生ず。

豈無佳人色。但恐花不實。

豈に佳人の色なからむや、但だ恐る、花の實らざるを。

宛轉龍火飛。零落早相失。

宛轉として、龍火飛び、零落すれば、早く相失ふ。

詎知南山松。獨立自蕭瑟。

詎ぞ知らむ、南山の松、獨立自ら蕭瑟たるを。

【字解】【一】豔陽。春に同じ。【二】龍火飛。張協の七命に龍火西類とあり、漢書に「東宮は蒼龍房心、心を大火と爲す」とあつて、龍火は即ち大火、龍火飛とは、大火星が西に傾くといふことで、即ち秋になること。【三】蕭瑟。風の聲の淋しげなるをいふ。

【題義】これは、士の實行なきものが、偶然榮達したのを嘲つたのである。

【詩意】東園の桃李は、爛漫たる花を開いて、白日に向つて笑を含んで居る。桃李は、春風の御蔭に因つて、この豔陽の質を生じたのである。もとより、佳人に比すべき嬌麗なる色はあるが、唯だ花さくばかりで、實を結ばぬのは、いかにも物足らぬことである。かくて、一たび龍火が宛轉として西に顔れ、世が秋になれば、零落して、何も残つて居ない。これに比すれば、南山の松は、さすがに偉いもので、獨立して、さわさわと長風に鳴り響いて居る。

【餘論】蕭士贇の説に「これは、興の詩なり、謂ふは、士に實行なく、偶然榮達するもの、その寵衰ふるときは、棄捐に至り易し。君子の特操あるもの、獨立して、その節を改めざるに孰れぞや。その意、却つて、荀子の「桃李は一時に菁榮たるも、時至つて後に殺がる。松柏に至つては、隆冬を経て凋ます、霜雪を蒙りて變せず、その眞を得たりと謂ふべし」を祖とす。これを以て、古人詩を作る、皆學問中より來るを見るなり」といつて居る。

秦皇按寶劍。赫怒震威神。秦皇、寶劍を按じ、赫怒、威神を震ふ。

逐日巡海右。驅石駕滄津。日を逐うて海右を巡り、石を驅つて滄津に駕す。

徵卒空九寓。作橋傷萬人。卒を徵して九寓を空しうし、橋を作つて萬人を傷つく。

但求蓬島藥。豈思農屬春。但だ蓬島の藥を求め、豈に農屬の春を思はむや。

力盡功不贖。千載爲悲辛。力盡きて功贖はず、千載爲に悲辛。

【字解】【一】威神 神威に同じ。【二】海右 海の西岸。【三】驅石 三齊略記に「始皇、石橋を作り、海を過ぎて、日の出づる處を觀むと欲す。神人あり、能く石を驅つて海に下す。陽城の十一山、石盡く起立し、巖巖東に傾いて、相隨つて行く狀の如し。石去ること速ならざれば、神、輒ち之を鞭ち、石、皆血を流す」とある。【四】駕 架に同じ。【五】滄津 大海。【六】九寓 九州。【七】蓬島藥 前に見ゆ。【八】農屬 駕は屬に同じ。左傳に「九駕を農正と爲す」とあつて、その註に「屬に九種あり、春屬は如鷹、夏屬は如玄、秋屬は如藍、冬屬は如黃、隸屬は如丹、行屬は如暗、背屬は如噴、桑屬は如脂、老屬は如鷄、九屬を以て九農の號となし、各、その宜しきに隨つて以て民事を教ふ」とある。

【題義】これは、前の秦皇掃六合の一首と同じく、始皇の事を詠じたのであるが、多少の諷意は認められる。

【詩意】秦の始皇帝は、絶代の英主であつて、赫怒して神威を振ひ、天下盡く懾服した。それから四方に巡狩し、日を逐うて、だんだん東海の岸を通り、日の出づる處まで橋を架けて、そこへ往つて見たいといふので、九州から人夫を募集し、石を海中に投じて、橋を造りかけたが、どうしても、うまく行かず、その爲に負傷するものが、多かつた。それから、蓬萊山に在るといふ長生不死の仙藥を頻りに求め、春に成つて農業を獎勵するなどいふことは、少しも念頭に無かつた位。かくて、國力疲弊して、一も成功せず、やがて、始皇が崩御すると、間もなく、秦も滅亡して仕舞つたので、千歳の下、人をして悲辛の念に堪へざらしめる。

【餘論】蕭士贊の説に「この詩、時に於て亦た飄するところあり、秦を借りて喻と爲すといふ。これを言ふものは罪なく、これを聞くものは以て戒むるに足る、豈に之を小補すといはむや」とある。

美人出南國灼灼芙蓉姿。

美人、南國に出づ、灼灼たる芙蓉の姿。

皓齒終不發芳心空自持。

皓齒、終に發かず、芳心、空しく自ら持す。

由來紫宮女共妬青蛾眉。

由來、紫宮の女、共に青蛾眉を妬む。

歸去瀟湘沚沈吟何足悲。

歸り去れ、瀟湘の沚、沈吟何ぞ悲むに足らむ。

【字解】【一】南國、南方、吳越の地。【二】皓齒、白い齒。【三】不發、齒を開かぬ、即ち笑はぬこと。【四】紫宮、天子の居ます處、即ち宮中。【五】瀟湘沚、沚は僻雅に小渚とある。

【題義】これは、綠蘿紛葳蕤の一首と同じやうな意味であるが、彼が草木を借りて比と爲せしに對し、此は直接に寵を失つて宮中を出された美人の身の上を寫したので、暗に自己を以て之に擬したことは言ふまでも無い。

【詩意】南國に生まれた美人は、灼灼たる芙蓉の花が新に水を出でたるが如く、極めて鮮かに且つ美しい。この女は、宮中に入つて、君寵を得て居るならば、非常に樂しげに見ゆべき筈であるのに、

白い齒を開いて笑つたこともなく、芙蓉にも比すべき芳心を空しく持つて居るばかりで、絶えず思ひ惱んで居るのは、如何なる故ぞ。むかしから云ふ通り、宮中の女どもは、特に優れた美人が這入つて來ると、おのが寵を奪はれる虞があるので、嫉妬の餘り、これを排斥せむとして居る。この女も、一寸宮中に這入つては見たものの、とても他の嫉妬に堪へぬ處から、最早きつぱりと斷念し、故郷なる瀟湘の片ほとりへ歸らうとして居るので、いくら沈吟して、くよくよと思ひ煩つた處で、今さら仕方がない。

【餘論】蕭士贊は「これ、太白、讒に遭うて擯逐せられし後の詩なり。去就の際、かつて留難なし。然りと雖も、後人より之を觀れば、その志亦た悲むべし」といひ、乾隆御批には「これは、張垞輩の階毀を謂ふなり」とある。

宋國梧臺東野人得燕石。

宋國梧臺の東、野人、燕石を得たり。

誇作天下珍却哂趙王璧。

誇つて、天下の珍と作し、却つて趙王の璧を哂ふ。

趙璧無緇磷燕石非貞眞。

趙璧は緇磷なく、燕石は貞眞に非ず。

流俗多錯誤豈知玉與珉。

流俗、錯誤多し、豈に玉と珉とを知らむや。

【字解】 宋國梧臺東、野人得燕石、藝文類聚に關子を引いて「宋の愚人、燕石を梧臺の側に得て之を藏し、以て太寶となす。周客、聞いて觀る。主人、審すること七日、烟墨玄服、以て寶を發す、革匱十重、巾十襲。客見て、首を僂し、口を掩ひ、盧胡して笑つて曰く、これ特に燕石なり、瓦甕と殊ならず。主人大に怒つて曰く、商賈の言、醫匠の心なり」と。これを藏すること、愈々固しとある。【二】趙王璧、楚の卞和の璧で、後に趙王の手に歸した。【三】緇磷、論語に「磨して磷せず、涅して緇せず」とあつて、少しも瑕なく、且つ光明あること。【四】玉與珉、禮記に「君子、玉を貴んで珉を賤む、珉は石、玉に似て非なり」とある。

【題義】 これは、世俗が兎角短見であつて、すべて物の眞價、人の賢否を辨別せぬことを傷んだのである。

【詩意】 むかしから愚鈍の評判ある例の宋人が、梧臺の東に於て、詰まらぬ燕石を拾ひ、一圖に趙王の秘藏する卞和の璧にも優る天下の至寶だと思ひ込んで、折角、これを大切に居たといふ話がある。かの趙璧は、少しも瑕なく且つ光明爛然たるものであるが、燕石は、その質すでに堅貞清眞に非ず、もとより、三文の價値だに無きものである。しかし、かくの如きは、獨り一個の宋人ばかりでなく、滔滔たる末世の風俗として、物ごとに錯誤多く、玉と之に似て非なる珉とを全く判別せず、詰まらぬものを大切に、貴きものを打棄てるといふので、まことに慨嘆に堪へぬ次第である。

【餘論】 蕭士贇の説に「この詩、世の人、眞儒を識らず、しかも、假儒の人、反つて世に用ひらるるを得て、眞儒を非笑するを譏る。辭簡に、意明かに、古今の時病に中る。これを讀むもの、其れ將た斯詩に感ずるあるか」といつて居るが、しかし、何も必ずしも儒の眞假に限つた譯ではなく、汎く萬般の事物に通じて云つたものとする方が、穩當ではあるまいか。

の事物に通じて云つたものとする方が、穩當ではあるまいか。

殷后亂天紀。楚懷亦已昏。

殷后、天紀を亂し、楚懷、亦た已に昏し。

夷羊滿中野。葦蕪盈高門。

夷羊、中野に滿ち、葦蕪、高門に盈つ。

比干諫而死。屈平竄湘源。

比干は、諫めて死し、屈平は、湘源に竄す。

虎口何婉嬖。女嬃空嬋娟。

虎口、何ぞ婉嬖たる、女嬃、空しく嬋娟。

彭咸久淪沒。此意與誰論。

彭咸、久しく淪沒、この意、誰と論せむ。

【字解】 【一】殷后、后は君、封を指す。【二】天紀、天の紀綱。【三】夷羊、神歌、淮南子に「夷羊、牧に在り」といひ、許慎の註に「夷羊は、上神、商の將に亡びむとするや、商郊牧野の地に見はる」とある。【四】葦蕪、離騷に「葦蕪産葢、室兮、列獨離而不履」とあり、その註「葦は蕪蕪なり、葦は王芻なり、蕪は泉耳なり、三物皆惡草、以て讒諂に比す。室に盈つとは、朝に滿つるに喩ふるなり」とある。【五】比干、楚辭章句に「封、妲己に惑うて、精邱酒池を作り、長夜の飲、朝涉を斷所し、孕婦を刺刺す。比干、正諫す。封、怒つて曰く、吾聞く、聖人の心には七竅ありと。ここに於て、比干を殺し、その心を剖いて之を觀る」とある。【六】屈平、史記に「屈原、名は平、楚の同姓、楚の懷王の左徒たり。上官大夫、これと同列、寵を争うて、心に其能を害とし、因つて、之を讒す。王、怒つて、屈平を疏んす。後、これを湘江の南に遷す」とある。【七】湘源、湘江の上流。【八】虎口、比干が諫を以て死せしを虎口に陥りしに比す。【九】婉嬖、嬖の意。【一〇】女嬃、屈原の姉、數ば屈原の忠讒を戒めたことがある。【一一】嬋娟、牽引すること。【一二】彭咸、楚辭の王逸註に「彭咸は殷の賢大夫なり、その君を諫めしが、聽かれず、自ら水に投じて死す」とある。

【題義】この詩は、殷楚の末運より、比干・屈原の事に及び、忠貞の世に容れられず、むなしく禍に罹つたことを傷んだので、無論、時事に感じたものである。

【詩意】殷の紂王は、天の紀綱を亂し、楚の懷王も、亦た昏愚であつた爲に、二君ともに、その國を亡ふやうになつた。殷紂の末年には、夷羊といふ神獸が、牧野に見はれ、殷紂が後に此に敗軍する兆を示したし、懷王の時には、莖蕪などの惡草に比すべき小人が、朝廷に満ちて、頻りに權力を奮つて居た。かくて比干は、殷紂を諫め、餘り烈しくやつた爲に、遂に胸を剖かれて死し、屈原は、折角の才藝が累を爲し、同僚の上官大夫に讒せられ、とうとう、湘江の邊に放逐されて仕舞つた。比干は、虎口に陥るをも顧みず、ひたすら其君を顧慕し、東の間も忘れず、その爲に、覺えず極諫したのであるし、屈原は、その姉の女嬃に引き留められ、あまり正直にするのは、身の爲でないから、すこしは控へ目にせよといつて、ひどく叱かられた位で、賢者の心は世俗の人に分らず、却つて、その所行を非とせられる位。願れば、彭咸の如き賢人は、歿して、すでに久しく、この忠義の心を誰と共に論じやうか、今の世には、全く其人が無いから仕方がない。

【餘論】蕭士贇の説に「この詩は、比興の詩なり、これ張九齡を貶責する時に作れるか。殷后楚懷は時の昏君に比するなり。夷羊滿中野は、國、將に亡びむとして、妖孽乃ち出づるを謂ふ。莖蕪盈高門は、小人、朝に在つて、高位に據るに喩ふるなり。比干・屈原の竄死は、當時の忠臣諍士、直道を以

て貶責せらるるものに喩ふるなり。虎口何婉變は詩人嘆を興すの辭、曰く、忠諫の士、むしろ身を喪うて悔いず、死を視ること、歸るが如きは、果して何の爲すところにして然るか、亦た其君行を改めて、國、頼つて安からむを欲するのみ。世人その諫を以て身を亡すを悲み、女嬃の子を言るが如きもの、徒に多し。誰か能く彭咸の先後徳を合して、ともに心を論すべきが如くならむや。太白の此詩、哀思怨怒、時事に感ずるあつて作る、風刺諷諭の體、兼ねて之を盡せり。詩といひ、詩といふ、章句と云はむや」とある。それから、この詩は、前の周穆八荒意、漢皇萬乘尊と同一句法で、殷と楚との事を隔句に分敘し、そして、結二句を以て、これを收束したのである。

青春流驚湍。朱明驟回薄。

青春、驚湍に流れ、朱明、驟かに回薄。

不忍看秋蓬。飄揚竟何託。

秋蓬を看るに忍びず、飄揚、竟に何くにか託する。

光風滅蘭蕙。白露灑葵藿。

光風、蘭蕙を滅し、白露、葵藿に灑ぐ。

美人不我期。草木日零落。

美人、我と期せず、草木日に零落。

【字解】(一)青春、青は東方、春の位であるより云ふ。(二)驚湍、早瀬。(三)朱明、爾雅に「夏を朱明となす」とあり、郭璞の註に「氣赤くして光明かなり」とある。(四)回薄、めぐりぜまる。(五)秋蓬、秋に成つて枯れた蓬。埤雅に「蓬蒿は、草の理めざるものなり。その葉、散生して、蓬の如く、末は本よりも大、故に風に遇はば、輒ち抜けて旋る」とある。(六)光風、楚辭

の註に「光風とは雨已み、日出でて、風ふき、草木光あるをいふ」とある。【七】蘭蕙、ともに香草。一莖一花を蕙といひ、一莖數花を蘭といふとの説もある。【八】葵藿、葵はあふひ、藥用に供する。藿は豆の苗、又豆の葉ともいひ、食用に供する。【九】美人、時君を指す。

【題義】これは、歲月人を待たず、折角才を懐く身も、老いては、兎角、世に棄てらるるを傷んだのである。

【詩意】青春は、早潮の波に随つて容易に流れ去り、朱明の夏も、俄然廻り去つて仕舞つて、やがて秋と成つた。西風に吹き捲かるる蓬を見ては、飄揚として、何處ともなく飛んで行き、終に託するところなきかの如くである。それは未だしも、雨後に風吹きては、蘭蕙の花も碎かれて香も無くなり、白露冷に灑いで、葵や豆の葉など、いつしか枯れ、萬物、すべて凋落を免れない。人も亦た此通りで、たとひ、才徳ありとも、明君に遇はなければ、到底登庸せらるる機會もなく、草木の日に日に零落すると同じく、老いさらばひ、やがて、恨を呑んで死んで仕舞ふであらう。

【餘論】蕭士賛の説に「楚辭に結微情以陳詞兮、矯以遺夫美人、昔君與我成言兮、曰黃昏以爲期、羌中道而回畔兮、反既有此他志」といひ、又日月忽其不淹兮、春與秋其代序、惟草木之零落兮、恐美人之遲暮」といふ。この篇の詩意、全く此に出づ。美人は時君に況ふるなり。時、我を用ひず、老、將に至らむとす、才を懐いて世に棄てらる、悲しいかな」とある。

戰國何紛紛、兵戈亂浮雲。

戰國何ぞ紛紛たる、兵戈、浮雲を亂る。

趙倚兩虎鬪、晉爲六卿分。

趙は兩虎に倚つて鬪ひ、晉は六卿の爲に分る。

姦臣欲竊位、樹黨自相羣。

姦臣、位を竊まむと欲し、黨を樹てて自ら相羣す。

果然田成子、一旦弑齊君。

果然、田成子、一旦、齊君を弑す。

【字解】(一) 趙倚兩虎鬪、康順・簡相如の二人、はじめ相争ひしことをいふ、その詳は史記の本傳に見ゆ。(二) 晉爲六卿分、漢書の叔師古註に「晉の衰ふるや、六卿、權を擅にす。その後、范氏、中行氏、智氏滅びて、韓・魏・趙、その土田人衆を兼め、故に總じて六卿晉を分つといふなり」とある。なほ、其詳は、史記の晉世家に見ゆ。(三) 田成子、史記の齊世家に「田乞卒し、子常代り立つ、これを田成子となす。田成子、監止と俱に左右の相となりて、簡公に相たり。田常、心に監止を害とし、遂に監止及び其家人子我を殺し、併せて簡公を弑し、その弟平公を立て、遂に之に相とし、齊の政を專にす。曾孫田和に至り、はじめて諸侯となり、その君康公を海濱に徙す。康公卒して呂氏遂に其祀を絶つ」とある。(四) 齊君、齊の簡公。

【題義】これは、詠史の作であるが、權勢下に移れば、人君の位置も危く、遂に國家も滅亡するといふ意を逗露して、當時の失政を譏つたものである。

【詩意】戰國は、まことに紛紛たる亂世であつて、戰爭は絶え間なく、その勝敗、變化して、定まらざるは、浮雲の亂るるが如くであつた。かくて又、諸侯の國內に於て、權臣どもが互に相争つて居た。

趙には、廉頗・蘭相如が、その初互に反目し、將に兩虎の争を現出せむとしたが、これは、その後、仲直りをしたから、どうやら収まった。晉には、范、中行、智、韓、魏、趙の六卿が相並んで、權を弄し、その爲に、晉國は、とうとう分割されて仕舞つた。元來、姦臣が王位を竊まうとする時は、黨を立てて自然に羣を爲すのが常であつて、さうすると、國王は孤立の状態となり、やがて、弑せられて、國が亡ぶといふ順序である。現に田成子は、その先代から、私恩を賣り、齊國に於て、朋黨を樹てて居たので、遂に其君簡公を弑し、そして、曾孫田和に至つて、齊國を奪つて王となつた。これに就いても、人君は、決して實權を人に假してはならぬ。

【餘論】蕭士贇の説に「太白の此詩、それ天寶の間に作れるか。時に、上、東都より還り、從容として高力士に謂つて曰く、朕、高居無爲、悉く政事を以て李林甫に委ねむと欲す、如何。對へて曰く、天下の大柄は、人に假すべからず、彼威勢成らば、誰か敢て之を議するものぞと。上悦ばず。太白、時に微に其事を聞く、位卑く、分疎なり、諫めむと欲するも可ならず、故に是詩を作り、古しへを引き今に喻へ、以て其上を諷するか。太白が君を愛し國を憂ふるの意、亦た尙ぶべし」とある。次巻の樂府の首に載する遠別離の一首も、同じ事實に關係した詩であるから、宜しく、參照すべきである。

倚劍登高臺。悠悠送春目。

劍に倚つて高臺に登り、悠悠として春目を送る。

蒼榛蔽層邱。瓊草隱深谷。

蒼榛は層邱を蔽ひ、瓊草は深谷に隱る。

鳳鳥鳴西海。欲集無珍木。

鳳鳥は西海に鳴き、集まらむと欲するも珍木なし。

鸞斯得所居。蒿下盈萬族。

鸞斯は居るところを得て、蒿下に萬族を盈たす。

晉風日已頽。窮途方慟哭。

晉風、日に已に頽る、窮途方に慟哭。

【字解】【一】倚。佩びる。【二】送。春日。謝朓の詩に出沒眺樓雉、遠近送春日とあるに本づく、春の眺めを爲す。【三】西海。崑崙を指す。【四】珍木。珍異の木。【五】鸞斯。爾雅に鸞とあつて、郭璞の註に「鳳鳥なり、小にして多く羣がり、腹下白し、江東亦た呼んで鸞鳥と爲す」といひ、鄭樵の註に「亦た之を雅鳥といふ、蓋し雀類、差や小にして多く羣がり、穀粟を食ふ、俗、必鳥と呼ぶ」とある。【六】晉風日已頽。晉は魏晉の晉、晉書謝安傳の贊に「頽風日に扇り、雅道日に淪む」とある。【七】窮途。同書の阮籍傳に「阮籍、時に獨り駕して徑路に由らず、車跡窮まるところ、輒ち慟哭して歸る」とある。

【題義】これは、世、愈よ降つて、惡風頽俗、日に甚しく、殊に小人の跋扈して居るのを刺つたのである。

【詩意】劍を佩びて、高臺に登り、悠然春に乗じて眺めやれば、荆榛は盛に茂つて、重れる丘陵を蔽ひ、香草は唯だ深い谿谷に隠れて、人の目にも付かない。鳳凰は崑崙の丘に鳴き、さて止まらうとしても、ふさはしい珍木もないが、鸞鳥などは、時を得がほに鳴き騒いで、蓬蒿の下に、その同類を集めて居る。かくの如く、物事が兎角顛倒し、君子が位を得ず、小人が勢を選うるといふのが、

季世の狀態である。されば、阮籍は、晉の世の風俗が日に日に頹廢するを見て、車跡窮まる處に遇へば、自分の往くべき土地もないといつて慟哭したといふが、如何にも尤も至極の事である。

【餘論】蕭士贇の説に「この篇、首の兩句は、乃ち高きに居て遠きを見るの意なり。三句四句は、小人、高位に據つて、君子、野に在るに比するなり。五句より八句に至るまでは、蓋し謂ふ、君子亦た世に用ひらるるの意あれども、しかも、朝に在つて、君子の以て之に安んずるなく、反つて、小人の位を得、類を引いて、萬族の多きに至るに若かざるなり。末句は、晉を借りて喩と爲す。謂へらく、かくの如くなれば、君子道消え、風俗頹廢すること、居然として知るべし。阮籍の途窮まつて、然る後に慟哭するが若き、乃ち事を見るに晚きことなからむや。かつて、唐史を以て之を考ふるに、魏知古、上疏して、睿宗が城西・隆昌二公主の爲に、金仙玉真觀を造るを諫む、亦た「今、風教頹替、日に益す甚し」の語あり。すなはち知る、太白の此詩、古しへを以て今に喩へ、疑ふべきものなきを」といつて居る。なほ一本には、瓊草隱深谷の下の六句を翩翩衆鳥飛。翩翩在珍木。羣花亦便娟。榮耀非一族。歸來館途窮。日暮還慟哭に作つてある。

齊瑟彈東吟。秦絃弄西音。
慷慨動顏魄。使人成荒淫。

齊瑟は東吟を弾じ、秦絃は西音を弄す。
慷慨、顏魄を動かし、人をして荒淫を成さしむ。

彼女佞邪子。婉孌來相尋。

彼女の女佞邪の子、婉孌來つて相尋ぬ。

一笑雙白璧。再歌千黃金。

一たび笑へば雙白璧、再び歌へば千黃金。

珍色不貴道。詎惜飛光沈。

色を珍として道を貴はず、詎ぞ飛光の沈むを惜まむ。

安識紫霞客。瑤臺鳴素琴。

安んぞ識らむ、紫霞の客、瑤臺に素琴を鳴らすを。

【字解】【一】東吟、東方の歌。【二】西音、西方の音律。【三】顏魄、心顔に同じ。【四】婉孌、美なる貌。【五】飛光、日月。

【六】紫霞客、霞を餐する仙人。【七】素琴、琴の素朴にして、金玉珍寶を飾と爲さざるものをいふ。

【題義】これは、徒に外面の美に眩せられ、色を珍として、道を貴ばざる世俗の愚を嘲つたのである。

【詩意】齊國で出來た瑟を弾じて、東方の歌に合せ、秦地より出た絃を拂つて、西方の音律を弄し、聞く人に分かるやうに、又その氣に入るやうに、さまざまの曲を奏すると、案の如く、これを聞くものは深く感じ入つて、心顔を動かし、はては、荒淫の情を催すやうになる。かの美人は、佞邪なものであつて、巧に媚を呈し、人の意を迎へ、しなしなと風情ありげに妝つて來り尋ね、丁度前に言つた通り、齊瑟秦絃、乃至東吟西音を使ひ分けるやうにするから、相手の男の心を動かし、初に笑へば、白璧一雙を博し得、再び歌へば、千兩の黄金を貰ふといふ有様。美人の嬌冶は、もとより言を俟たざれ

ども、これに惑はされる衆人の不束は、愈よ以て甚しいものである。勿論、現代一般の風として、唯だ色の美なるを珍らしがり、道の貴きを知らず、つまらぬ事に打興じて、日月の沈み行くをも惜まない。かくの如く、なまめかしく心を蕩かす美人の音楽などに比すれば、霞を餐する仙人が瑤臺の上に坐して、琴を弾する、その聲の方が、はるかに貴く、且つ趣を得て居るのであるが、世人は之を解さないから仕方がない。

【餘論】蕭士贊の説に「この詩は興なり、世の光景に流連し、色を貴んで道を貴ばざるを刺る。有道之士、その事を高尚にする者の若き、又豈に世人の能く識るところならむや」とある。

越客採明珠。提攜出南隅。

越客、明珠を採り、提攜して南隅を出づ。

清輝照海月。美價傾皇都。

清輝、海月を照らし、美價、皇都を傾く。

獻君君按劍。懷寶空長吁。

君に獻すれば、君、劍を按ず、寶を懷いて空しく長吁。

魚目復相晒。寸心増煩紆。

魚目、復た相晒ふ、寸心、煩紆を増す。

【字解】【一】越客、越は南越、今の廣東、その地、天下の南に當つて、南海に臨み、中に珠池あつて明珠を産する。【二】獻君、君按劍、鄒陽の書に「明月の珠、夜光の璧、暗を以て人に投ずれば、人、劍を按じて相明せざるものなし」とある。【三】魚目、魚の目に似て、珠と見せしむるものなり。【四】寸心、方寸の心。【五】煩紆、思

亂ること。

【題義】これは、世人が眞假を辨へぬことを嘲つたので、前の宋國梧臺東、野人得三燕石の一首と、略は同じである。

【詩意】南方越國の人が、海底から明珠を拾ひ上げ、これを攜へて、南隅の其國を出て、やがて都に上つた。その珠は、もとより名だたる特産であるだけに、その清き光は、海上の月の照り輝くが如く、都を傾ける程、高い價がある。しかるに、越人が之を人君に獻すると、あまり光り輝くのが、不思議で、唯だ物ではあるまいといふので、劍の柄に手をかけ、身構へをして之を睨んだといふので、とうとう御氣に召さず、無論、恩賞の御沙汰もなかつた故に、越人は、すこすこと退出し、その寶たる珠を懷にして、長嘆したといふ。魚の目は、珠の形をして居るが、何等の價さへ無い。然るに、今の世では、却つて、此方が珍とせられる位で、その魚目は、越國の明珠を笑つて居る。君子が人君に召されず、却つて、小人どもに侮蔑されるのも、丁度、この通りで、これを思へば、方寸の心の中、頻りに思ひ亂れるばかりである。

【餘論】蕭士贊の説に「詩意、蓋し謂へらく、眞儒は世に遇せられず、しかも、儒の衣冠を假るもの、反つて位を得て晒笑す。眞儒の心、その煩憂、従つて知るべし。これ乃ち太白世を譏るの作なり」とある。

羽族稟萬化。小大各有依。

羽族は萬化を稟け、小大各依るあり。

周周亦何辜。六翮掩不揮。

周周、亦た何の辜、六翮掩うて揮はず。

願銜衆禽翼。一向黃河飛。

衆禽の翼を銜むを願ひしに、一たび黃河に向つて飛ぶ。

飛者莫我顧。歎息將安歸。

飛ぶもの、我を顧るなく、歎息、將に安にか歸らむとする。

【字解】【一】羽族、禽鳥。【二】稟萬化、宇宙の化育を受ける。【三】周周、韓非子に「鳥に周周といふものあり、首重くして尾屈す、將に河に飲まむとすれば、必ず顧み、乃ち羽を銜んで飲む。今、人の肌みて足らざるあるところのもの、以て其羽を愛せずんばあるべからざるなり」とある。【四】六翮、劉向新序に「鴻は六翮を修めて清風を凌ぐ」といひ、阮籍の詩に「天網彌四野、六翮掩不舒」とある。翮は羽の軸となる太い羽茎で、それが六本ある。

【題義】これは、鳥に託して、賢人同士で朝に在るものは、宜しく野に在るものを汲引すべき筈であるのに、今日さういふことを全然しないのは、慨嘆の極であるといふ意を漏らしたのである。

【詩意】禽鳥の類は、宇宙の化育を受け、大は鵬より、下は斥鷃に至るまで、それ相應に、各依託するところがある。ここに、周周といふ鳥があつて、首は重く、尾が軽く、六翮を開いて飛ぶことが出来ないのは、まことに氣の毒な事で、どんな罪を犯して、この様に生まれ付いたのか。その周周が、水を飲むときには、羽を銜へて貰つて、それから、河に臨むといふので、必ず力あるものに依るもの

と見える。しかし、この力あるものが、多くの周周どもが羽を銜へて呉れろと願つて居る間に、一向そんな事に頓著せずして、直に黃河に向つて飛び去つたならば、どうであるか。かくて飛び去つたものは、我が方を振り向かうともせず、そこで残れるものどもは、嘆息の極、どうしたら善いかと、さまざまに思ひ煩つて居るが、どうにも仕方がない。

【餘論】莊子の逍遙遊篇に、鵬と斥鷃とを並舉した次に「これ小大の辨なり、故に夫の知、一官に効ひ、行、一郷に比し、徳、一君に合して、一國に徴あるもの、その自ら視ること、亦た此の若し」とあつて、この詩の起二句、羽族稟萬化、小大各有依は、まさしく此に本づいたものであらう。蕭士贊の説に「この詩、全く莊子、韓子、二事の意を祖とし、鳥を以て喩となす。言ふは、小大各依託するところあり、周周の力なきものも、力あるものに依つて、羽を銜んで飲む。今、力あるもの、飛んで願みず、唯だ嘆息あるのみ、猶ほ野に在るの賢、位に在るの賢が同類を汲引し、以て若の祿に就けといふを望み、しかも、位に在るもの、卒に賢を進むるの心なく、志あれども自ら抜くこと克はず、茫として歸するところなく、唯だ嘆息あるのみと言はむがごときなり。余、因つて、發して之を明かにし、以て當世位に在るの賢、同類を引拔する克はざるものを愧かしむ」とある。

我行巫山渚。尋古登陽臺。

我、巫山の渚を行き、古しへを尋ねて陽臺に登る。

天空綵雲滅。地遠清風來。天は空しくして綵雲滅し、地は遠くして清風來る。
 神女去已久。襄王安在哉。神女、去つて已に久しく、襄王、安くにか在る。
 荒淫竟淪沒。樵牧徒悲哀。荒淫、竟に淪沒、樵牧徒に悲哀。

【字解】 巫山清 宋玉の高唐賦に「楚の襄王、雲夢の臺に遊び、高唐の觀を望む、その上、ひとり雲氣あり。王、玉に問うて曰く、これ何の氣ぞや。玉、對へて曰く、謂はゆる朝雲なるものなり。むかし、先王、かつて高唐に遊び、寤つて寤殿ぬ、夢に一婦人を見る、曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客となり、君が高唐に遊ぶを聞く、願はくは枕席を薦めむ、と。王、因つて之を幸す。去つて辭して曰く、妾は巫山の陽、高邱の組に在り、且に朝雲となり、暮に行雨となる、朝朝暮暮、陽臺の下、と。旦朝、これを視れば、言の如し。故に、爲に廟を立て、號して朝雲といふ。」王漁洋の記に「巫山は、形、絶えて巫の字に似たり。その東は即ち陽臺、縣治の西北五十歩に在り、高さ一百二十丈、二山皆土阜、殊に秀色に乏し、しかも、古今これを靈稱するは、楚の大夫の詞賦を以て重きのみ」とある。

【題義】 これは、多分、李白が夜郎に遷謫せらるる途すがら、巫山の下を過ぎ、古しへを弔つて作つたので、言はば、遊覽懷古の作である。

【詩意】 われ峽江を溯つて、巫山縣の汀邊に至り、やがて、陽臺に登つて、古しへを尋ねた。陽臺は、千秋の靈跡として、人口に膾炙して居るが、今來て見れば、天宇空濶にして、彩雲の影だに無く、地は僻遠にして、唯だ江上から清風が吹き來るだけである。神女の薦寝の事など、その有無、實は詳ならず、又假りに有つたとしたところで、すでに歲月を經過し、襄王も今は居ない。但し、襄王

荒淫の跡と稱する巫山の祠廟臺觀などは、すべて荒廢し、木こりや牧童をして、徒に悲哀の情を催さしむるばかりである。

【餘論】 蕭士贇の説に「この篇は、是れ太白南遷の時、巫山を過ぎ、古しへを懷うて作る。天空綵雲滅、地遠清風來とは、神女薦寝の事なきを謂ふなり。末の四句、時異に、事殊に、襄王の荒淫の若きもの、竟に已に淪替し、徒に遊牧の悲哀を興すのみ」とある。

惻惻泣路歧。哀哀悲素絲。
 路歧有南北。素絲易變移。
 萬事固如此。人生無定期。
 田竇相傾奪。賓客互盈虧。
 世途多翻覆。交道方嶮巇。
 斗酒強然諾。寸心終自疑。
 張陳竟火滅。蕭朱亦星離。
 衆鳥集榮柯。窮魚守枯池。

惻惻として路歧に泣き、哀哀として素絲を悲む。
 路歧には南北あり、素絲は變移し易し。
 萬事もとより此の如く、人生、定期なし。
 田竇相傾奪し、賓客互に盈虧。
 世途、翻覆多く、交道、方に嶮巇。
 斗酒強ひて然諾、寸心終に自ら疑ふ。
 張陳、竟に火滅し、蕭朱、亦た星離す。
 衆鳥は、榮柯に集まり、窮魚は、枯池を守る。

嗟嗟失懽客。勤問何所規。

嗟嗟失懽の客、勤問、何の規するところぞ。

【字解】 一 側例泣路枝、真真悲素絲。淮南子に「楊子、塗路を見て之を哭す。その以て南すべく、以て北すべきが爲なり。墨子、練絲を見て之を泣く、その以て黄にすべく、以て黒にすべきが爲なり」とあり。呂氏春秋にも「墨子、素絲を染むるものを見て、嘆じて曰く、蒼に染むれば蒼、黄に染むれば黄、入る所以のもの變すれば、その色亦た變す、五入して以て五色となる。故に染は慎まざるばあるべからざるなり」とあり。劉子にも「墨子の素絲を悲む所以、楊朱の路枝に泣く所以」とある。二 田實相傾奪。史記に「魏其侯實嬰、賓客を喜び、諸游子賓客、争つて魏其侯に歸す。武安侯田蚡、新に事を以て相となる。早く賓客に下り、名士の家居するものを進め、以て魏其の諸將相を傾けむと欲す。武安侯は、王太后の故を以て、親幸せられ、數ば事を言うて效多し。天下の吏士、勢利に趨るもの、皆魏其を去つて武安に歸す」とある。三 斗酒。一升の酒。四 張陳竟火滅、蕭朱亦星離。後漢書に「張陳、その終を因にし、蕭朱、その末を離す」とあつて、韋懷太子の註に「張耳陳餘、はじめ、刎頸の交を爲し、後、陳を構へ、耳は漢に従つて將と爲り、陳餘を泚水の上に殺す。蕭實、字は次君、朱博、字は子元、二人、友と爲りて當代に著聞す。後、陳あつて終へず。故に時に交を以て離しと爲す」とある。五 榮柯。葉の茂りたる枝。

【題義】 これは、交道の全からざることを嘆じたので、自分が君側を遠ざけられ、榮辱、その處を易へた後は、むかし親しかつた友達も、全く相手にして呉れぬといふ處から、慨嘆を爲し、そして、これを古風五十九首の最後に置いたものと見える。尤も李白その人が、かくしたので無ければ、この集の編纂者が特に意を用ひたので、いづれにせよ、泛然として無意味なものではない。

【詩意】 楊朱は、道の二つに歧れる處に立つと、惻惻として泣いたといふし、墨翟は、白い絲を見て悲んだといふことである。そは何故かといふと、道が二つに分れて居れば、南へも北へも行かれるか

ら、方向に迷ふといふのであるし、白い絲は、染めれば赤くも青くもなるから、その變り易いことに就いて悲んだのである。人間萬事、すべて、この通りで、絶對に定まれる時期といふものはなく、楊朱・墨翟が感嘆したのも、まことに、尤も至極なことである。漢の時の武安侯田蚡とか、魏其侯實嬰とかいふ人は、いづれも、外戚の親を以て、權柄を專にした人であつたが、はじめは、賓客が實嬰の方に集まり、後には、勢が強くなつたといふので、田蚡の方へ移り、自然に賓客の奪ひ合を遣つたやうな工合。人情の定まらぬことは、かくの如く、従つて、世途は極めて翻覆の多いものであるし、人間の交道も、平坦のやうに見えて、その實、險阻殊に甚しいものである。一升の酒を前に置いて、歡を交ふる時には、各、然諾を重んじ、肝膽相照らすやうなことを言つて居るが、それは、ほんの表面だけで、方寸の心の中に於ては互に相疑ひ、決して、胸襟を披いて打ちあけるといふことは無い。漢初に於ける張耳・陳餘の如き、初は刎頸の交を結んだが、その後、互に反目するやうになつて、折角の交情も火の如く滅し、後漢の蕭育・朱博の二人は、非常に仲が善かつたが、しまひには仇敵の想を爲し、星の如く離れて仕舞つた。これを見ても、交情は、到底、終を全うすることは出来ぬといふことが分る。人ばかりではなく、魚鳥でさへも、その通りで、日向に榮える枝には、衆鳥が羣がつて止まつて居るし、それと反對に、水の枯れかかつた池には、死に損ひの魚が其處を守つて居る。そこで、自分の勢が衰へれば、誰も尋ねて來ることもなく、たまたま我等と同じ憂目を見て居る人が尋ねて

来たところで、格別警醒するところもなく、規益するところも無い。元來、さういふ人は、一旦勢を得れば、もう此方を相手にすることも無い位で、我等とは、固より相異なつたものである。

【餘論】蕭士贇の説に「この詩は、市道を以て交るものを譏る、必ず當時爲にするところあつて作りしならむ。太白、難に罹るの餘、友朋の交道、その始終、一の如くなる能はずして、權門に奔趨するもの、諒に其れ多し。徒に一類失權の客あるのみ、勤勤として問勞するも、亦た何の規益するところぞや。この詩を観るもの、亦た以て人心の太古を知るべし」とある。なほ一本には、素絲易三變移の下の六句が、谷風刺三輕薄、交道方峻嶮の二句に作つてある。

これで、古風五十九首は畢つたのであるが、むかしから、全篇に就いて總評を下した人が段段あるから、試に、その一二を擧げて参考供することにする。朱子曰く、太白の古風兩卷、皆陳子昂の感遇中より來り、亦た全く其句を用ふる處あり。太白は、子昂を去ること遠からず、その尊慕、かくの如し。又曰く、太白の詩は、法度なきが如し、乃ち法度の中に從容す、蓋し詩に聖なるもの。劉克莊曰く、太白の作は、陳子昂感遇の作と筆力相上下す。唐の詩人、皆下風に在り。胡震亨曰く、太白の古風、その篇、子昂の感遇より富、嗣宗の詠懷よりも儉、その性靈を抒發し、規諷を寄託するは、實に相源流するなり。但し、嗣宗は、詩旨淵放にして、文に隱避多く、歸趣未だ測り求め易からず。

子昂は、淘洗過潔、韻は阮に及ばざれども、渾穆の象、尙ほ包含多し。太白六十篇中、時事を指言するに非ざれば、即ち感傷、すでに循徑に遺うて窺へば、又盡き易きを覺ゆ。これは、風氣の遞盛に役せられ、才情を以て相勝らざるを得ず、宣洩すれば、長律の往製を見る、未だ言表、外に繋がり、尙ほ議すべきあるを免れず、亦た時會然らしむ。後賢、果して前哲に及ばざるに非ざるなり。宋漫堂の詩説に曰く、阮嗣宗の詠懷、陳子昂の感遇、李太白の古風、韋蘇州の擬古、皆十九首の遺意を得たり。沈德潛曰く、太白の詩、縱橫馳驟。ひとり古風二卷、才を矜らず、氣を使はず、阮公の風格に原本し、伯玉感遇詩後、嗣音ありと。これ等は、皆その風格韻致を論じて、阮籍の詠懷から、はるかに系統を引いて居ることを斷定したのであるが、乾隆御批に至りては、その意象に就いて述べ、更に詳密にして、且つ切實である。曰く、辭旨明白、白の古風五十九篇、この篇を以て之を結ぶ、その述ぶるところを總ぶるに、遠くは嗣宗の詠懷を追ひ、近くは子昂の感遇に比し、その間、事を指すこと深切、情を言ふこと篤摯、纏綿往復、毎に言外の旨多し。白の流品、亦た其概を睹るべし。夫れ、開元天寶は、治亂迥に殊なり。林甫・國忠、相繼いで政を柄し、宵小朝に盈ち、賢人野に在り、卒に祿山の亂を致し、宗社幾んど墟す。白、個儻の才を以て、讒に遭うて放たる、江湖に放浪すと雖も、しかも、忠君憂國の心、未だ嘗て少しも忘れず、身世の感、一に詩に於て之を發す、諸篇の中、指數すべきなり。豈に風雅の嗣音、詩人の冠冕に非ずや。朱子、かつて歷代の詩を擇んで、一編となし、以て三百篇楚

309

65

辭の後を繼ぎ、而して、白の古風を以て、之が羽翼與衛と爲さむと欲す、蓋し以て之を取るあり。羣
兒の謗傷、何ぞ信するに足らむや、と。ここに、羣兒の謗傷といつたのは、宋人が口を揃へて、李白
は徒に飄逸なばかりで、少しも、忠君愛國の氣分がないといつて居ることに就いて、辨明したので、
まことに、搖動すべからざる千古の鐵案である。

終

